

FXメルマガ読者数日本一の
投資助言会社がつくった **結果にこだわるトレーダーのための**

23万
7958人

外国為替証拠金取引

徹底解説

FX投資

**永久
保存版**

図解
オールカラー
全128P

近畿財務局長(金商)第300号
発行：株式会社FPO

マスターガイド

ワンランク上の
攻めと守りの
トレードを
極める手引き

FXを完全理解。



もっと勝つ! ずっと勝つ!

◆はじめに

「多くのお金を手にして豊かな暮らしをしたい」「将来不安のない生活を送りたい」と誰もが思うものです。それらを実現するための方法はいろいろありますが、少なくとも今、あなたがこのレポートを読もうとしているということは、お金を殖やす手段としてFX投資が選択肢に入っているはずです。中には、すでに取引をした経験があるかもしれません。

FXは、少ない資金で大きな利益を狙うことができる魅力的な取引で、そのルールも至って簡単。「安く買って、高く売る」「高く売って、安く買い戻す」。これだけです。しかも、外国為替市場は24時間休まずに取引されていますから、ライフスタイルに合わせて投資を楽しむことができます。

そのため、外国為替相場が上がりつづけると、投資にまったく興味のない人たちが大挙してマーケットに押し寄せ、FXが熱狂的なブームになったことがあります。投資の勉強をしなくても、FX会社に口座を開き、お金さえ用意すれば、数千万から数億円の利益を手にする個人投資家が続出し、それがニュースにもなりました。

私たちも、そうした人たちを数多く見てきました。しかし、熱狂的なブームが去ると、せっかく手にしたお金をはき出してしまった投資家もいっぱい見てきました。なぜ、「見てきました」と過去形なのでしょう。それは、彼らが「FXで稼ぎ続ける正しい知識や技術」を身に付けず、「偶然、お金を儲けてしまった」に過ぎなかったからです。

一方、ブームであろうがなかろうが、投資でお金を稼ぎつづけている人たちがいます。仕事や家事をしながら投資で稼いだお金を元手に家を建て、次の目標に向かって進んでいる人もいれば、仕事を辞めてトレードだけで生計を建てている人もいます。短期間で大きな利益を手にするのであれば、「まぐれ」や「偶然」もあり得るでしょう。しかし、**安定した利益を投資で稼ぎ、なおかつ、そのお金で生活しつづけることは「まぐれ」や「偶然」でできることではありません。**

彼らに共通していえることは、「**投資で稼ぐ正しい知識とスキル**」をし

っかりと身に付け、大きな成果をあげた今でも、投資の勉強に時間を惜しまず、日々、努力をしつづけているところにあります。

そのため、投資でお金を稼ぎつづけることは、巷で言われるような“楽しんで稼げる”というものでは決してありません。「安く買って、高く売る」「高く売って、安く買い戻す」には、**お金を稼ぐ「仕組み」と「スキル」を“正しく”身に付ける努力が必要**だからです。そうすれば、成果は着実に上がり、FX投資がどんどん面白くなってきます。経済や金融のニュースも古く感じられるほど物知りになります。こうなれば、しめたものです。

最初は、経済や金融の話が難しそうに感じられることがあるでしょう。しかし、これらはすべて、あなたの身の回りで起きていることと、さほど変わりはありません。このレポートは、「FXには興味があるけれど、どこから始めれば良いか分からない」「何となく始めてみたけれど、最初からしっかり勉強しなおしたい」という方のために、多くの個人投資家を成功に導いた実績のある経験豊富なプロのトレーダー等が執筆しました。

一見すると難しそうなお話や金融のトピック、重要なFX投資のテクニックを豊富なイラストで図解し、“かゆいところに手が届く”内容になっています。もちろん、トレーディングでもっとも大切なタイミングの取り方から一般の解説書では書かれていないような内容まで、懇切丁寧に書いてあります。そのため、すぐに取引を始めたい方もありません。

しかし、「急いで事はし損じる」です。必ず、最後まで読み進めてください。そして、どこに何が書かれているかをしっかり覚えてください。それから、“実戦”開始です。

実際にFXを始めて分からないことや迷うことがあったら、このレポートを必ず読み返し、問題を解決してください。そうすれば、あなたの投資スキルはもうワンランク上がります。投資で成功する秘訣は、スキルアップのための勉強を怠らないことです。そして、投資の勉強に終わりはありません。事実、長年の投資生活で生き残ってきたこのレポートの執筆陣も、日々、研究を怠らず、トレード技術の向上に励んでいます。

本書を読まれた皆さんが、近い将来、豊かで将来不安のない生活・人生を手に入ることを願っています。

TABLE OF CONTENTS ①

はじめに 1

プロlogue **個人投資家がFXに注目する理由** 6

001 なぜ、個人投資家はFXに魅了されるのか? 7

002 素直な人ほど利益をあげられるのがFXの魅力! 8

003 儲けの期待だけでなく、グローバル経済が見えてくる 9

004 信用できる教材と頼れる情報源が何よりも大切 10

005 なぜ、今からFXを始める必要があるのか? 11

入門編

外国為替市場とFXの仕組みを学ぼう

第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう 12

001 「外国為替取引」とは「通貨と通貨を交換」すること 13

002 世界の「三大通貨」が外国為替取引の基本通貨 14

003 取引量の多い5つの通貨が「メジャーカレンシー」 15

004 2つの国の通貨で1組となる通貨ペア 16

005 世界の外国為替取引量は1日でおよそ300兆円 17

006 「円高・ドル安」「円安・ドル高」って、どういうこと? 18

007 それでも分かりにくい? 「円高・ドル安」「円安・ドル高」 19

008 どんな目的で外国為替取引を利用しているの? [1] 20

009 どんな目的で外国為替取引を利用しているの? [2] 21

010 どんな目的で外国為替取引を利用しているの? [3] 22

011 24時間、世界を駆けめぐる外国為替市場 23

012 世界最大の金融市場だからメリットがいっぱい 24

コラム ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール
「円高」になると、どうして日本は不況になるの? [1] 25

第2章 「FXの仕組みと基本」を理解しよう 26

001 正確な知識とスキルを身に付けることが儲けの近道 27

002 FXで儲ける方法はたったの2つ 28

003 取引するときは「まとめ買い」が基本 29

004 効率的に利益をあげる仕組みが「レバレッジ」 30

005 最初は間違いやすい「アスク」と「ビッド」 31

006 金利の高い国の通貨はスワップ金利が魅力 32

007 外貨預金より圧倒的に有利なFX 33

TABLE OF CONTENTS ②

008 円高でも儲けられるのがFX最大のメリットの1つ 34

009 FXで儲けるためには「4つのスキル」を理解しよう 35

コラム ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール
「円高」になると、どうして日本は不況になるの? [2] 36

第3章 FX会社に口座を開設するときの 目のつけどころ 37

001 FX会社を選ぶときはここに注目しよう [1] 38

002 FX会社を選ぶときはここに注目しよう [2] 39

003 FX会社を選ぶときはここに注目しよう [3] 40

004 FX会社を選ぶときはここに注目しよう [4] 41

005 投資の選択肢を広げるために商品ラインアップに注目 42

基礎編

FXを実践するための知識を身に付けよう

第4章 「経済と金利と為替」の関係を 理解しよう 43

001 お金が「活発」に動き回ると景気が良くなる 44

002 経済の調整弁の役割を果たすのが「金利」 45

003 金利を上げ下げするのは中央銀行の役割 46

004 世界の経済と金融市場に絶大な影響力を持つFRB 47

005 「金利の動き」を理解するには「国債の値段」に注目しよう 48

006 政策金利の変更を金融機関が「催促」する 49

007 中央銀行が国債を売買して金利を微妙に調節する 50

008 政策金利がゼロになったとき中央銀行はどうするの? 51

009 景気回復の証拠が整えば金融緩和は解除される 52

010 金利差は単なる「差」ではなく「どちらに向かうか」が大切 53

コラム ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール
量的緩和は諸刃の剣。不景気なのに物価が上昇する 54
良い金利上昇と悪い金利上昇 これってどういうこと? 55
国の借金が多いだけで金利は上がらない 56

第5章 「経済の動きを具体的に知る方法」を 理解しよう 57

001 経済の動きを細かに見ると景気と金利の先行き分かる 58

002 世界の経済を引っ張るアメリカの経済指標が最重要 59

003 「雇用統計」は景気のよし悪しを映す鏡 60

004 インフレの傾向を見るのに最適な「消費者物価指数」 61

TABLE OF CONTENTS ③

005	経営者の肌感覚が示す「ISM製造業景況指数」	62
006	景気の動向に敏感に反応する「新規住宅着工件数」	63
007	それぞれの国の経済指標も外国為替相場に大きく影響	64
008	経済指標を参考に政策金利を決定する中央銀行	65
009	国の経済全体の動きを示す指標も非常に重要	66
010	外国為替相場と密接な関係にある「貿易収支」	67
011	経済指標が良い結果でも事前予想より低ければ失望	68
012	事前の期待が大きければ相場はそれを先取りする	69

コラム ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール
景気が後退しているのに物価が上昇する厄介な経済 ----- 70

第6章 押さえておきたい 「取引の基本」 71

001	注文の出し方と決済の方法を理解しよう	72
002	最も重要な「指値注文」の仕組みを理解しよう	73
003	予想した方向と逆に動いても保険をかけておけば安心	74
004	チャンスを逃さず、想定外の損失も避ける方法【1】	75
005	チャンスを逃さず、想定外の損失も避ける方法【2】	76
006	取り損ないを避ける「魔法」の注文方法	77
007	基本的なトレードスタンスについて理解しよう	78

008	なぜ、トレードスタンスを守り続けたいといけないの？	79
009	投資家の手間を省くシステムトレード(自動売買)	80

実践編

FXで稼ぐテクニックを身に付けよう

第7章 FXに欠かせない「チャート分析」を 極めよう 81

001	為替レートの履歴書、それが「チャート」	82
002	たった1本のローソク足でも多くの情報が含まれている	83
003	チャート分析の基本はトレンドを見極めること	84
004	トレンドラインを引いて相場のトレンドを把握する	85
005	トレンド&チャネルラインを使ってタイミングを計る	87
006	チャネルラインを使ってトレンドの変化を先取りする	88
007	トレンドラインを下抜けると元に戻るの簡単ではない	89
008	トレンドラインを修正してトレンドの変化を確認する	90
009	チャートの山や谷に引くサポート&レジスタンスライン	92
010	サポート&レジスタンスラインを引く3つのルール	94

TABLE OF CONTENTS ④

011 数値でしっかり管理できるテクニカル指標 96

012 移動平均線はトレンドを測る便利なツール 97

013 サポート&レジスタンスラインとして移動平均線を使う 98

014 周期の異なる移動平均線の特徴を理解しよう 99

015 1本の移動平均線を使ってトレードのタイミングを計る 100

016 2本の移動平均線を使ってトレードのタイミングを計る 101

017 中長期移動平均線の向きに着目して精度を上げる 102

018 見やすさが個人投資家に人気のMACD 104

019 買われすぎと売られすぎが一目瞭然のストキャスティクス 105

020 使いこなしが難しいRSIはダイバージェンスに注目する 106

021 チャート分析を使ってトレードの成果を高めるには 107

コラム ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール
経済のグローバル化と外国為替相場の密接な関係 108
通貨安はメリットばかりではない 109

第8章 「通貨ペアの特徴」を理解して取引の精度を高めよう 111

001 通貨ペアの特徴を知ろう [1]——ドルストレートとクロス円 112

002 通貨ペアの特徴を知ろう [2]——ドル/円 113

003 通貨ペアの特徴を知ろう [3]——ユーロ/ドル 114

004 通貨ペアの特徴を知ろう [4]——ポンド/円 115

005 通貨ペアの特徴を知ろう [5]——豪ドル/円 116

006 リスク回避とリスク選好の奇っ怪な関係 117

007 値動きやチャートの相性から主戦通貨ペアを絞り込もう 118

コラム ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール
世界的な金融緩和と新興国の急成長の密接な関係 119
新興国の金融引き締めは先進国にとってマイナス 120

第9章 「マネー&メンタルマネジメント」を理解しよう 121

001 2つのスキルを身に付けたらお金と心の管理を徹底する 122

002 マネーマネジメントの本質はルールを守り続けること 123

003 相場で儲けるためには「負けない勝負」を心がける 124

004 心と身体が充実していないとトレードに集中できない 125

005 最低限でも、税金の知識を身に付けよう 126

あとがき 127

プロローグ

個人投資家がFXに 注目する理由

- 001 なぜ、個人投資家はFXに魅了されるのか? 7
- 002 素直な人ほど利益をあげられるのがFXの魅力! 8
- 003 儲けの期待だけでなく、グローバル経済が見えてくる 9
- 004 信用できる教材と頼れる情報源が何よりも大切 10
- 005 なぜ、今からFXを始める必要があるのか? 11

プロローグ 個人投資家がFXに注目する理由

001

なぜ、個人投資家はFXに魅了されるのか？

株式に比べて普段から馴染みの深い存在が「外国為替」。FXが登場して、外国為替と気軽に向き合えるようになったのですから、これを見逃す手はありません。これまで投資とは無縁だった様々な人たちが、外国為替取引を楽しむようになってきました。

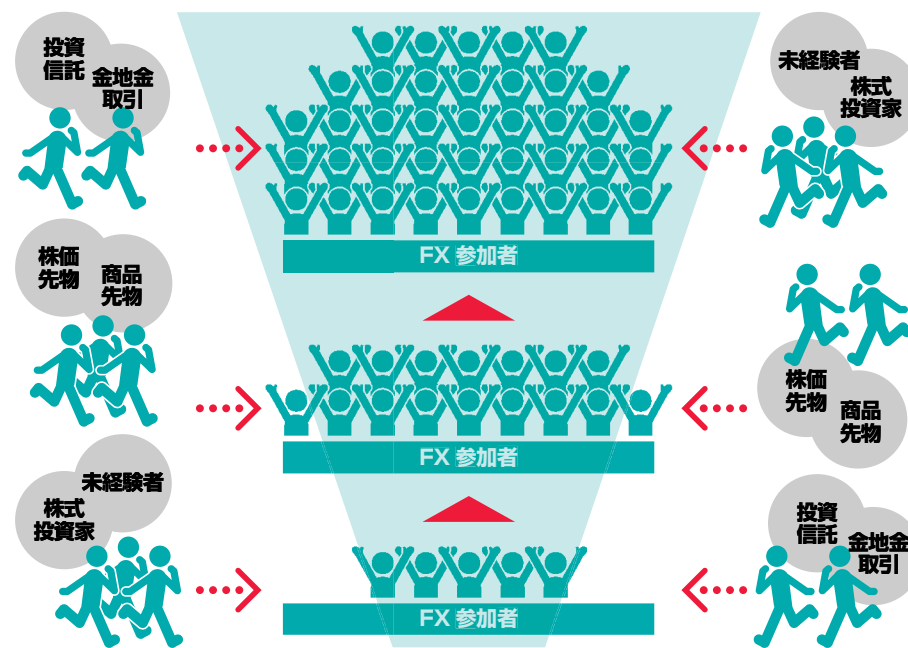
投資といえば、以前は株式か投資信託が主流でした。しかし、1998年に外国為替証拠金取引（FX）が日本に登場すると、その後はFXが加速度的に普及し、個人の間ではFXが投資の代名詞的な存在になりました。

「外国為替」は、海外旅行に行くときに円をドルやユーロに「両替」することから、もともと個人にとって身近な存在でしたし、高い金利が魅力の「外貨預金」も投資商品として注目されていました。

つまり、「**外国為替**」は**普段から馴染みの深いものだけに、個人投資家が注目ようになったのは当然**なのかもしれません。

▶▶一般の主婦がFXで4億円の脱税!!

特に、個人投資家の間で話題になったのは、投資とはほとんど無縁の主婦がFXで8億円もの利益を手にし、4億円の脱税で逮捕されたことが報じられてからです。それ以降、億単位の利益を申告しない個人投資家が相次いで税務署から摘発されると、これまで投資経験のない人たちが外国為



替取引に興味を持ちはじめました。

FXが注目された理由は、他にもあります。2006年にベンチャー企業のちようじ寵児として注目されていたライブドアの堀江貴文社長が、東京地検特捜部に逮捕されると、それまで隆盛を極めていた新興株式市場の信用が失墜。個人投資家は思うように儲けられなくなりました。これをきっかけに株式投資家も外国為替市場に流れ込み、飛躍的に取引参加者が増えたのです。

さらに、投資信託やETF（上場投資信託）に投資したり、株価や商品の先物を取引したり、安全資産としての金地金を買ったりする人たちが外国為替取引に参加したことも普及が進んだ理由です。このように、これまで投資に無縁だった個人だけでなく、さまざまな投資経験のある人たちが参加したことで、日本のFX市場がみるみるうちに成長したわけです。

FXは、数万円という少額で取引することができるだけでなく、グローバル経済を理解するのに役立つことも、一般の投資家を魅了した大きな理由であることは言うまでもありません。

002

素直な人ほど利益を
あげられるのがFXの魅力！

投資というと、「一般の人には理解できない儲けの極意」があるかのように言われます。しかし、投資の世界で成功した人たちは皆、「基本に忠実に、それをできる限り守り続けた」と、同じようなことを口にします。何も複雑なことはありません。素直な心を持つ、これが成功への第一歩です。

投資というと、「専門知識を身に付けたり、長い経験がないと上手くいかないのでは？」と考える人が多いものです。しかし、外国為替取引に限って言えば、投資のプロばかりが利益をあげているわけではありません。長年の経験から来る「癖」や「勘」が邪魔をして、意外にうまくいかないことがあるからです。

逆に、**初心者でも、素直で探求心の旺盛な人ほど利益をあげやすいのがFX**です。前項では、これまで投資に無縁だった主婦が億単位の利益を手にしたことを紹介しましたが、これがその証といえるでしょう。

▶▶ 情報過多に陥らず、基本に忠実に

大切な自己資金を投資の元手にするわけですから、外国為替取引や経済の基本的な仕組みを理解する必要があります。しかし、外国為替は日常生活で非常に身近な存在ですから、これまで経済について勉強した経験がなくても、理解できるようになります。

Q:なぜ、「投資や経済に無縁だった主婦」が
億単位の利益をあげられたのか？

秘伝の極意や独自のセンスがなければFXで儲けられないらしい



「欲」と「情報」に
負けた人

- 負けた人の言い分
- ネガティブ情報が氾濫

----- 儲けられる(成功)か、儲けられない(失敗)かの境目 -----

探求心や好奇心が旺盛で投資の基本を素直に受け入れられる人が儲かるケースが圧倒的



「欲」に打ち勝ち
「情報過多」に陥らなかった人

- 儲けた人は口が堅い
- 欲を抑え投資に専念

また、外国為替は日常生活に身近な分、学べば学ぶほど、取引すればするほど、興味が湧いてきますし、面白く感じてくるはず。知的好奇心が旺盛な人ほど資産を殖やすチャンスが膨らむというわけです。ただし、「儲けたい！」という気持ちが強すぎるのも考え物。人は、「より多くのお金を手にしたい」「贅沢な生活を送りたい」と望むものです。この気持ちが強すぎると、「もっと儲けられる情報が欲しい！」となります。

インターネットが普及して、個人投資家もさまざまな情報を簡単に手に入れられるようになりました。しかし、メリットがあれば、デメリットもあります。情報が多いということは、その善し悪しを見極める目が求められるからです。言い換えれば、**外国為替取引で勝つことは、情報の取捨選択ができる鋭い目を養うか、しっかりとした投資技術や数少ない情報でも相場の行方を予測することができる方法を身に付ける必要があります**。本書では、その2つをできるだけ基本に忠実に紹介しています。焦らず、儲けることへの欲を抑えながら、しっかりと読み進めてください。

003

儲けの期待だけでなく、
グローバル経済が見えてくる

「何しろ、おもしろい！」

これが、FXを始めた人たちの感想です。「利益」を求めることができるだけでなく、日本や世界の経済・金融のことが手に取るように分かってきたからです。これでお金が殖えれば、一挙両得ですね！

個人投資家がFXを始める動機は「儲けたい」「お金を殖やしたい」ことにつきますでしょう。「億単位の利益をあげた」という話を聞くだけでも立ってもいられず、「一攫千金」を夢見て、多くの方がFXの世界に入ってきます。

しかし、FXは利益をあげることだけがメリットではありません。グローバルマネーが火花を散らす外国為替市場に皆さんが参加することは、同時にグローバル経済の大海原に乗り出すことなのです。

▶▶▶ 四苦八苦している経済新聞がスラスラ読めるようになる

書店などでは、「経済がよく分かる本」「金融の仕組みがみるみる分かる」といったタイトルの本がうずたかく積みまれています。そして、どの本もとてもよく売れているそうです。経済や金融の仕組みを知って、仕事などに生かしたいという姿勢の現れなのでしょう。

しかし、「経済は生き物」。基本的な知識を「本」で身に付けても、それ



ほど役に立ちません。経済や金融の動きを理解するためには、やはり実体経済の動きと変化を常に見つづける必要があるからです。

そこで、FX。刻一刻と動く為替レートを目の当たりにしながら、主要各国の世界戦略がどのように変化し、グローバル企業がどう動くかを予測することで「経済をよく知る」ことができるようになります。

リーマン・ショックを経験した後の先進各国は、一向に回復しない景気に苦しんでいます。そこで、通貨を安くして景気浮揚を図ろうと激しい争いを繰り返しています。「金融戦争」という言葉が新聞紙面を飾るほどです。FXを通してグローバル経済を見ることで、なぜ金融戦争が起きているのか、そもそも、リーマン・ショックやギリシャ・ショックはなぜ起きたのかが手に取るようになってきます。

そして、四苦八苦して読んでいた経済新聞がスラスラと読めるようになるだけでなく、「なんだ！ 情報が遅いな〜」とを感じるようになるでしょう。FXを始めることには、こんな「想定外」の付加価値もあるんです。

プロローグ 個人投資家がFXに注目する理由

004

信用できる教材と 頼れる情報源が何よりも大切

投資教育や金融知識のことを「金融リテラシー」と言います。投資を始めればばらくすると、手っ取り早く儲かる方法を探ようになります。しかし、短絡的に儲けようとするれば、お金を失う確率も同じだけ高まります。しっかりとした金融リテラシーを身に付けることが、投資に勝つ秘訣です。

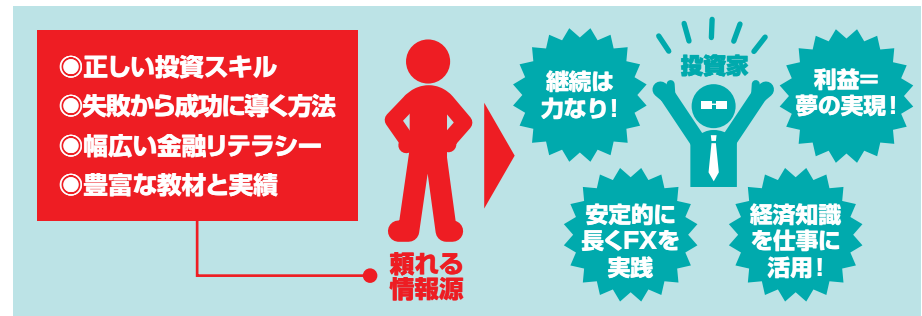
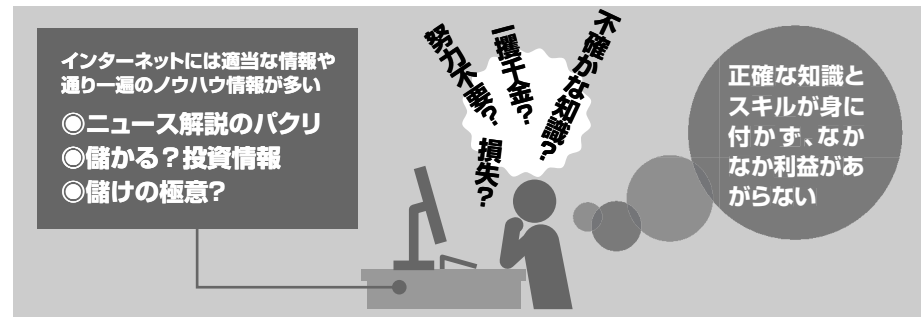
何を学ぶにも、基本をしっかりと理解し、そこから自分流のノウハウを身に付けることが大切。しかし、そのためには、信用できる教材と頼れる情報源が必要です。

なぜ、このような当たり前のことを書くかという、「適当」な情報や「通り一遍の情報」を発信する人たちが非常に増えてきたからです。中には、トレード経験がほとんどなかったり、中途半端なスキルしか身に付けていなかったりする自称「投資のプロ」が数多く存在し、本の著者やセミナー講師として、幅広く「活躍？」しています。

そのため、何が基本かも理解しないまま誤った知識を身に付けてしまい、「なかなか儲からない」「損ばかりしている」投資家がいることも事実です。

▶▶個人投資家がしっかり教育を受けられるプログラムが重要

いまや、投資もインターネットで行う時代ですから、FX会社の営業マンに利益をあげる方法や売買のタイミングを気軽に聞くこともできませ



ん。仮に聞けたとしても、それが必ずしも当たるとは限りません。つまり、個人投資家は、頼れる情報源を常に確保しておくことが重要なのです。

個人投資家にとって重要な情報源とは、何をいつ買って、いくらで売るか、という短絡的なものではなく、自らが判断できるようになるためのスキルやノウハウを身に付けられる投資教育のプログラムのことです。

大切な資金を殖やすためには、他力本願ではいけません。仮に他人の、しかも短絡的な情報を活用して短期的に利益をあげることができても、それは長続きしません。**投資で利益をあげる、お金を殖やす秘訣は一にも二にも、安定的に長く続けられることです。**

投資スキルは、一度、身に付けたら減ることはありません。いわば一生ものというわけです。そのためには、しっかりとした教育プログラムを受ける必要があります。しかも、できるだけツボを押さえて効率的にです。これさえ身に付ければ、あとは基本に忠実に実践することで、外国為替取引を長く続けることができます。そして、そのプログラムが本書なのです。

005

なぜ、今からFXを始める
必要があるのか？

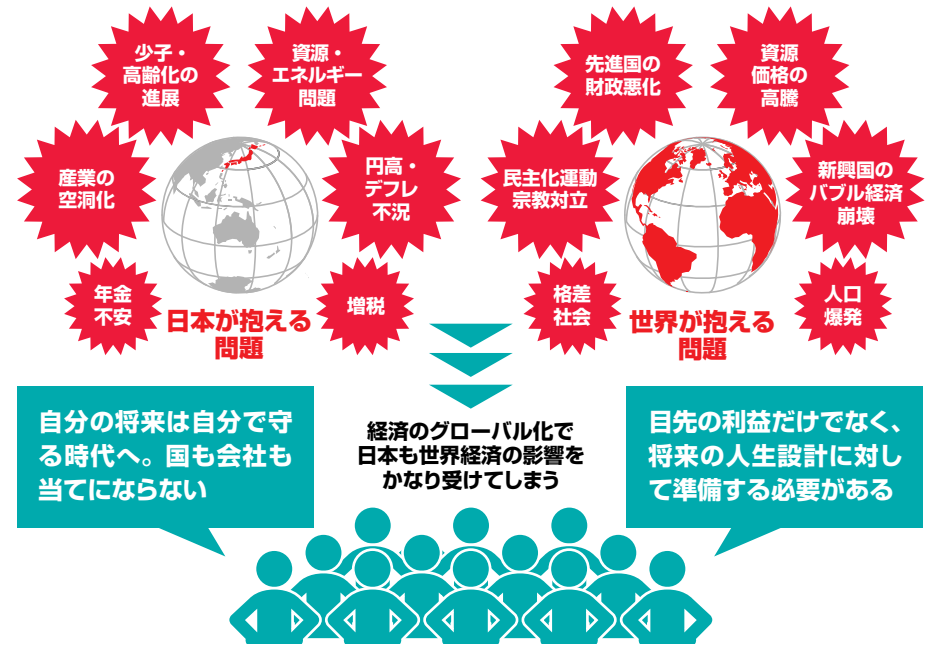
投資というと、「大金を稼いで脱サラ」「贅沢な暮らしを満喫」というイメージが強いでしょう。夢を見るのも悪くはありません。しかし、これからの日本は人口が減少し、経済は縮小します。年金も当てになりません。これからの投資は「自分の人生を守る術」と考えてください。

ここまで、FXの魅力や個人投資家がFXに注目する理由を書きました。しかし、決して他の誰かが利益をあげているから、流行だからという理由でFXをお勧めしようとしているわけではありません。これからの世界経済は波乱に満ちあふれているからです。

そんな大げさなことをいわないまでも、皆さんが生活する日本の社会自体が、大きな曲がり角にさしかかり、特に現役世代の方には、将来に大きな不安が立ちだかっています。

日本の政府と自治体は1,000兆円に近い借金を抱え、現在はその大半を1,400兆円にのぼる個人金融資産でまかっています。しかし、この金融資産は65歳以上の高齢者が60%以上を保有しているといわれ、長生きリスクのもとでほとんど使われる見込みがありません。

日本の国家予算は100兆円に迫っていますが、その約半分は国債の発行＝借金でまかっています。つまり、国と地方の借金と個人金融資産が逆転するのは、時間の問題になりつつあります。



しかも、長らく続くデフレ不況は、その出口さえ見いだすことができていません。それも当然で、高齢者が激増する状況では、お金が消費に向かないため、日本の経済は成長が見込めないからです。そして、団塊の世代が65歳を超えてきた2012年以降は、社会保障費がいつそう重くのしかかり、現役世代が高齢者になるときに公的年金を当てにすることはできません。にもかかわらず、消費税は将来的に25%程度まで引き上げなければ、国と地方の財政は改善する見込みがないのです。

となると、**目先の利益だけでなく、将来を見据えた生活設計をするために投資を真剣に考え、着実に資産を殖やす必要があります。**投資の選択肢には、株式や投資信託も入ります。しかし、経済がグローバル化した以上、1つの国だけでは何も語れなくなっています。世界経済の動きを端的に表しているのが外国為替市場ですし、株式や投資信託にお金を投じるときにも外国為替は欠かすことができない存在です。であれば、ストレートに外国為替取引＝FXを始めなければ、何も始まらないといえるでしょう。

第1章

「外国為替の仕組み」を 理解しよう

- 001 「外国為替取引」とは「通貨と通貨を交換」すること 13
- 002 世界の「三大通貨」が外国為替取引の基本通貨 14
- 003 取引量の多い5つの通貨が「メジャーカレンシー」 15
- 004 2つの国の通貨で1組となる通貨ペア 16
- 005 世界の外国為替取引量は1日でおよそ300兆円 17
- 006 「円高・ドル安」「円安・ドル高」って、どういうこと? 18
- 007 それでも分かりにくい? 「円高・ドル安」「円安・ドル高」 19
- 008 どんな目的で外国為替取引を利用しているの?【1】 20
- 009 どんな目的で外国為替取引を利用しているの?【2】 21
- 010 どんな目的で外国為替取引を利用しているの?【3】 22
- 011 24時間、世界を駆けめぐる外国為替市場 23
- 012 世界最大の金融市場だからメリットがいっぱい 24

コラム ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール
「円高」になると、どうして日本は不況になるの?【1】 ----- 25

第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

001

「外国為替取引」とは
「通貨と通貨を交換」すること

「外国為替取引」は海外旅行やインターネットの通販サイトでのショッピングで馴染みが深いもの。そして、モノを買ったり、サービスを受けたりする以外に、通貨と通貨を交換することで利益を求めようとするのがFX。難しそうに聞こえますが、実は日頃から慣れ親しんでいるものなのです。

日本からアメリカに旅行するときは、「円」を「ドル」に両替していきます。ヨーロッパに行くのであれば「円」を「ユーロ」に替えます。そして、旅行から帰ってくれば、手元に残った「ドル」や「ユーロ」を再び「円」に交換します。簡単に言うと、これが「外国為替取引」です。

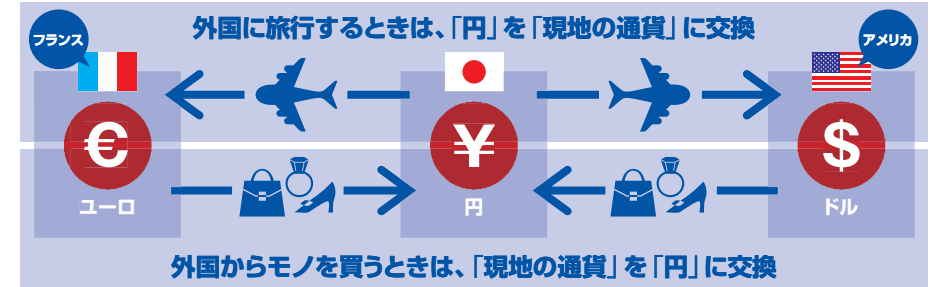
海外のショッピングサイトからインターネットを通じてブランド品などを買うときには、ほとんどの場合はクレジットカードでの決済ですから、あまり意識したことがないかもしれませんね。

▶▶外国為替取引はとても身近な存在

「外国為替取引」というと何か難しそうな感じがしますが、これは「通貨と通貨を交換すること」で、皆さんが日常生活で無意識のうちに活用しているとても身近な存在です。

企業が行う輸出や輸入にも「外国為替取引」が使われています。たとえば、トヨタやパナソニックが日本で生産した自動車や家電製品をアメリカ

▶生活に身近な「外国為替取引」



▶FX=通貨だけの「外国為替取引」



で売れば、その代金は米ドルで受け取ります。また、海外ブランド品や石油は海外から輸入していますが、その代金はドルやユーロなどの世界各国の通貨で支払われています。とはいえ、多くの場合は米ドルが主役です。

▶▶モノやサービスを伴わない「通貨だけの交換」の1つがFX

このように、モノを買ったり、サービスを受けたりするために、それぞれの国の通貨と交換するのが「外国為替取引」の一般的な使い方です。ところが、モノやサービスのやりとりを伴わない、通貨と通貨の交換だけを目的とした取引があります。その1つがFX（外国為替証拠金取引）です。旅行から帰ってきてドルを円に替えるとき、意外にも、思ったよりたくさん受け取れたりしますよね。あれは「為替差益」というものです。

この第1章では、「外国為替取引」の仕組みについて、詳しく解説していきます。初めて耳にする方は、とても難しそうに聞こえるかもしれませんが、慣れれば何も難しいことはありません。じっくり、いきましょう。

第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

002

世界の「三大通貨」が
外国為替取引の基本通貨

「ドル」「ユーロ」「円」は世界の三大通貨といわれ、非常に信頼性が高い通貨とされています。中でも、最大の取引量を誇るアメリカの「ドル」は、基軸通貨として貿易などで幅広く使われています。最近、注目されつつある中国の「人民元」を含め、世界の四大通貨となる日も近いでしょう。

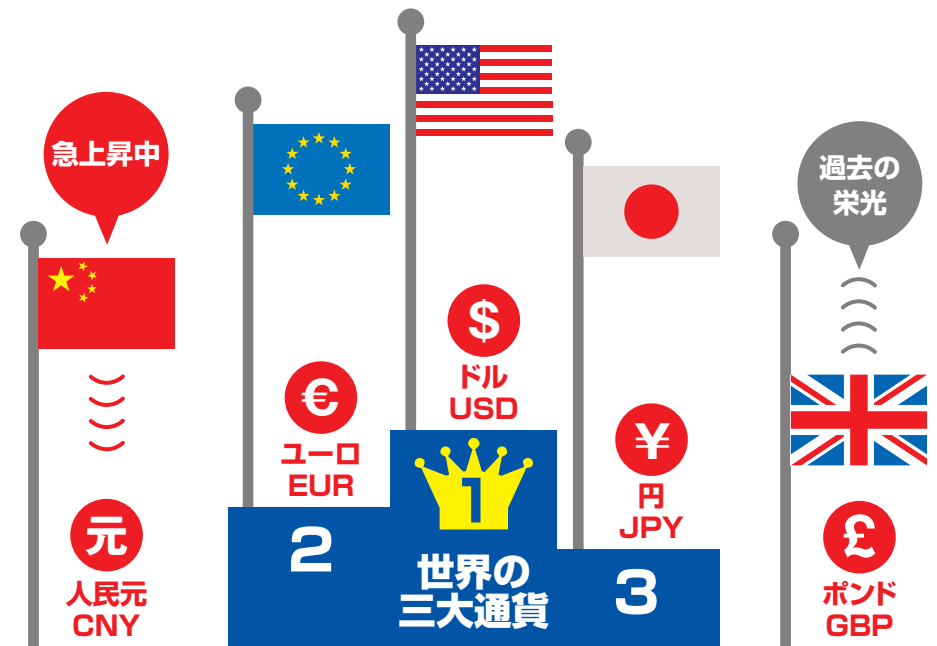
国には、それぞれ固有の象徴として「国旗」や「言語」などがあります。そして、経済面の象徴が「通貨」です。

そこで、主要な国の通貨には、どのようなものがあるのかを解説しましょう。といっても、皆さんが取引する通貨は非常に限られていますから、試験勉強のように丸暗記をする必要はありません。

▶▶世界の三大通貨

通貨は、経済面で「国の信頼性」を測るモノサシです。つまり、**経済が安定していて、取引（流通）量が多い通貨ほど信頼性は高い**といえます。その代表的な存在がアメリカの「ドル」。一般に、米ドルなどといわれますが、外国為替取引の世界では単純に「ドル」といえば米ドルを指し、アルファベット3文字で表記される略称は「USD」です。

「ドル」は「基軸通貨」として、国際的な貿易などの決済に広く使われています。決済というと、取っつきづらかもしれませんが、要は、お金



の支払いや受け取りをすることです。世界的なお金のやりとりに使われる通貨ですから、当然、流通量は最も多くなります。

基軸通貨といえば、以前はイギリスのポンドでしたが、第二次世界大戦以降、アメリカの国力が大きくなる一方、イギリスの国力は衰え、基軸通貨はポンドからドルへと移りました。

次に取引量の多いのが「ユーロ (EUR)」。1999年1月1日に西側ヨーロッパ諸国を中心に経済圏を欧州連合 (2012年1月1日現在、27カ国が加盟) として統一したのを機に誕生。ユーロは通貨としての歴史は浅いものの、参加国は17カ国 (2012年1月1日現在) を数え、取引量は世界第2位です。ただ、ギリシャの財政危機を発端にユーロの信頼性が危ぶまれています。

そして、第3位が日本の「円 (JPY)」。日本にいと、「20年以上も景気が回復せず、国と地方の借金は1000兆円にも及ぶ国の通貨が、なぜ信頼性が高いの?」と感じるかもしれません。この点については、追々、説明するとして、「円」も信頼性が高く、流通量が多い通貨と覚えてください。

第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

003

取引量の多い5つの通貨が
「メジャーカレンシー」

ドル、ユーロ、円にイギリスのポンド、スイスのフランを加えた主要通貨がメジャーカレンシー、それ以外の通貨はマイナーカレンシーです。どれも特色があり、特にマイナーカレンシーは個性豊か。いろいろな通貨があって目移りしそうですが、取引はメジャーカレンシーから始めましょう。

前項で紹介した「ドル」「ユーロ」「円」は取引量が非常に多く、イギリスの「ポンド (GBP)」、スイスの「フラン (CHF)」とあわせて取引量の多い上位5つの通貨を「メジャーカレンシー (主要通貨)」といいます。オーストラリア (豪州) の「オーストラリアドル=豪ドル (AUD)」をメジャーカレンシーに含めることもあります。ちなみに、豪ドルの愛称は「オージー」です。

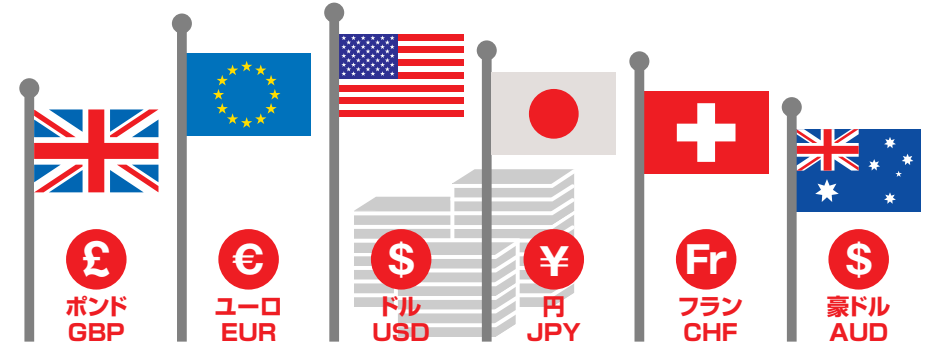
いずれにしても、皆さんがFXを使って取引をするときは、豪ドルを含むメジャーカレンシーから始めるとよいでしょう。

▶▶ 個性的なマイナーカレンシー

メジャーカレンシーに比べて、取引量がかかなり少ない通貨をマイナーカレンシーといいます。豪ドルを含む6つのメジャーカレンシーに対して、その他大勢というところでしょうか。

しかし、マイナーな分、国、通貨としても個性的。たとえば、ニュージ

▶メジャーカレンシー(通貨)



▶主なマイナーカレンシー(通貨)



ーランドの「ニュージーランドドル=NZドル (NZD)」はオーストラリアに近接する島国で、人より羊の数が多くといわれるほどの農業国。愛称は「キウイー」。豪ドルとあわせて「オセアニア通貨」といいます。

このほか、カナダ (加州) は「カナダドル=加ドル (CAD)」で、愛称は「キヤンドル」。カナダは隣接するアメリカ経済の影響を強く受ける一方、資源産出国としての性格を持つユニークな存在です。

マニアクなところでは、南アフリカ (南ア) の「南アランド (ZAR)」、香港の「香港ドル (HKD)」、シンガポールの「シンガポールドル (SGD)」、タイの「バーツ (THB)」、トルコの「リラ (TRY)」なども、取引を始めると、お目にかかれるかもしれません。

なお、中国やブラジル、ロシアといった新興国の通貨は、政府が取引を制限していたり、経済が未成熟だったりして、多くのFX会社では取り扱い銘柄として採用していません。取引量が極端に少ない通貨は入門したばかりの投資家には不向きですし、実際に取引をしている人はごく少数です。

第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

004

2つの国の通貨で
1組となる通貨ペア

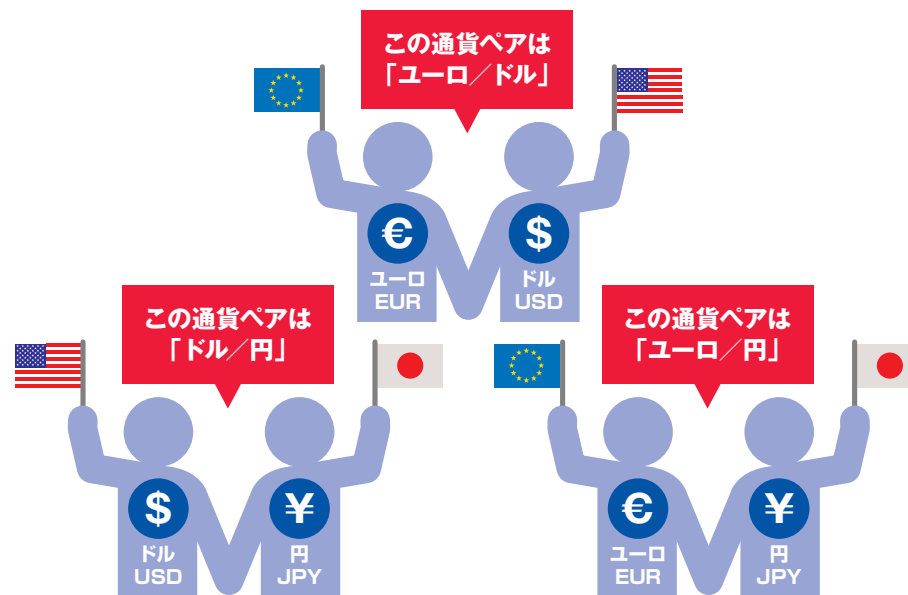
外国為替は必ず2つの通貨がペアになります。「ドル/円」「ユーロ/ドル」といった具合にです。単なる読み方だけでなく、先に来る通貨と後にくる通貨には決まりがあり、単位も決まっています。これを逆さまに覚えてしまうと一大事。しっかり、覚えましょう。

外国為替取引は、2つの国の通貨が対象になります。「為替」には「交換する」という意味があり、1つの通貨だけで取引することはできません。たとえば、海外旅行に行くために両替をするときには、「円」を「ドル」に交換したり、「円」を「ユーロ」に交換したりします。アメリカに住んでいる人がユーロ加盟国に行くときには、「ドル」を「ユーロ」に両替します。

このように、2つの通貨が必ずペアになることから、**ユーロとドルや、ドルと円といった組み合わせを「通貨ペア」と**いいます。そして、通貨ペアの名称にも決まりがあります。

ドルと円の組み合わせを「ドル/円」、ユーロとドルの組み合わせを「ユーロ/ドル」といって、それぞれ「USD/JPY」「EUR/USD」と表記します。FX会社や専門家によっては「/」を入れないときもあります。また、日本の新聞やテレビでは、「円ドル」「円ユーロ」と通常とは逆さまに表記したり、コメントしたりすることがありますが、外国為替取引の世

外国為替取引は2つの国の通貨が必ずペアになる



界では、この表記方法は例外といえるでしょう。

▶▶ちょっと迷う通貨ペアの名前と為替レートの関係

「ドル/円」「ユーロ/ドル」と表記するには理由があります。たとえば、ドル/円の場合、「ドルが円に対して高いか安いかわかる」を見ます。つまり、**通貨ペアの表記で先にくる通貨が「主」、後にくる通貨が「客」**です。したがって、「円ドル」という表記は主客転倒となり、本来の意味とは違ってしまいます。そして、単位は後にくる通貨で数えます。「ドル/円」の単位は「円」、「ユーロ/ドル」なら「ドル」となります。

後述しますが、よく「円高・ドル安」という見出し記事を目にすることがあります。外国為替取引を始めようとする個人投資家が最初につまずくのが、「ドルが円に対して、高いか安いかわかる」ということと、「円高・ドル安」という表記です。慣れていないと何のことやらさっぱり分からないかもしれませんが、あとでじっくり解説しますから、安心してくださいね。

第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

005

世界の外国為替取引量は
1日でおおよそ300兆円

世界の経済が拡大すればするほど、外国為替市場も大きくなっていきます。また、各国の経済状況によって通貨ペアの取引量も変わります。通貨ペアの取引量が多ければ、それだけ値動きが安定するため、初心者の方は、取引量の多い通貨ペアを選ぶのが利益をあげる秘訣です。

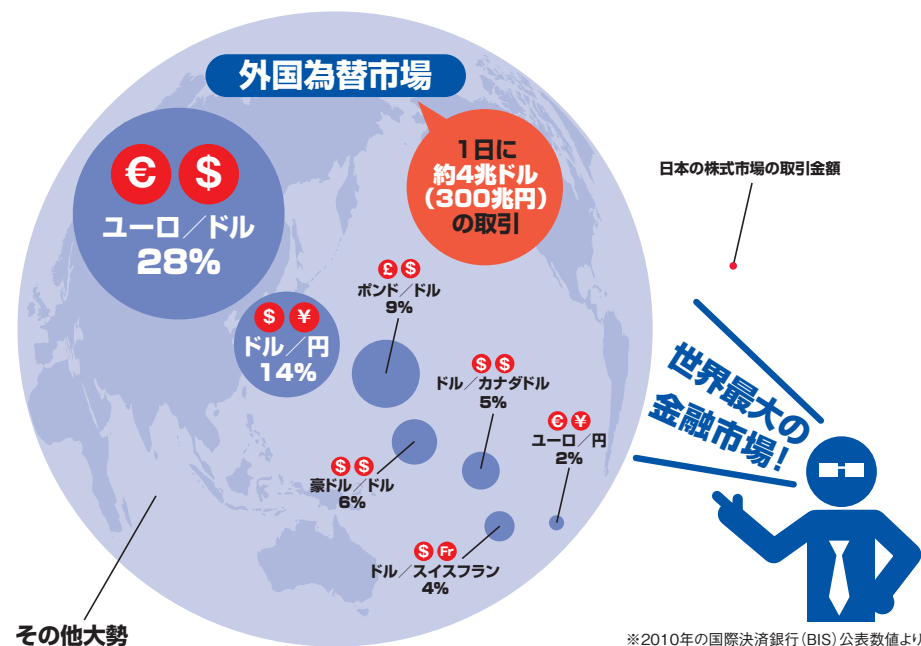
ドルやユーロ、円など通貨ごとの流通量について触れましたが、通貨ペアには取引量があります。外国為替取引をする上で、通貨ペアごとの取引量やその順番を知っておくことはとても重要です。

というのも、通貨ごとの流通量はあくまでも総量で、たとえば、ドル／円とドル／香港ドルの取引量は大きく異なるからです。FXの入門書などには、この点を簡単にしか触れていないことが多いため、多くの個人投資家が通貨ペアごとの取引量を軽視する傾向があります。

この点は、**皆さんが実際にFXを始めてから、うまく儲けられるか儲けられないかを左右する重要なこと**ですが、あまり突っ込んだ話は小難しいので、折に触れて説明します。ここでは、「**通貨ペアごとに取引量は異なり、それが非常に重要だ**」ということだけを理解しておいてください。

▶▶ 世界最大の取引量を誇るユーロ／ドル

当たり前のことですが、それぞれ単体の通貨として流通量が多ければ、



通貨ペアとして組み合わせたときも、取引量は多くなります。世界最大の取引量を誇るのが「ユーロ／ドル」です。

世界の外国為替取引の規模は1日でおおよそ4兆ドル、日本円にしてざっと300兆円にのぼり、その3割弱 (28%) をユーロ／ドルの取引が占めています。2010年12月時点で世界第2位の取引量は「ドル／円」で約14%、次いでポンド／ドル (9%)、豪ドル／ドル (6%)、ドル／カナダドル (5%)、ドル／スイスフラン (4%) と続きます。意外なのが「ユーロ／円」。1つの通貨としての流通量は第2位と第3位なのに、通貨ペアとしてはその他大勢に近く、取引量は全体の2%にとどまっています。

メジャーカレンシー同士の組み合わせでも取引量にこれだけの違いがあるわけですから、ドルとマイナーカレンシーの組み合わせでは取引量が極端に少ないことは簡単に想像できるでしょう。なお、これらのデータは、国際決済銀行 (BIS) が3年ごとに集計・公表しています。2010年公表のデータでは、ドル／スイスフランとドル／カナダドルが逆転しました。

第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

006

「円高・ドル安」「円安・ドル高」
って、どういうこと？

外国為替取引を始めると、最初に分からなくなるのが「円高・ドル安」の仕組み。考えれば考えるほど分からなくなります。こういうときは海外旅行に行ったり、海外のブランド品を買ったりするときのことを考えれば分かりやすいでしょう。円高のときは、海外旅行に行きやすいですね。

テレビのニュース番組では「今日の為替は円高・ドル安傾向で、1ドル80円で推移しています」「1ドル80銭の円高です」といったコメントを耳にします。この「円高・ドル安」とは、どういう意味でしょうか？

すでに書いたように、外国為替取引は必ず、ドル／円やユーロ／ドルといった通貨ペアで行います。つまり、ドルと円、ユーロとドルでは、どちらかが上がれば、どちらかが下がるわけで、綱引きのようなもの。ですから、「円が高くなれば、相手のドルは安くなる」わけです。

ところが、「4年前には120円くらいしていたドル／円が、最近では75円くらいになったのに、円高ってどういうこと？ 120円から75円に下がったんだから円安なんじゃないの？」と、頭の中は「???」だらけになってしまう方が多いようです。

▶▶円高なら海外旅行に行きやすくなる!!

この疑問を解決するには、通貨ペアと為替レートとの関係を整理しなくて



はなりません。004項で解説したように、「ドル／円」というときには、ドルが主ですから、「ドルが円に対して高いのか安いのか」を意味します。もう少し詳しく説明すると、「ドルが高い、円が安い」というのは、ドルと円を両替（交換）するときのことを考えれば分かりやすいでしょう。

たとえば、今、為替レートが1ドル100円だったとします。2年後に1ドル200円になっていれば、皆さんは海外旅行に行ったり、ブランド品を買ったりすることをためらうでしょう。なぜなら、1ドルを手にするために以前なら100円だったものが、200円も出さないといけなくなるからです。出費はこれまでの2倍。つまり、「円安・ドル高」は「ドルの価値が上がり、円の価値が下がる」ということなのです。

逆に、為替レートが1ドル50円になれば、100円のとくに比べて、半分の出費で済みますし、より多くのものを買うことができます。つまり、「円高・ドル安」は「円の価値が上がり、ドルの価値が下がる」ということです。少しは、頭の中を整理することができたのではないのでしょうか。

第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

007

それでも分かりにくい？
「円高・ドル安」「円安・ドル高」

日本にいて、円高は常に「不況」とセットで扱われ、イメージはあまりよくありません。しかし、資源や輸入食品、ブランド品などが安く買えるようになるメリットもあります。「円高・ドル安」「円安・ドル高」の仕組みは、どちらか一方を軸にして覚えると、比較的簡単に理解できます。

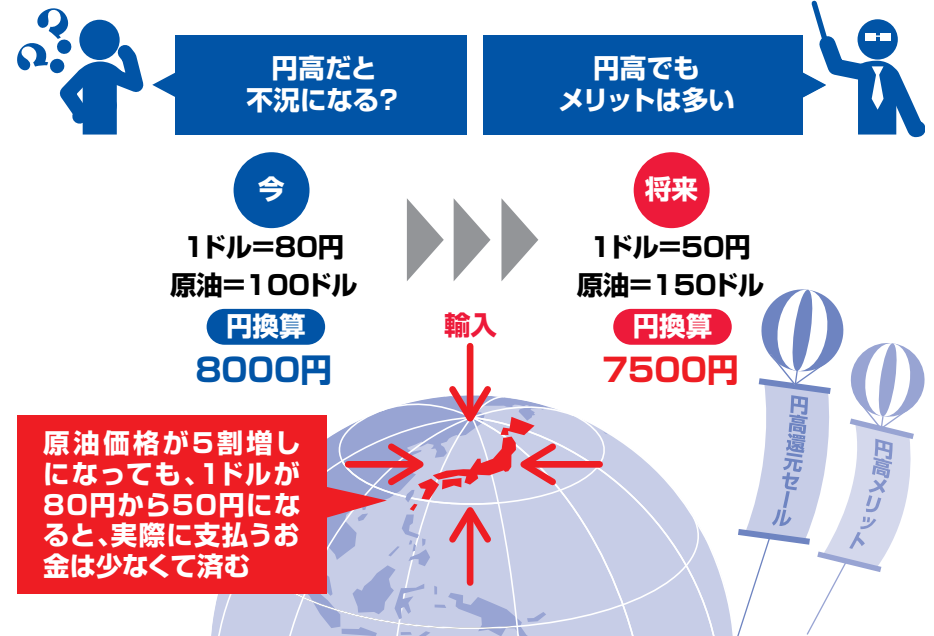
「円高・ドル安だと海外旅行に行きやすくなるというのは分かるけど、為替レートが下がっているのに円高ってというのがどうも……」と、やっぱり釈然としないかもしれませんね。

外国為替取引を実際に始めると、このような疑問が再び、ふつふつと沸いてきます。そんなときには、通貨ペアの名前の最初に来る通貨を軸と考えてください。

ドル／円であれば「軸はドル」ですから、「ドルが円に対して買われる（上がる）」「ドルが円に対して売られる（下がる）」と考えると、為替レートとの比較でも悩むことはなくなるでしょう。そして、**通貨ペアは2つの国の通貨が常に「綱引き」をしている**と覚えてください。

▶▶為替レートは日常生活に直結していることを思い出して！

すでに書いたように、外国為替取引は日常の生活に非常に近い存在です。ちょっと迷うことがあったら、日本人にとって、旅行やブランド品を買う



ときに、円高が有利か円安が有利かを思い浮かべてください。

円高のときに思い浮かべるのが、スーパーや百貨店が輸入食品などを「円高差益還元セール」と題して安売りするときです。

長梅雨や猛暑で野菜の生育が悪く、値段が高騰するときがあります。そんなときに円高になると、国内産のレタスが400円もしているのに、輸入レタスは100円で売られたりしています。

また、石油の価格が高騰していても、円高になっているときには、ガソリンの値段がそれほど値上げされないときがあります。レタスだと、無農薬やら何やらで作り方や鮮度によって値段が変わるかもしれませんが、しかし、ガソリンの質は基本的に同じですから、消費者は円高の恩恵を受けていることになります。

このように、「円高・ドル安」のときは、輸入食品やガソリンの値段の動きを思い起こせば、簡単に分かるでしょう。どちらか一方を軸にして覚えれば、これから迷うことはないのでは？

第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

008

どんな目的で外国為替取引を利用しているの？【1】

外国為替取引といっても、特徴や性格によって大きく4つに分けられます。モノやサービスが伴うかどうか、単にお金を殖やそうとする取引かなどです。それぞれの立場の人たちが、どのような目的で外国為替取引をしているかを理解することは、市場の動きを予測するためにはとても重要です。

外国為替がだいぶ、身近なものに感じられてきたのではないのでしょうか。今度は、どんな人たちが外国為替を利用しているかを考えてみましょう。

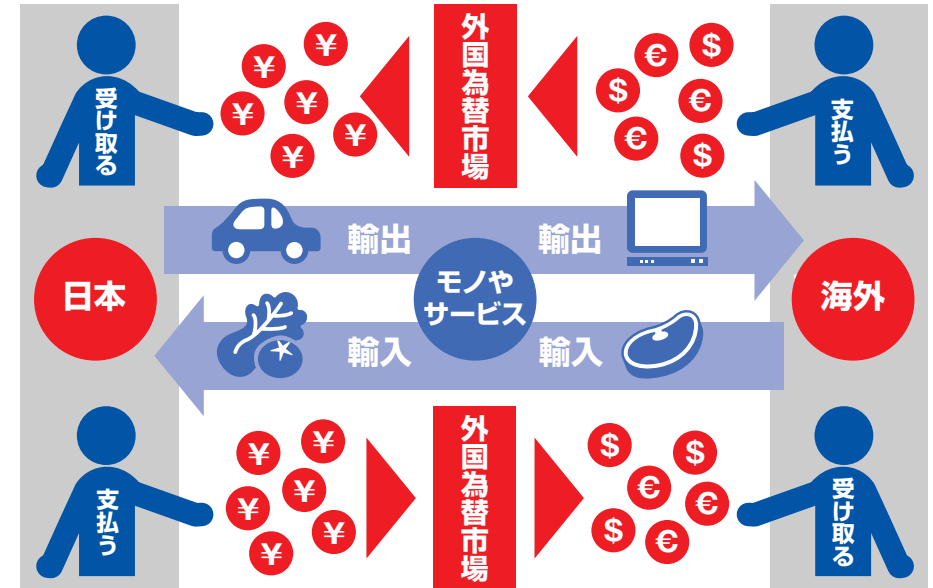
▶▶海外とのお金の受け取りや支払いで利用する「貿易取引」

外国為替取引には、世界各国のさまざまな人たちが関わっています。たとえば、前項の「円高還元セール」に象徴されるように、海外からモノを輸入する企業が思い浮かぶでしょう。

逆に、日本で生産した自動車や家電製品などを海外に輸出する企業も外国為替取引を日常的に利用しています。**輸出や輸入をする企業が外国為替取引をすることを「経常取引」とか「貿易取引」といいます。**自動車や家電製品、野菜や石油といったモノだけでなく、サービスも含まれます。

また、モノやサービスを売ったり買ったりするために外国為替取引を利用していることを「実需」といいます。代金の支払いや受け取りに外国為替取引を使っている、つまり取引に実体があるわけです。

▶貿易取引



貿易取引の特徴は、企業が海外との間で輸出や輸入をする以上、1年を通してコンスタントに外国為替取引を利用していることです。

海外への支払いをドルにするためには、円をドルに両替しなくてはなりませんし、受け取ったドルやユーロを日本で使うには、それぞれの通貨を円に交換しなければなりません。

また、大企業が海外に子会社を持っているときなどは、9月末や3月末といった企業が決算をするときや、場合によっては毎月末に、その海外子会社が持っているドルやユーロを円に替えて日本の本社に送金します。

毎日毎日送金するのは手間だけでなく費用もかかりますから、ある程度まとめるわけです。そのため送金が重なる時期は、円安傾向のときでも一時的に円高になったり、円高傾向のときには、それがより顕著になったりします。ちなみに、日本に限らず、外国からお金を本国に戻ってくることを「レパトリエーション（資金回帰）」といいます。これからは、ニュース報道で、この言葉を目や耳にする機会が増えることでしょう。

第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

009

どんな目的で外国為替取引を利用しているの？【2】

個人なら外国の株式や金利の高い国債、企業ならユニークな技術や特徴を持つ会社を買うなどの目的で使われるのが資本取引です。外国の資産を買うわけですから、円高のときが有利です。ただし、こうした流れがブームになると、だんだん円安傾向になることがあります。

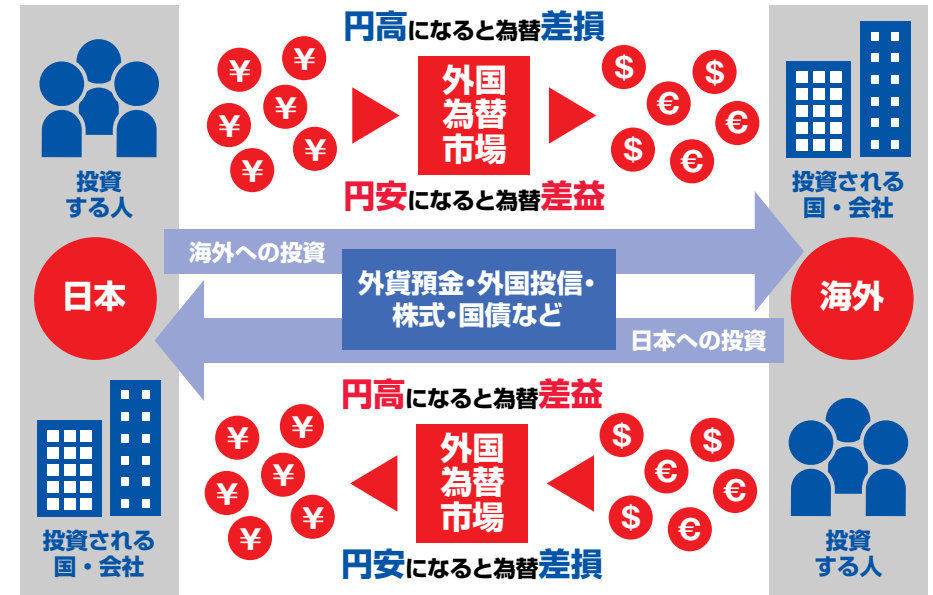
海外との間でモノやサービスを売ったり買ったりしなくても、「実需」といわれるものがあります。いわゆる「海外投資」です。

▶▶ 海外の会社や国債に投資するときを利用する「資本取引」

「投資」というと、ちょっと難しい感じがするかもしれませんね。たとえば、個人が外国の会社の株や投資信託を買いたい、海外に優秀な会社があり、それを日本の企業が子会社にするために出資したいというときにも、外国為替取引を利用します。外国の会社の株を買ったり、出資したりするためには、その会社がある国の通貨に替えなければ投資できないからです。これを「資本取引」といいます。日本の国債や預貯金の金利が極端に低いため、個人投資家の間でも金利の高い海外の国債や投資信託に人気が集まっています。これも「資本取引」に入ります。

こうした「資本取引」には、ちょっとした流行があります。たとえば、円安傾向にあるときにアメリカの国債に投資しようとする、円をドルに

▶ 資本取引



替えなければなりません。長い期間、円安・ドル高になれば、金利を受け取ることができるだけでなく、「為替差益」も手にすることができ、一挙両得になります。

こうした動きがブームになると、それだけで外国為替相場が動いてしまうことがあります。しかも、投資目的で円をドルやユーロに替えるわけですから、投資をした個人や企業は長い期間、資金をそのままにしておくケースが多く、短期的には一方通行の取引になりがちというわけです。

ところが、外国への投資額が非常に大きくなっているにもかかわらず、円高・ドル安の流れになれば、投資家は「為替差損」を抱えることとなります。そうすると、金利を受け取ったものの、為替を含めると損失になってしまい、投資していた外国の国債を売るだけでなく、買っていたドルやユーロを円に替えるという、それまでとは逆の流れになってしまいます。

最近では、外国の会社を買収したり、石油などの資源を確保したりする動きが見られますが、これは円高を利用しているわけです。

第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

010

どんな目的で外国為替取引を利用しているの？【3】

何かを買う目的で外国為替取引をする「実需」に対し、外国為替取引だけで利益をあげようとするを「仮需」、つまり「投機取引」といいます。また、政府や「通貨の番人」といわれる中央銀行が、主に急激な相場変動をくい止めるために資金を投じることを「公的取引」といいます。

ここまで、外国のモノやサービスを売ったり買ったり、投資をしたりする目的で外国為替取引を利用する「実需」を解説してきました。今度は、実需が伴わない2つの取引を紹介しましょう。

▶▶ 外国為替の値上がりや値下がりや利益を狙うのが「投機取引」

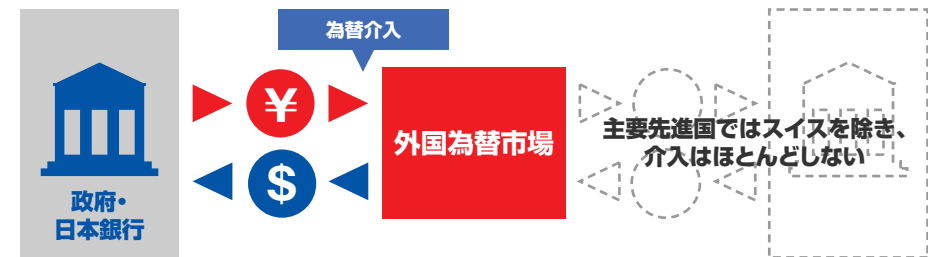
外国為替や外国の株式を売ったり買ったりして利益あげようという取引を「投機取引」といいます。「資本取引」と似ていますが、「投機取引」は「モノやサービス、外国の国債や株式など何かを買う」という目的で外国為替取引を利用するわけではありません。つまり、外国為替や株式の値上がりや値下がりや利益をあげようとする取引です。実は、これが世界の外国為替取引の大半を占めています。

FXも「投機取引」に分類されます。「投機」というと、「ギャンブル」や「ハゲタカファンド」のイメージが強いかもしれませんが、でも、あまり気にしないでください。銀行の為替ディーラーはこれを仕事にしているわ

▶ 資本取引



▶ 公的取引



けですし、投機取引は決して悪いことではありません。

ところで、FXを始めると、「投機筋」という言葉をよく耳にするようになります。「投機筋」とは、多くの場合、企業や少数のお金持ちから資金を集めて運用する人たち、つまり、「ヘッジファンド」や「投資ファンド」を運用する人たちのことです。外国為替市場がダイナミックに動く原動力となるのが投機筋で、彼らの動向をうまく予測すれば、皆さんの大きな味方になることだってあります。

▶▶ 政府や中央銀行が外国為替を取引する「公的取引」

急激な相場変動（円高や円安）により経済の悪化が心配されるときがあれば、**政府や中央銀行（日本では日本銀行）が外国為替市場に莫大な資金を投じて相場変動をくい止めようとします。**これが「公的取引」で、ニュース報道などでは「為替介入」といわれます。最近の日本では、2010年9月や2011年3月、8月、10月に為替介入が実施されました。

第1章

「外国為替の仕組み」を理解しよう

011

24時間、世界を駆けめぐる
外国為替市場

外国為替市場は世界最大の金融市場ですが、同時に24時間、途切れることなく取引されることも大きな特徴です。これは株式や国債を取引する市場ではあり得ないことです。24時間眠らないということは、個人投資家はライフスタイルにあわせた取引ができるため、とても魅力的です。

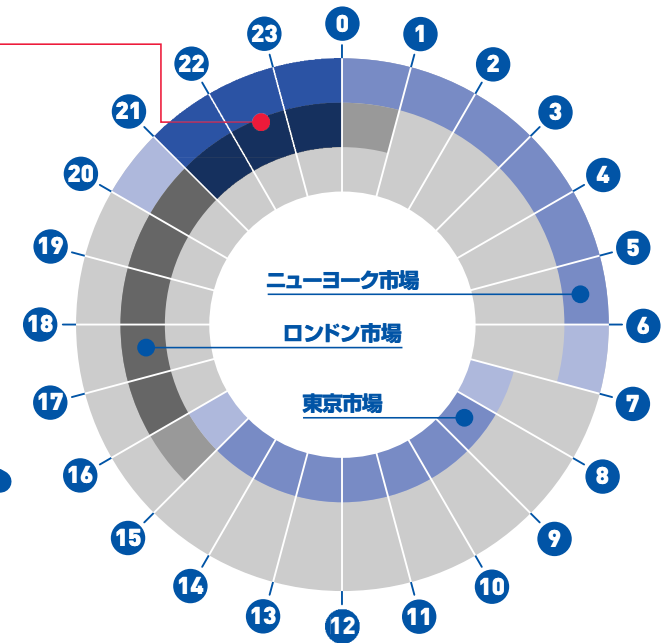
外国為替を取引するところを「外国為替市場」といいます。「市場」といっても、ほとんどがコンピューターを介しての取引で、どこかビルの一角に「市場、があって「競り」をしているわけではありません。

一昔前のニュース番組では、短資会社という外国為替取引を仲介する会社の人たちが何本もの電話を持ちながら、小さな板をやりとりしている映像が流れることがありました。しかし、最近はコンピューター取引が主流になったため、外国為替相場が急激に動いたときの風物詩的な光景は、あまり見られなくなりました。

ところで、外国為替市場は「インターバンク市場」と「対顧客市場」に分けることができます。

インターバンク市場では、銀行などの金融機関同士が直接、外国為替をやりとりしたり、短資会社を経由して取引したりします。一方の対顧客市場は、大口であれば輸出や輸入をする企業、小口であれば両替えなどをする個人が利用するものです。このように**外国為替取引は世界のどこかで常**

ゴールデンタイム



に行われているため、外国為替市場は24時間眠らないといわれるのです。

▶▶最も取引が多いのは東京、ロンドン、ニューヨーク

1日の最初の取引は、日本時間の早朝4～5時頃にニュージーランドの首都ウェリントンで始まり、遅れてオーストラリアのシドニー市場が開きます。そして、朝の8時頃には東京での取引がスタートします。

日本時間の午後3～4時頃にはロンドンで取引が始まり、さらに夜の8～9時頃からはニューヨーク市場が開きます。そして、早朝にニューヨークの取引が終了すると1日の取引も終わります。これは世界共通です。

取引参加者と金額が最も多い3つの取引時間帯は、「東京時間（市場）」「ロンドン時間（市場）」「ニューヨーク時間（市場）」です。中でも、世界最大の取引量を誇るロンドン時間と、第2位のニューヨーク時間が重なる時間帯は「ゴールデンタイム」といわれていて、1日のうちで最も活発でダイナミックな取引がおこなわれます。

第1章 「外国為替の仕組み」を理解しよう

012

世界最大の金融市場だから
メリットがいっぱい

取引量が他の金融市場に比べて比較にならないほど多い外国為替市場には、いくつかのメリットがあります。このメリットを最大限に活かすことが何よりも大切です。取引に慣れてくると、目先の利益ばかりを意識して、このメリットを忘れがち。忘れないようにしてくださいね。

すでに書いたように、世界の外国為替市場の取引量は1日でおおよそ4兆ドル、日本円にして約300兆円にのぼる世界最大の金融市場です。それだけ多くの人たちが取引に参加しているだけでなく、市場は24時間眠らないわけですから、当然かもしれません。しかし、市場の規模が300兆円といってもピンとこないですよ。

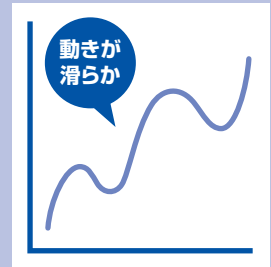
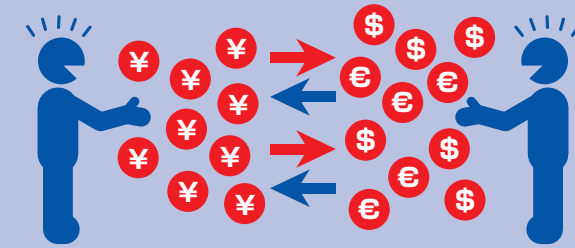
世界で指折りの規模を誇る日本の株式市場は、最近の取引額は1日で1～2兆円程度、少ないときは5,000億円程度。最盛期でも5兆円を超えるくらいでしたから、外国為替市場の大きさが分かるというものです。

▶▶取引量が多いほどスムーズな取引ができる

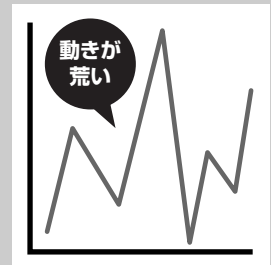
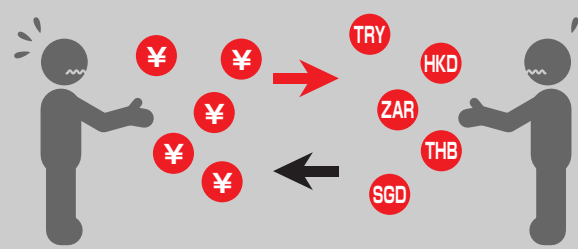
ちょっと難しい話になりますが、**取引量が多いということは、1つひとつの取引が連続している**ことになり、これを「**流動性が高い**」といいます。

これはすごく大事なことで、買ったり売ったりしたいときにきちんと取引できることに他なりません。**外国為替取引の半分弱を占めるユーロ／ド**

▶取引量が多いと……



▶取引量が少ないと……



ルとドル／円は、**流動性が高い分、スムーズで安全な取引ができる**わけです。取引量が極めて少ない南アフリカのランドやタイのバーツなどは「流動性がかなり低い」ため、思うような取引ができないときがあります。

▶▶取引量が多ければ為替レートの動きも滑らか

取引量が多いと、買いたいときや売りたいときに思うように取引ができるだけでなく、為替レートの動きも滑らかです。これも非常に大切です。

実際にFXを始めて慣れてくると、荒い動きをする、つまり流動性の低い通貨ペアで取引したくなります。これらは為替レートがジェットコースターのように動くため、儲かる感じがするからです。しかし、動きが荒ければ荒いほど損をする危険性（リスク）も高くなります。この点は、あまりFXの入門書にも書かれていないため、個人投資家は軽視しがちです。

「外国為替取引は高い流動性の通貨ペアでゆっくり利益を狙う」。これが基本と心得てください。



「円高」になると、どうして日本は不況になるの？【1】

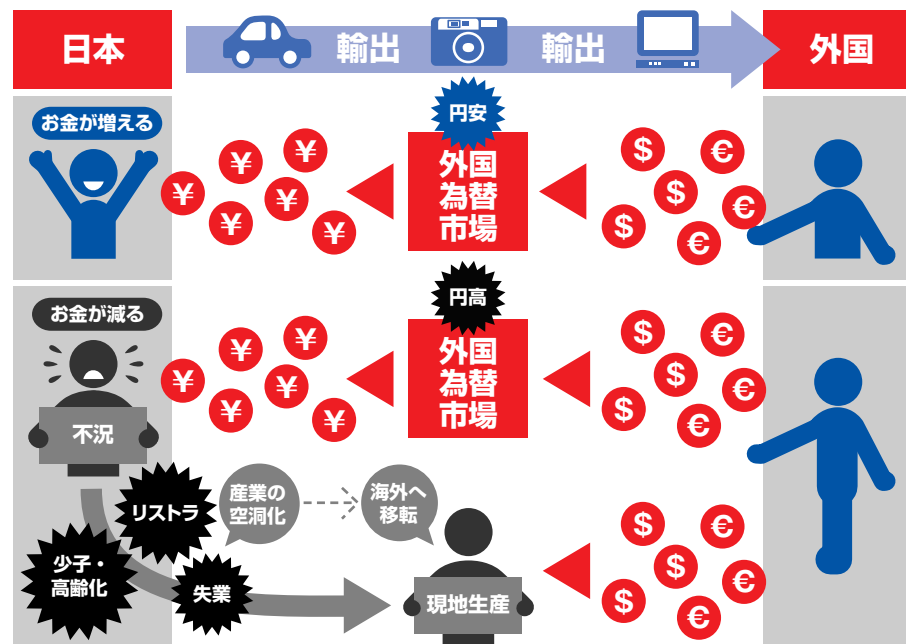
FXをするときに、切っても切れないのが日本や海外の経済事情です。外国為替取引の仕組みだけでなく、ちょっとした経済や金融の仕組みを知ることが、取引に役立つだけでなく、日々の生活も豊かになります。このコーナーでは、経済や金融について分かりやすく解説していきます。

外国為替相場と日本経済の動向には密接な関係があります。日本には資源がないため、それを輸入して自動車や家電製品などを作り、国内で販売するだけでなく、広く海外にも輸出して経済が発展してきました。

しかし、日本は少子・高齢化が急速に進み、国内の景気がよくなる傾向にあります。年齢の若い層が結婚すれば、家具や家電製品を買うでしょう。そして、しばらくすると家を建てたりマンションを買ったりします。ところが、若年層が減っているため、消費は盛り上がりません。

一方、高齢者は年金問題や健康保険の負担増により将来の不安が高まり、長生きをすればするほど、将来的な支出に対して不安が募ります。これを「長寿リスク」といいます。そのため、たくさんの貯蓄があっても、あまりお金を使おうとしません。こうなると、企業は国内より海外でモノやサービスを売ろうとします。

ところが、こうした状況で急激な円高になると、ドルやユーロより円の価値が上がってしまうため、海外で受け取ったお金を両替しようとしても、



思ったより少ない円しか受け取れません。同じ仕事をして、同じ製品を売っても、為替レートが円高になるだけで、手取りが減ってしまうわけです。

そうなれば、企業に務める社員の給料は上がりません。場合によっては、ボーナスが減ってしまいます。また、輸出企業は手取りが減って業績が落ちれば、社員の採用を減らしたり、下請け企業に値引きを迫ったりしますから、国内にいる人たちの収入も減ることになります。

収入が減ったり、就職できない人が増えたりすれば、モノや家を買ったり、レジャーにお金をかけたりすることを控えてしまいます。一昔前は、急激な円高になって一時的に経済が停滞しても、国内の消費が盛り上がることで克服してきました。しかし、21世紀に入ってからは、少子・高齢化の進展で国内の消費は盛り上がりせず、不景気が長引いているわけです。

最近では、急激な円高に耐えかねて、自動車メーカーなどが海外生産を加速し、日本車を逆輸入する動きも出てきました。そうなれば、ますます日本での働き口が減りますから、不景気が長引く可能性が高まっています。

第2章

「FXの仕組みと基本」を 理解しよう

- 001 正確な知識とスキルを身に付けることが儲けの近道 27
- 002 FXで儲ける方法はたったの2つ 28
- 003 取引するときは「まとめ買い」が基本 29
- 004 効率的に利益をあげる仕組みが「レバレッジ」 30
- 005 最初は間違いやすい「アスク」と「ビッド」 31
- 006 金利の高い国の通貨はスワップ金利が魅力 32
- 007 外貨預金より圧倒的に有利なFX 33
- 008 円高でも儲けられるのがFX最大のメリットの1つ 34
- 009 FXで儲けるためには「4つのスキル」を理解しよう 35

■ **コラム** ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール
「円高」になると、どうして日本は不況になるの? [2] ----- 36

第2章

「FXの仕組みと基本」を理解しよう

001

正確な知識とスキルを
身に付けることが儲けの近道

外国為替証拠金取引の口座をFX会社や証券会社に開設すれば、取引はすぐに始められます。しかし、「どの点に注目して売買すべきか」「やってはいけないこと」などを理解してからでないと長続きはしません。`投資、は、「長く続けられること」から、すべてが始まるからです。

外国為替市場のアウトラインがだいたい分かったところで、金融商品としてのFXの仕組みについて解説しましょう。

市場の仕組みだけでなく、商品や取引の仕組みをしっかり理解することはとても大切です。なぜなら、何事にもメリットとデメリットがあり、それを理解しているかどうかで、後々の取引成績に大きな差が生じてくるからです。

株式投資でもそうですが、FXを利用して外国為替取引を始めるといっても、試験もなければ、免許もありません。つまり、FX会社や証券会社に口座を開設して、お金さえ用意すれば、誰でも取引できるものなのです。

▶▶ 試験も免許もないから、しっかりとした理解が大切

人は、お金を儲けたいと思うものです。裏を返せば、1円たりとも損をしたくないわけです。そして、「できるだけ、たくさんのお金を早く儲けたい」と意気込んで、投資を始めようとします。これが`人情、でしょう。



しかし、功を焦って、儲けることばかりを意識しても、うまくいくものではありません。外国為替市場はどのような規模で、どんな人たちが市場に参加していて、そして、その仕組みはどうなっているのかを理解し、利益をあげるためのスキルやノウハウを身に付ける必要があるからです。

最初は面倒でも、**できるだけ正確な知識を習得し、お金をかけないデモトレードで感覚を養い、そして本番の取引へと移ることが利益をあげる近道**です。先ほど、「試験もなく免許も必要ない」と書きました。何の知識やノウハウを身に付けなくても、明日、いや今日からスグに取引を始められますが、やはりそれでは心細いといわざるを得ません。

この第2章では、FXの仕組みから、実際に取引するときの判断材料と注意すべき点について解説していきます。ときに、初めて目にする言葉も出てくるでしょう。「ほんとなの?」ということがあるかもしれません。しかし、最初は「まず信じて、斜めから物事を見ず、正確な知識を身に付ける」ことに集中してください。利益をあげる極意は「素直」です。

第2章

「FXの仕組みと基本」を理解しよう

002

FXで儲ける方法は
たったの2つ

外国為替相場は「上がるか」「下がるか」。この二者択一が、FXで利益をあげる基本ルールで、確率は2分の1。とても簡単そうです。ただ、「下がる」と考えたときのルールは、普段の感覚からすると馴染みがありません。この点を理解し、上下どちらに動いても対応できることが大切です。

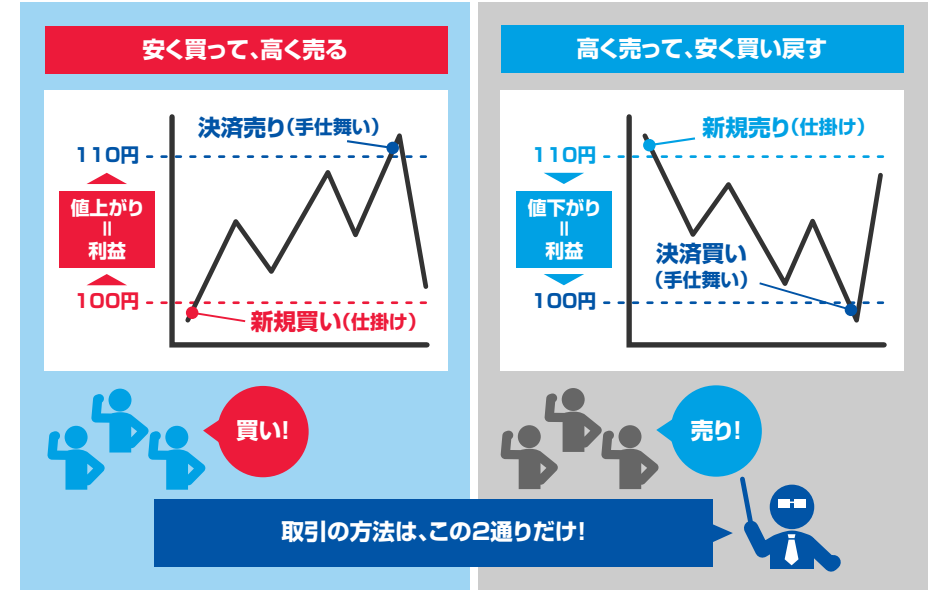
FXで利益をあげる方法は、たったの2つ。「安く買って、高く売る」か、「高く売って、安く買い戻す」しかありません。当たり前かもしれませんが、ルールはこれだけです。

たとえば、いま現在、ドル／円の価格が100円なら、今後110円になる、つまり「円安」になると考えれば、100円で買って110円で売れば、10円の利益になります。また、ユーロ／円が130円しているとき、この先、100円まで下がると考えれば、130円で売って、100円になったら買い戻せば、30円の利益になります。10円とか、30円の利益の話で「何だか、しょぼいな〜」と思われるかもしれませんが、ちょっと待っててくださいね。

▶▶ 新規と決済で取引は完結

通貨ペアを選んで、最初に買うことを「新規買い」、売ることを「新規売り」といいます。この2つをまとめて「仕掛け」ということもあります。英語では「エントリー」です。FXは、実際に「円」を「ドル」に替える

▶ FXで儲ける方法



わけではありませんから、最終的には必ず逆の取引、つまり「決済」をしなければなりません。したがって、買ったドルを引き出して、海外旅行などに利用することはできません。

逆の取引は、「新規買い」に対して「決済売り」、「新規売り」に対して「決済買い」という組み合わせになります。「新規」に対して「決済」することを「反対売買」といって、この差額が利益になったり、損失になったりします。ちなみに、「仕掛け」に対しては「手仕舞い」、「エントリー」に対しては「エグジット」です。日本語でも英語でも構いませんから、どれかひとつの組み合わせを覚えてくださいね。

ところで、「安く買って、高く売る」という取引は非常に一般的で理解しやすいのですが、「高く売って、安く買い戻す」というのは、あまり馴染みがないかもしれません。そのため、「ちょっと分かりにくいな〜」と感じるでしょうけど、今は取引の方法が2種類しかないことと、その名前をしっかりと覚えましょう。だんだん分かってきますから、ご心配なく！

第2章

「FXの仕組みと基本」を理解しよう

003

取引するときは
「まとめ買い」が基本

FXが投資家の目に魅力的に映るのは、少ない資金で比較的大きな取引ができるからです。言い換えれば、投資家が用意したお金を効率良く運用できることにあります。この仕組みが、FXで最大の特徴であり、投資家である皆さんが取引を始める前にしっかり理解しておきたいポイントです。

前項では、「10円や30円のしょぼい利益」の話をしましたが、実は100円ずつ取引するわけではありません。たとえば、1ドルが100円のドル／円ならば、この1万倍、つまり1万ドル分の取引をするのが基本で、まとめ買い、をするわけです。これを「1万通貨単位」といいます。

「1ドル100円なら、100万円分もいっぺんに取引するの!? そんなにたくさんのお金が必要なの?」とビックリするかもしれませんね。この点については、じっくり解説していきますね。

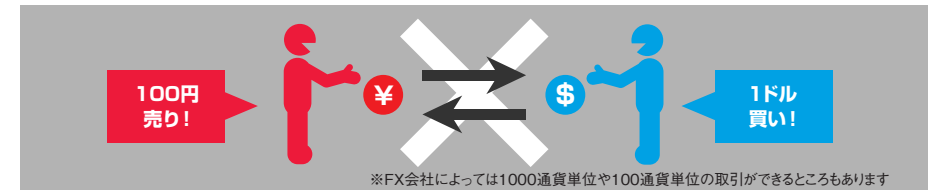
▶▶10円の儲けも1万倍なら話は別!

「しょぼいな～」と思われた10円や30円も、それが1万倍なら利益は10万円や30万円になります。とはいえ、FX会社によっては1,000通貨単位や100通貨単位というように、より小さい単位で取引できます。投資家のニーズに応じたラインアップが揃っているわけです。つまり、1ドル100円の時1000通貨単位なら取引総額は10万円というわけ。これなら安心で

▶まとまった単位の取引



▶小さな単位の取引



すね。もちろん、投資金額が小さいと儲ける金額も少なくなります。

▶▶まとめ買いをしても、実際に用意するのは少額でOK

すでに書いたように、FXは日本語で「外国為替証拠金取引」といいます。「証拠金取引」とは、「取引する総額に対して、一定の割合のお金を用意すれば良いですよ」という仕組み。具体的に、1ドル100円のために1万通貨単位で取引するケースを考えてみましょう。

このときの投資金額は100万円ですが、通常のFXは20万円前後も用意すれば充分です。もちろん、100万円を用意したほうが良いのですが、それでは敷居が高くなり、資金効率は落ちてしまいます。ここで用意した「20万円前後」のお金を「証拠金」といいます。1,000通貨単位で取引するのなら、証拠金は2万円もあれば充分でしょう。最初から、たくさん証拠金で取引するより、少額の証拠金で取引に慣れることが大切です。

次項では、証拠金の仕組みについて、さらに詳しく解説しましょう。

第2章

「FXの仕組みと基本」を理解しよう

004

効果的に利益をあげる
仕組みが「レバレッジ」

少ない資金で大きな取引をするのは魅力的です。儲かるときには、それは想像以上に儲かるからです。しかし、何事にも道理があります。欲を出しすぎると、しっぺ返しにあうのが世の常。適正なレバレッジを理解した上で取引をすることが、少しずつでもしっかり儲けつづける秘訣です。

「取引総額」と「証拠金」の関係について、もう少し掘り下げてみましょう。前項では、「1万通貨単位で100万円の取引をするとき、証拠金は20万円前後もあれば充分」と書きました。

たとえば、FX会社に開設した口座に20万円の証拠金を入金したとしましょう。そして、**1ドル100円で1万通貨単位（100万円分）の取引を始めた**とすると、**取引総額に対する証拠金の割合は20%**。これを逆に見ると、**証拠金に対して5倍の取引をしている**ことになります。**取引総額に対する証拠金の倍率を「レバレッジ」と**いいます。

もしも、取引総額に対して100万円の証拠金を用意すれば、レバレッジは1倍となり、感覚的には預金をしているのと同じ状態になります。

▶▶低いレバレッジで「堅実な投資」を目指す

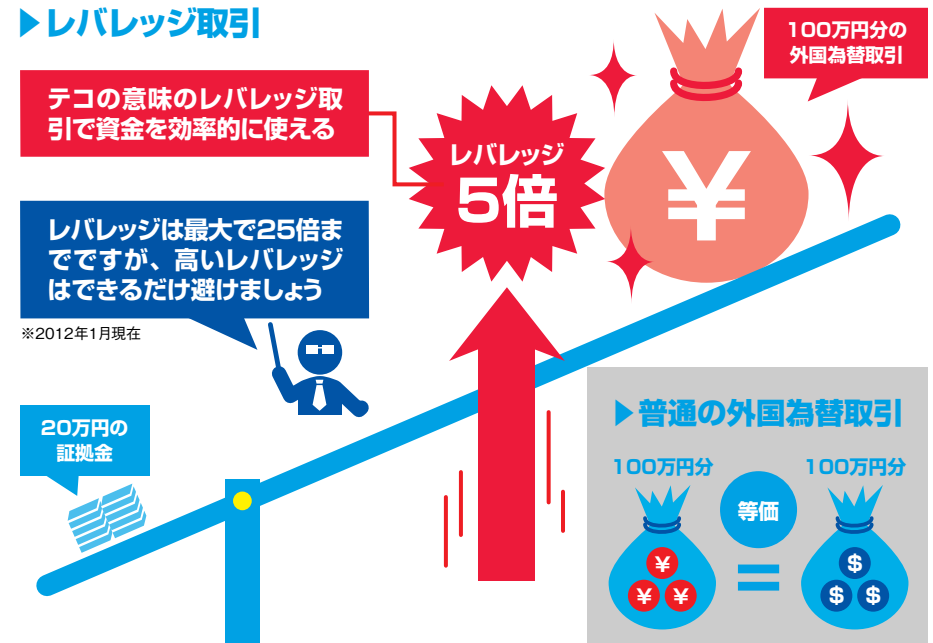
FXが個人投資家の間で人気になったのは、少ない証拠金で大きな取引ができるからです。いわゆる、「高レバレッジ取引」というものです。

▶レバレッジ取引

テコの意味のレバレッジ取引で資金を効率的に使える

レバレッジは最大で25倍までですが、高いレバレッジはできるだけ避けましょう

※2012年1月現在



少し前までは400倍とか500倍というレバレッジで取引できましたが、高いレバレッジは健全な投資を損なうと規制されました。高いレバレッジで取引すると儲かるときはものすごく儲かりますが、同じレベルで損をする可能性があるというわけです。やはり堅実に儲けるためには、最高で10倍が限度、3～5倍の低いレバレッジで取引することが望ましいでしょう。

ところで、証拠金を定額にしているFX会社があります。たとえば、「1ドルが90～100円のドル／円を1万通貨単位で取引するときの証拠金は4万円」「1ユーロが130円のユーロ／円を1万通貨単位で取引するときの証拠金は5万2,000円」というようにです。

この場合のレバレッジはおおよそ25倍ですが、これは金融庁の指導により国内のFX会社が最低限必要な証拠金として決めているだけです。そのため実戦でのレバレッジの目安は、高くても7～8倍程度に抑え、3～5倍前後に収まるにしましょう。そうすれば、精神的にも余裕のある取引ができるようになります。余裕を持った取引を心がけましょう。

第2章

「FXの仕組みと基本」を理解しよう

005

最初は間違いやすい
「アスク」と「ビッド」

ニュース番組や新聞で見聞きする為替レートは中値といって、外国為替を買うときのレートと売るときのレートのちょうど真ん中のレートのことです。つまり、為替レートには2種類あり、この差が、FX会社にとっては収益になり、投資家からするとコストになる、というわけです。

外国為替のレートには2種類あります。これはFXに限ったことではなく、海外旅行へ行くときにドルやユーロといったキャッシュや現地通貨のトラベラーズチェックに替えるときも同様です。たとえば、銀行などで円をドルに替えるときは102円、帰国してドルを円に戻すときは100円というようにです。

▶▶FXの代表的なコストが「スプレッド」

ニュースなどでは「今日の為替レートは1ドル101円です」ということがあります。これは「中値」のこと。実際には、**売りと買いで為替レートに差があり、これを「スプレッド」と**いいます。以前に比べて小さくなってきましたが、それでもスプレッドは必ずあります。スプレッドがFX会社の収益になるわけですから、これだけは仕方がありません。

そして、売るときと買うときの為替レートには、それぞれ呼び名があります。**投資家が買うときのレートが「アスク (Ask)」、売るときのレート**

たとえば、アメリカへ旅行するときに、円をドルのトラベラーズチェックに交換すると



ドル/円レートが100円のときにトラベラーズチェックを購入



▶FXのレート表示

たとえば、ドル/円が100.00円の場合は



が「**ビッド (Bid)**」です。入門したばかりの方は、間違えることが多いので注意してくださいね。

といっても、覚えるのは簡単です。投資家にとって「不利なレート」と考えれば良いわけです。ドル/円を例に具体的に説明しましょう。

為替レートは通常、99.99円と100.01円というように表示されています。この差0.02円（2銭）がスプレッドです。そして、アスクが100.01円で、ビッドが99.99円。高いレートで買い、安いレートで売らなくてはなりません。これは「新規」「決済」とも同じです。

仮に、買いと売りを同じタイミングで注文したら、2銭のロス（損失）となります。スプレッドは通貨ペアによって異なり、ドル/円やユーロ/ドルは狭く、ポンド/円や豪ドル/円はドル/円に比べて広いのが一般的です。また、対円通貨ペアのレート表示は、少し前までは小数点第2位までが普通でしたが、最近は小数点第3位まで表示するのが一般的になりました。これはスプレッドをより小さくするのが主な目的です。

第2章

「FXの仕組みと基本」を理解しよう

006

金利の高い国の通貨は
スワップ金利が魅力

少ない証拠金で大きな取引ができるFXでは、取引をする通貨ペアによって金利を受け取ったり支払ったりします。特に、低い金利の通貨を売って、高い金利の通貨を買えば、受け取ることのできる金利はとても魅力的。2つの国の金利差が大きいほど、そのメリットは大きくなります。

日本は長らく超低金利の状態が続いています。そのため、銀行に預けても雀の涙ほどの金利しか付きません。景気が悪いときは金利が低くなる傾向にあるからです。ところが、好調な景気が続くと、金利はだんだん高くなりますが、このメカニズムについては、第4章で詳しく解説します。

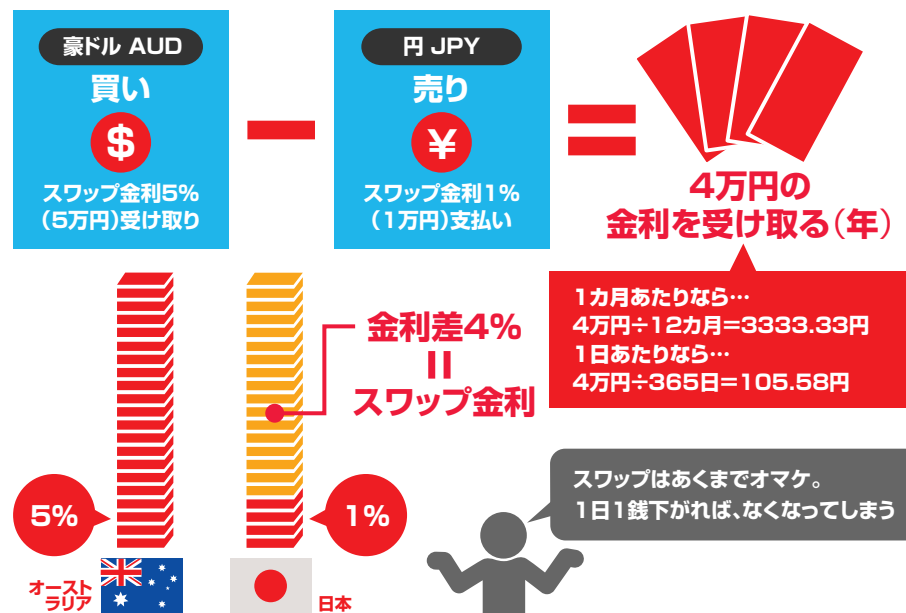
ここでは「国によって経済の状況が違う以上、それぞれの金利水準は異なる」ということだけを覚えてください。**FXで取引するときにも、金利を受け取ったり支払ったりします。これを「スワップ金利」といいます。**

▶▶各国の金利差が縮小し、今では魅力に欠けるスワップ金利

日本の円とオーストラリアの豪ドルを例にしてみましょう。日本の金利が1%、オーストラリアの金利が5%だとします。計算しやすいように豪ドル/円の為替レートが100円だとすると、1万通貨単位を買うと100万円の取引になります。

豪ドル/円を買うということは、金利1%の円を売って、金利5%の豪

◎豪ドル/円が100円のと看、1万通貨単位(100万円)を新規買いとすれば……



ドルを買うわけですから、金利差の4%分に相当する4万円を受け取れます。ただし、これは1年間保有したときに受け取れる金利で、実際には日割りで計算されます。仮に1カ月間、豪ドル/円を買ったままにしていると、4万円の12分の1の約3,333円になります。

一方、同じ金利と為替レートで豪ドル/円を売った場合は、買ったときとは逆に1年間の保有なら4万円、1カ月間なら3,333円を支払う必要があります。ただ、買いと売りとはスワップ金利が微妙に異なります。実際には、FX会社が1日あたりのスワップ金利を買い、売りのそれぞれで表示していますから、いちいち計算する必要はありません。

数年前までは、日本を除く主要な国々の金利が高かったため、円を売って外国の通貨を買えば、かなり高いスワップ金利を受け取ることができました。スワップ金利が相当な金額になることも、FXが投資家の注目を集めた理由でもあります。しかし、2008年秋以降は世界同時不況になり、主要国は金利を低くしているため、スワップ金利の魅力は薄れています。

第2章

「FXの仕組みと基本」を理解しよう

007

外貨預金より
圧倒的に有利なFX

FXは、少ない資金で大きな取引ができて効率が良いということで、個人投資家が注目しています。ところが、2008年に発生したリーマン・ショック以降は、FXを外貨預金の代わりに使う個人投資家も増えています。外貨預金に比べて、あらゆる点でFXが有利だからです。


外貨預金が相変わらず人気です。銀行で取り扱っている外貨預金は、高い金利の国に定期預金として預ける金融商品です。しかし、外貨預金には明らかな問題があります。こういって、外貨預金をしている方はビックリされるかもしれませんが、悪い商品だといっているわけではありません。

何が問題かというところ、円高になったときには損失を被るおそれがあることです。日本では定期預金にしても、雀の涙ほどの金利しかつきません。ところが、6%や8%といった金利を受け取れると聞けば、誰だって魅力を感じるはずなんです。

ところが、この高い金利は為替レートが動かなければ、ちゃんともらえるわけですが、為替レートが動かないなんてことはありません。つまり、**外貨預金をしているときに円高になれば、高い利息を受け取れても、日本円に戻すときには元本が目減りしてしまいます。**しかも、利息にはしっかりと税金がかかりますから、まさに「泣き面に蜂」ですね。

もちろん、円安になれば、高い金利だけでなく為替差益を手にすること

	外貨預金 (定期)	FX (外国為替証拠金取引)
金利	これが目的	スワップ金利(オマケ)
スプレッド	かなり広い	とても狭い
解約	期限まで保有 途中解約には手数料	取引しているときは 24時間売買可
値上がり 値下がり	あり	あり 圧倒的に有利!
円高リスク	あり	円を 買えばなし
税金	金利の20%	スワップ金利 +利益の20%

FXは外貨預金としても使えるし、 機動性も抜群!!!

ができますが、その逆もあることを理解しておく必要があります。

▶▶FXを外貨預金の代わりに利用する人が急増

FXを外貨預金の代わりに利用する人が急増しています。なぜかというところ、FXは円を売るだけでなく、円を買うこともできるからです。要するに、円高になりそうなときは、外貨預金をせずに、FXでドル/円やユーロ/円を売っておくというわけです。

FXを外貨預金の代わりに使うメリットは他にもあります。**外貨預金のスプレッドはFXに比べて、ものすごく広いため、為替レートが動かなくても、スプレッド分の為替差損が発生します。**また、機動力の点でも大きな差があります。外貨預金の場合は、1日に1回、その日の為替レートが決まります。それ以降は為替レートが急に動いても為替術がありません。リーマン・ショックのときは、ドル/円が一晩で10円も円高になりました。FXは24時間いつでも売買できますから、これも大変な魅力ですね。

第2章

「FXの仕組みと基本」を理解しよう

008

円高でも儲けられるのが
FX最大のメリットの1つ

ニュース報道では、円安のメリットと円高のデメリットばかりをクローズアップします。でも、本当に怖いのは超円安。資源や食料品などの輸入品が高騰して物価は上昇、円の価値も猛烈に下がります。FXは、超円安による円の価値の目減りを防ぐ目的にも活用することができるのです。

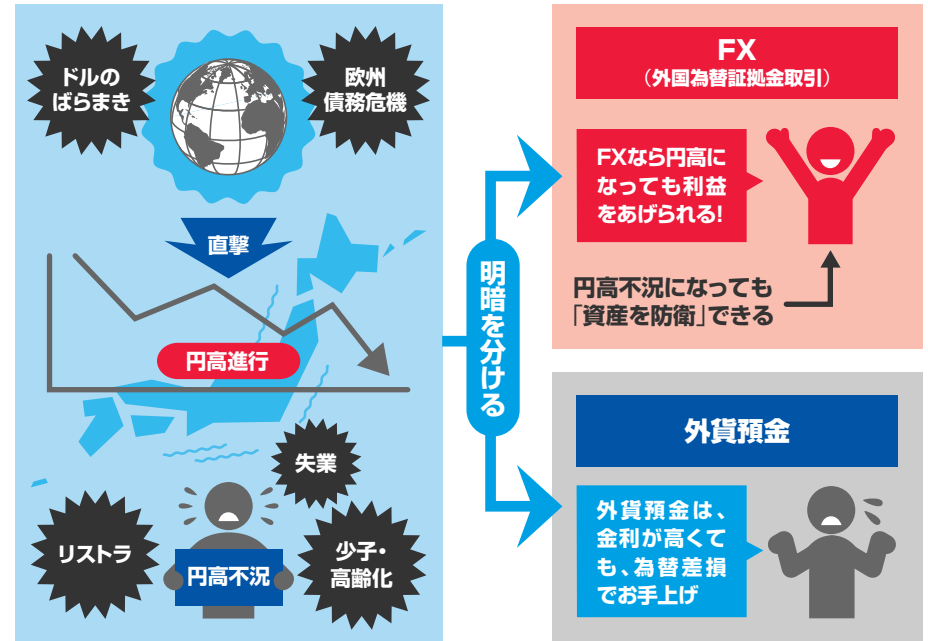
FXの魅力を外貨預金と比較して解説しました。しかし、それだけではありません。「投資」としてのFXは、他の金融商品に比べても有利です。

たとえば、株式投資をするときは、ほとんどの場合、株価が上がらなければ利益をあげることはできません。要するに、円高で不況になれば、輸出企業の業績は悪くなりますし、日本経済全体も元気がなくなってしまいますから、株式投資で利益をあげるのは難しいでしょう。これは、個人投資家に人気の投資信託やファンドにもいえることです。

▶▶不況になってもFXは強い

ところで、数年前、石油などの資源価格が高騰して、ガソリンの値段が跳ね上がりました。しかも、このときは円安傾向でした。

円安になれば、企業の業績が上がるはずですが、資源のない日本は、これらを輸入しなければなりません。そのため、円安は企業や家庭のコストアップにつながります。



すると、企業は売上が減らなくてもコストがアップしたことで利益が減ってしまい、家庭では節約に対して敏感になり、これもまた景気の足を引っ張ってしまいます。資源などを扱う会社は利益が出て株価が上がっても、経済全体ではマイナスとなり、やはり全般的に株価は上昇しません。

こういうときは円安になりやすいですから、FXでは円を売ってドルなどの外貨を買うという取引をすれば利益をあげることができます。ちなみに当時は、海外の先進国は軒並み金利が高い状態でしたから、かなりたくさんのスワップ金利を受け取ることができました。二重の喜びですね。

そして、もう1つ大きなメリットがあります。円安になるということは、円の価値が下がっていることになります。日本にいとピンとこないかもしれませんが、これは円高よりも怖いことです。「円の価値が下がる」ことを防ぐ方法として、FXを利用することができます。

このように、FXは、円高になっても円安になっても、景気が良くても悪くても、利益をあげるチャンスがある魅力的な金融商品なのです。

第2章

「FXの仕組みと基本」を理解しよう

009

FXで儲けるためには
「4つのスキル」を理解しよう

口座を開設して外国為替市場へ“出陣”する前に、身に付けておく必要がある「4つのスキル」を説明しておきましょう。これらのスキルは、FXで利益をあげるためだけでなく、ご自身の資金を守るためにも、とても大切です。投資も「攻守バランス良く」が基本なのです。

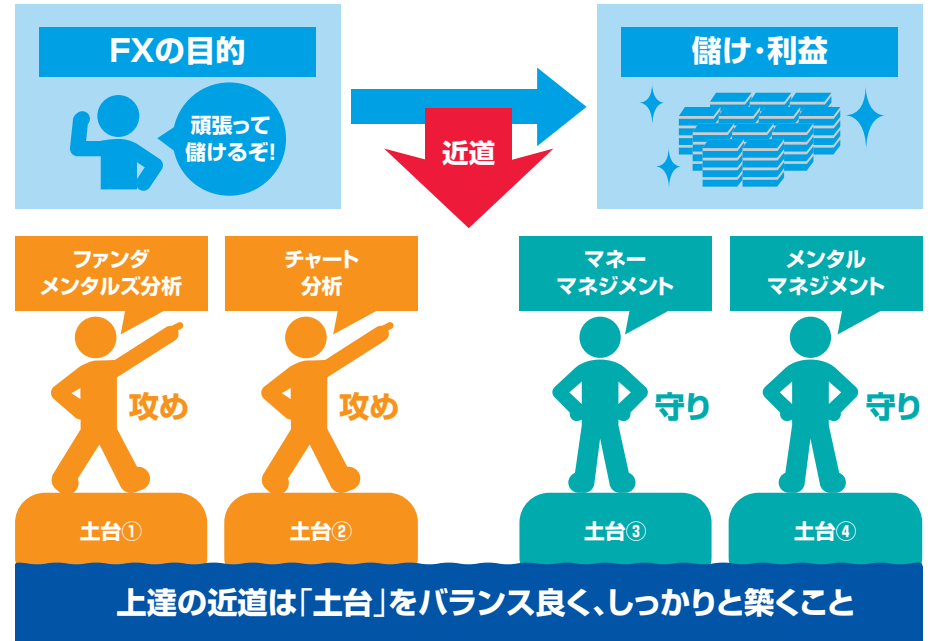
外国為替相場やFXの仕組みについて、だんだん理解が深まり、すぐにも取引してみたいと思っているのではないのでしょうか。

しかし、もう少しおつき合ってください。というのも、FXは口座さえ開設すれば、誰でも、いつでも、取引することはできますが、「利益をあげる」となると、あと4つのスキルを身に付けなければならないからです。

何事も最初が肝心。投資で失敗する多くの人は、「すべてのスキルやノウハウは実戦経験で身に付ける」「やっていればそのうち分かる」という考えを持っていることが圧倒的です。皆さんには、そうした過ちを犯して欲しくありません。実戦でスキルやノウハウを身に付けるということは、大切な資金を、場合によっては「ドブに捨てる」ことになるからです。

▶▶まずは「為替レートが動く仕組み」を理解すること

4つのスキルとは、「為替レートが動く経済的な理由」「為替レートが過去にどのような動きをしていたかを知ること」「実戦的な取引と資金管理



の方法」「投資家自身の心を管理する方法」です。

「為替レートが動く経済的な理由」とは、世界の経済がどのように動いているか、それが各国にどのような影響を及ぼしているかということです。これが「ファンダメンタルズ分析」です。外国為替市場はグローバル経済の象徴でもありますから、これを通して経済や金融の仕組みを理解します。

「為替レートが過去にどのような動きをしていたかを知ること」では、「チャート（テクニカル）分析」を使います。「今日の為替レートは××円」というように外国為替相場を点で見ても何も分かりません。やはり、最低でも過去数カ月分の「相場の流れ」を見ることが大切です。そのために必要なのが「チャート」というもの。これと経済の動きとを照らし合わせて各通貨ペアの特徴を把握したり、これからの値動きを予測したりします。

「実戦的な取引と資金管理の方法」では、取引の仕組みとお金をどのように管理すれば良いかを、「投資家自身の心を管理する方法」は投資家が相場に対するとき犯しがちな過ちとその対策を、それぞれ解説します。

・コラム——ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール



「円高」になると、どうして日本は不況になるの？【2】

円高が急激に進み、それが長期化すると「円高還元セール」を喜んでばかりはいられません。モノの値段が下がることは喜ばしいことですが、それはお金を使う側の話。お金を受け取る側は、収入が減ることになります。消費を控え、将来の不安が大きくなれば、経済の活力は失われます。

「円高」になると日本が不況になる理由について、第1章のコラムでは輸出企業にスポットを当てて考えてみました。今回は、輸入企業とデフレについて解説したいと思います。

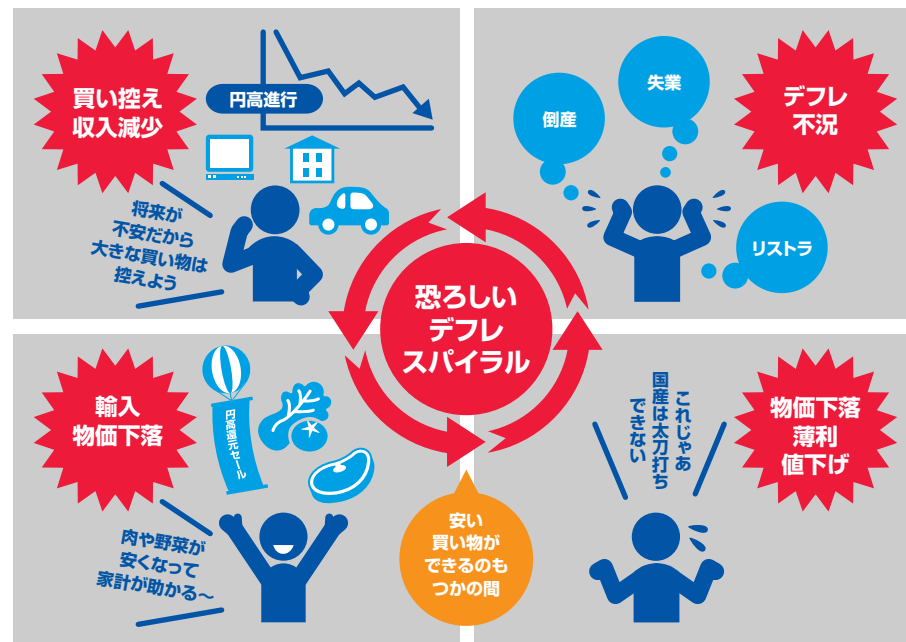
▶▶「円高還元セール」が景気を悪くする？

「円高」が進むとスーパーや百貨店では「円高還元セール」を実施しますが、これがデフレ不況を進めてしまう元凶のひとつでもあります。

そもそもデフレとは「**デフレーション**」といって、「**モノの値段が下がり、お金の価値が上がる**こと」をいいます。

つまり、デフレは現金や預金ばかりをたくさん持っている人にとっては好ましい面があるものの、一般庶民にとっては決して良い状態ではありません。「肉や野菜、ブランド品が安くなれば、得した気分になれるのに、どうして？」と思われるかもしれませんね。

モノの値段が下がるということは、それだけ企業や個人を問わず、収入



が減ることにつながります。つまり、一時的に安い値段で何かを買うことができても、結果的に給料が減ったり、ボーナスがなくなってしまうと、それだけ消費できるお金は減ってしまいます。そこでちょっと怖い話を。

ある家庭の主婦が、スーパーで値下げセールをしていて節約ができると喜んでいました。ところが、その半年後、ご主人の勤めていた会社が倒産してしまいました。よくよく聞いてみると、ご主人が勤めていたのは、値下げセールで無理な値引きを強要された会社だったのです。笑い話にもならない本当の話ですが、だからデフレは怖いのです。

モノの値段がこの先も下がると分かれば、不動産や自動車といった高額な買い物を控えるはず。しかも、景気が悪ければ、これまで5年で買っていた自動車を10年くらいは乗ろうと、ますます消費を控えるようになります。そうなれば、企業だけでなく、そこに勤める人たちも、下請け企業に勤める人たちも、収入が減るだけでなく、将来的に不安になります。また、お金を使わないように……。これがデフレ・スパイラルです。

第3章

FX会社に口座を 開設するときの 目のつけどころ

- 001 FX会社を選ぶときはここに注目しよう【1】 38
- 002 FX会社を選ぶときはここに注目しよう【2】 39
- 003 FX会社を選ぶときはここに注目しよう【3】 40
- 004 FX会社を選ぶときはここに注目しよう【4】 41
- 005 投資の選択肢を広げるために商品ラインアップに注目 42

第3章

FX会社に口座を開設するときの目のつけどころ

001

FX会社を選ぶときは
ここに注目しよう【1】

FX会社に初めて口座を開設するときは、どの会社を選んで良いか悩むところです。ネームバリューのある会社がベストとは限りませんし、あまり小さな会社もサービスなどの点で不安です。そこで、FX会社を選ぶときのポイント、注意点などをご説明しましょう。

外国為替市場の特徴とFXの仕組みがだいたい分かったところで、早速、FX会社に口座を開設してみましょう。まず、FX会社を選ぶときのポイントを整理しておきたいと思います。

FX会社といっても、FXだけを取り扱う会社から株式や投資信託からFXまで幅広く取り扱っているところまであります。また、三菱や住友といったメガバンクの傘下にある証券会社のFX部門もあれば、FX専業会社や、大手に属さない独立系の会社もあります。さらに、初心者や入門者に優しい会社もあれば、上級者向けの会社などさまざまです。

FX会社や証券会社に口座を初めて開設するのであれば、インターネットでの人気ランキングから上位の会社を選んでみるのも手です。

▶▶個人投資家の人気が高いことはFX会社選びのバロメーター

FX会社を選ぶポイントはいくつかあります。日常、取引をするときに気になるのが、スプレッドです。また、試しでいくつか口座を開設してみ

初心者・入門者向け

メガバンク系

信頼度抜群
中級レベルには不満

大手証券系

独立・中堅証券系

サービス精神旺盛

外資系

情報・機能ともに充実
敷居が高いケースも

中上級者向け

独立・中堅証券系

質・量ともに豊富

外資系

専門知識などが必要



FX会社を選ぶポイントはコレ

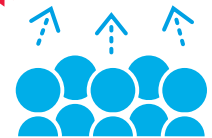
FX会社
人気ランキング

口座数 No.1

No.1 預かり証拠金

取り扱い通貨ペア No.1

No.1 狭いスプレッド



るときには、ひとつ大事な点を確認しなければなりません。

それは、**口座開設後に1万円とか10万円といった金額の証拠金を振り込まないと為替レートを表示してくれないところや、ログインすらできないところ**もあります。これは、試しで口座を開設する人が増えたからです。

FX会社にとって、取引をしない口座が増えるのは、手間がかかったり、管理コストがかかったりするためメリットがありません。そのため、証拠金を預けさせることで、稼働率を少しでも高めようという狙いがあります。

ただ、個人投資家から人気が高いFX会社は、そうした間口の狭さを感じさせないところも評価されています。言い換えれば、「そのうち取引してくれれば良いですよ」という懐の深い姿勢があるわけです。

スプレッドの広い狭いを気にする前に、まず、この点を確認することをお勧めします。さもないと、あちこちに口座を開設して、証拠金を振り込む手間と時間とコストが無駄になりますし、お金が分散してしまうのも非効率的ですからね。

第3章

FX会社に口座を開設するときの目のつけどころ

002

FX会社を選ぶときは
ここに注目しよう【2】

口座を開設するときには、スプレッドとスワップ金利が気になるころでしょう。スプレッドも単に狭いというだけでは、取引に慣れてきたときに不自由さを感じる場合があります。できれば、取引条件や通貨ペア選びの面で自由度の高いFX会社を最初から選んだ方が、先々、得ですね。

スプレッドは、個人投資家にとってはコスト、FX会社にとっては収益になります。皆さんの立場からすれば、コストは安いほうが良いに決まっています。しかし、ホームページで表面的に書かれているスプレッドだけを見て、口座を開設。そして、通貨ペアを選んで取引しようとする、イメージよりもスプレッドが広いというときがあります。

これは別に、FX会社が嘘をついているのではなく、一番狭いスプレッドの通貨ペアを大々的に告知しているため、最初に「この会社のスプレッドはすべて狭い」というイメージを植え付けられてしまうからです。

▶▶ドル／円とユーロ／ドルのスプレッドだけが極端に狭い

FX会社は、スプレッドを狭くすることで投資家を取り込もうと躍起です。薄利多売で競争に勝ち残ろうとしているからです。しかし、取引量の多いドル／円とユーロ／ドルはスプレッドが極端に狭くても、他の通貨ペアが他のFX会社に比べてかなり広いというケースもあります。

**FX会社
人気ランキング**

No.1 **狭いスプレッド**

1~2種類だけか
全般的に狭いか
数社で比較検討

超短期・大資金向き

通貨ペア選びの余地がない

A社 狭さ
No.2 スプレッドが
狭い通貨ペア
ドル／円 ユーロ／ドルだけ \$ ¥
€ \$

B社 狭さ
No.1 スプレッドが
狭い通貨ペア
ドル／円 だけ \$ ¥
\$ ¥

比較的万能

通貨ペア選びの余地がある

C社 No.1でも
2でもない 主力通貨ペアは平均的に狭い
ドル／円 ユーロ／ドル ユーロ／円
ポンド／円 豪ドル／円 \$ ¥
€ \$
€ ¥
£ ¥
\$ ¥

FX会社を選ぶポイントはコレ

ドル／円やユーロ／ドルで満足していても、取引に慣れてくると、他の通貨ペアに目移りするときがあります。しかし、**スプレッドが広いと通貨ペア選びの自由度が制限**されてストレスがたまってしまいます。

また、無理に取引をすれば、コスト負担が大きく、なかなか利益をあげることができません。**主要な通貨ペアを比較して、可もなく不可もなくというところを選んだ方が後々、使い勝手が良い**はずです。

ちょっと裏話を紹介しましょう。ある証券会社のFX部門は、専業に比べて圧倒的に広いスプレッドを提供していました。これは、株式取引の口座を持つ投資家が手間を嫌って、同じ会社内にFXの口座を開設する人が多かったからです。他のFX会社がスプレッドの引き下げ競争をしても、その会社は広いまま。それでも、お客さんは離れていかなかったそうです。

投資家は口座開設の手間だけでなく、使い慣れた取引画面が変わることを嫌い、コスト面で不利でも使い続けるケースが多いそうです。選択は投資家の自由ですが、最初が肝心だということに変わりはありません。

第3章

FX会社に口座を開設するときの目のつけどころ

003

FX会社を選ぶときは
ここに注目しよう【3】

スプレッドや最低預け入れ金額などの条件は、データを比較すれば分かります。しかし、システム面の善し悪しは、口座を実際に開かないと分からないことも多々あります。正式に手続きしないデモ口座を使って確認することもできますが、やはり、それだけでは不十分なケースがあります。

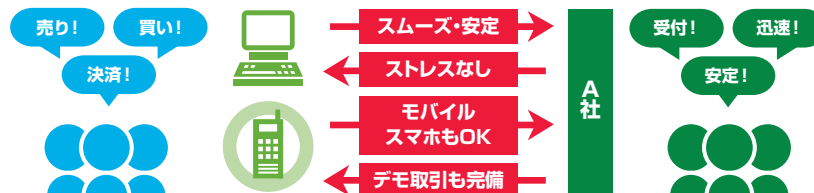
数値で比較できる取引条件面のほかに、忘れてはならないのがシステム面のチェックです。

外国為替市場は日夜眠ることなく、世界を駆け巡っています。何かをきっかけに突然、相場が動き出す。そういうことだってあります。金融の世界は、流動性が命。買いたいとき、売りたいときにしっかりと取引できることが何よりも大切です。

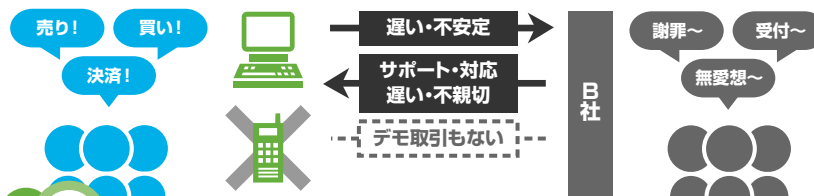
ところが、インターネットの接続環境が光ファイバーなどで早くなったとしても、FX会社のシステムが重かったり、反応が遅かったりすれば、しっかりとした取引はできません。また、最近では減ったとはいえ、過去にシステムダウンを何度も起こしている会社は、たとえ取引面の条件が魅力的でも避けるべきでしょう。

多くの会社は、注文を出せば瞬時に応答して、買えたか、売れたかの結果が分かるようになっていきます。しかし、中には、注文ボタンを押しても一向に応答がなく、時に1分も待たないと、注文が通ったかどうかすら分

至れり尽くせりのFX会社



投資家に優しくないFX会社



FX会社を選ぶポイントはコレ

からないFX会社もありました。これはそれほど古い話ではありません。

▶▶ モバイル口座を完備していることは必須条件

多くの個人投資家は、日頃は仕事をしていたり、家事をしていたりします。つまり、四六時中、パソコン画面の前に張り付いて取引できるわけではありません。また、外出や就寝、食事をするときも同様です。スプレッドが業界最低と宣伝していても、モバイル口座がなければ、機動的で安心した取引はできません。携帯やスマートフォンなどのモバイル端末で相場の動きを確認できる環境、つまり、**モバイル口座を完備している会社を選ぶのも、スムーズな取引をするための必須条件**といえるでしょう。最近では大方で完備しているようですが、念のため、この点も要チェックです。

スプレッドとシステムに関することでは、相場が急変動すると、スプレッドが極端に広がることがあります。これはあまり好ましいことではありません。できるだけ変動の小さい会社を選ぶのも大切なポイントです。

第3章

FX会社に口座を開設するときの目のつけどころ

004

FX会社を選ぶときは
ここに注目しよう【4】

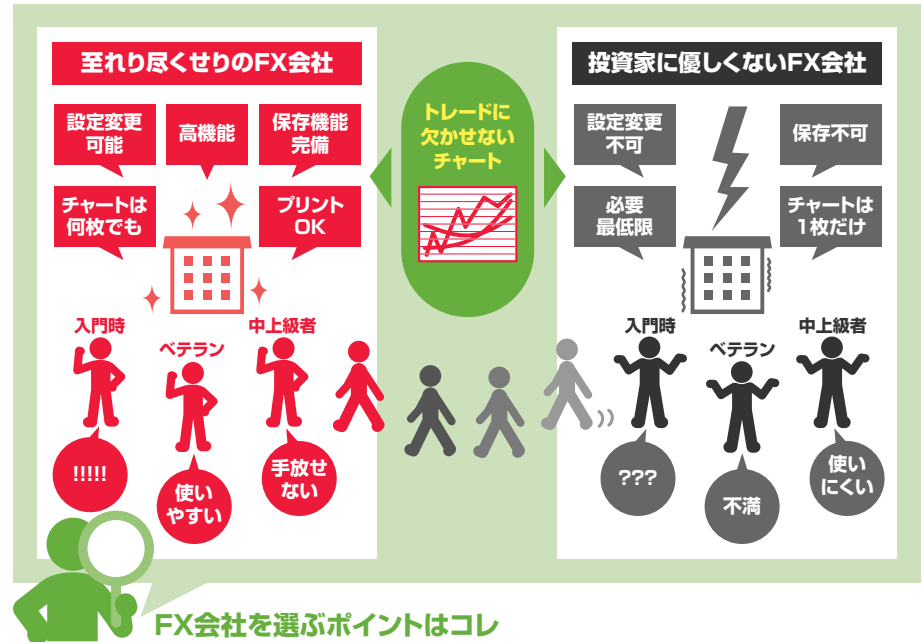
実際に取引をするときに、必ず使うのが相場の動きを時系列に表示したグラフ＝チャートです。最初は使いこなせなくても、取引に慣れてくると、だんだんあれこれと使いたくなります。やはり、高い機能を兼ね備えたチャートシステムを提供している会社は、最有力の候補になるでしょう。

詳しい解説は第7章に譲りますが、相場の動きを示すチャートには、それは数多くの使い方があります。様々な方法で導いた数値で売りや買いのタイミングを計ったり、線を引いて相場の動きを分析したりといった具合にです。チャートは、できるだけ高い機能を持っていたほうが、取引が上達したときの満足度だけでなく、取引の成績にも直結します。

しかし、最初のうちは、チャートの善し悪しを判断するのは難しいと思います。判断のポイントは、単純に「高機能」とか、「上級者向け」とか書いているものがあれば、それに超したことはないでしょう。

002項で書いたように、取引やFX会社の画面に一度慣れると、別の会社に口座を開設して取引をする気にはなれません。また、口座を乗り換えたとしても、新しい会社の取引画面や情報画面に慣れるまでは勝手が分からずストレスがたまり、成績を落としてしまう投資家もたくさんいます。

こうした点でも、**入門者、初心者のうちいくつかの口座を開設しておいて、いろいろ触ってみる**。そして、**使い勝手を確認できる環境を整えて**



FX会社を選ぶポイントはコレ

おくことが大切です。

▶▶あまり小さい会社やあれこれやっている会社は避ける

最後に、会社のブランドや規模の点について触れておきましょう。金融商品を取り扱う会社は、金融庁の指導もあり、経営の面でかなり安定してきました。預け入れた証拠金は、FX会社が経営のために使ってしまうないように分別管理することも当たり前になりました。

それでも、小さな会社や投資家との取引以外の事業が本業の会社は避けるべきでしょう。というのも、FXの世界も競争が熾烈になってきて、体力のない会社は徐々に淘汰されたり、儲からなくなれば撤退してしまうからです。スプレッドを狭くして取引量の多い通貨ペアに誘導するということは、すでに書いたように薄利多売の事業構造。そのため、メガバンクや大手証券の系列、独立系であれば上場していたり、外資系であれば「世界有数の～」といった会社の信頼性が高いのはいうまでもありません。

第3章

FX会社に口座を開設するときの目のつけどころ

005

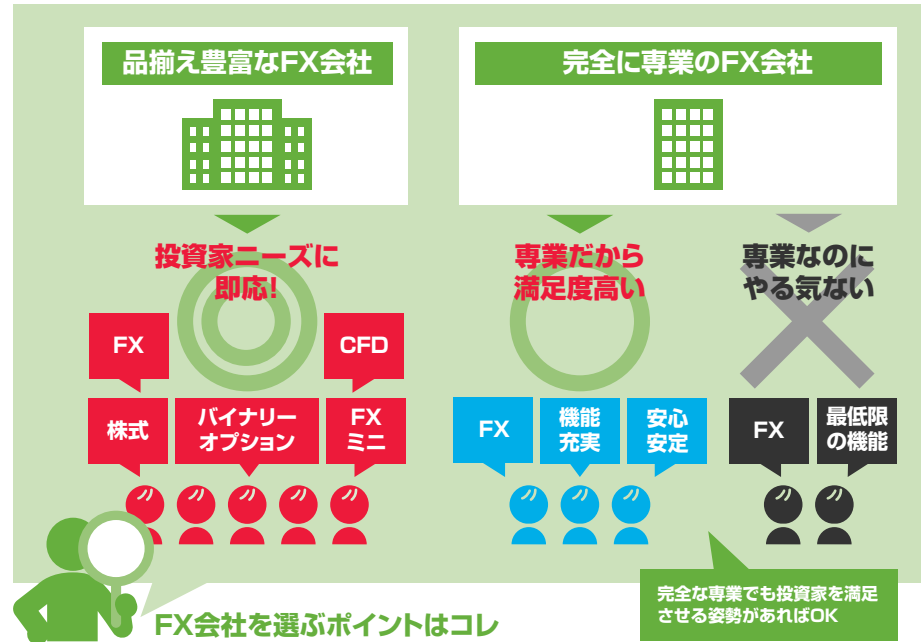
投資の選択肢を広げるために
商品ラインアップに注目

投資の世界は新しい金融商品が続々と登場しています。中でも、注目すべきなのが、原油や金などの商品相場。中国やインドなど人口がとてつもなく多い国の経済が先進国並みになろうとしていますから、資源や穀物の需要はあっというまに高まり、外国為替相場への影響も大きくなります。

金融商品には多彩な顔ぶれが揃っています。中でも最近、**個人投資家の間で注目されているのが、原油や金などの資源や貴金属、小麦や大豆などの穀物といったコモディティ（商品）、世界各国の株式指数を取引する分野**です。この分野には、株式市場に専用の上場投資信託（ETF）が登場していますが、FXに似たCFDという金融商品もあります。

CFDとは、英語の「Contract For Different」の頭文字をとった略語で「差金決済」という意味。FXも差金決済です。差金決済というのは、買ったときにその代金をすべて支払うのではなく、売って決済したときの差額分を清算する仕組みです。

たとえば、1ドル100円のドル／円を1万通貨単位買えば、100万円が必要です。ところが差金決済なら、1ドル102円になったときに売って決済すれば、2万円分だけのお金をやりとりする、つまり、この場合は、2万円の利益を受け取るだけです。逆に98円になって、これ以上の損失は避けたいと思えば、決済をして2万円を支払うと取引は完了します。



世界の経済は、中国やブラジル、インドなどの新興国が牽引しています。これらの国はいずれも人口が多く、経済が発展すればたくさんの原油やレアメタルを使います。すでにそうなっていますが、今後も景気の波があっても、需要が減ることは考えにくい状況です。

そうすると、**通貨だけでなく、コモディティの相場も重要な投資先**となります。CFDが注目を集めているといっても、まだ日本に登場して日が浅いことから、これからの普及が期待されているレベルです。

しかし、投資の選択肢は広いほど良いわけですし、いまや外国為替の世界も商品相場に大きな影響を受けます。CFDの取引は上級者になってからですが、商品相場がどのような動きをしているかを常に把握できる環境を整え、身近な存在にしておくことも、取引が上達する秘訣です。

FX会社選びをするとき、決め手になる条件ではありませんが、商品ラインアップとしてCFDを揃えているかどうか、余裕があれば、チェックすることをお勧めします。将来、きっと役に立つはずですよ。

第4章

「経済と金利と為替」の 関係を理解しよう

- 001 お金が「活発」に動き回ると景気が良くなる 44
- 002 経済の調整弁の役割を果たすのが「金利」 45
- 003 金利を上げ下げするのは中央銀行の役割 46
- 004 世界の経済と金融市場に絶大な影響力を持つFRB 47
- 005 「金利の動き」を理解するには「国債の値段」に注目しよう ... 48
- 006 政策金利の変更を金融機関が「催促」する 49
- 007 中央銀行が国債を売買して金利を微妙に調節する 50
- 008 政策金利がゼロになったとき中央銀行はどうするの? 51
- 009 景気回復の証拠が整えば金融緩和は解除される 52
- 010 金利差は単なる「差」ではなく「どちらに向かうか」が大切 ... 53

コラム ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール

- 量的緩和は諸刃の剣。不景気なのに物価が上昇する ----- 54
- 良い金利上昇と悪い金利上昇 これってどういうこと? ----- 55
- 国の借金が多いだけで金利は上がらない ----- 56

第4章

「経済と金利と為替」の関係を理解しよう

001

お金が「活発」に動き回ると
景気が良くなる

景気の善し悪しをみるためには、「お金（マネー）」が活発に動いているかどうかにかかっています。お金が活発に動いていれば、企業や個人の収入は増え、モノやサービスの値段は上昇します。そして、景気が良い状態を長く続けるためには、金利の調節が欠かせません。

為替レートが動くのは、国ごとの経済がどのような状態にあるかが鍵を握ります。「それって、どういうこと？」と思われるかもしれませんね。そこで、まず「景気」と「物価」の関係をひも解いていきましょう。

▶▶景気が良くなるとモノやサービスの値段が上昇する

「^{マネー}お金」は、「経済の潤滑油」といわれます。これは、**お金が「活発」に動き回ると景気が良くなり、お金が「停滞」してしまうと景気が悪くなる**、と言い換えることができます。お金が「活発」に動き回るようになるには、企業の業績が良くなり、国民の給料やボーナスなどの収入が増えなければなりません。そうなれば、モノやサービスが売れ、高い価格帯のモノがよく動くようになります。そして、企業は工場や設備を増設したり、従業員を増員したりして事業はいつそう拡大し、その国の経済は豊かになります。

このように、お金が「活発」に動き回るとは、その国の人々にとって好ましいことですが、その一方で副作用も出てきます。それが「**物価上昇**」



です。欲しいものを欲しいときに手に入れられる経済状況は好ましいことですが、皆が欲しがれば、売る側が一番高く買ってくれる相手に売る、いわば、売り手市場になります。その結果、物価が上がるわけです。

そこで、不動産をベースに景気と物価の関係を説明しましょう。景気が良くなると、マンションや戸建て住宅、テナントビルの建設や売買が活発化します。景気が低迷していたときよりも高い価格帯のマンションが売れるようになり、地価はビジネス街や繁華街から上がりはじめます。不動産価格が上昇すれば、ビルのオーナーは賃料を上げ、より多くの収入を得ようとします。一方、テナントとして入っている企業やお店は、賃料の上昇分をモノやサービスの値段に転嫁します。こうした循環を少しずつ繰り返すことで、景気はより好調になり、物価はさらに上っていきます。

しかし、この状態を放置しておくと、好景気が短命に終わってしまう可能性が高まります。そこで、**中央銀行は景気の良い状態が長く続くように「金利」を調節することになります。**

第4章

「経済と金利と為替」の関係を理解しよう

002

経済の調整弁の役割を
果たすのが「金利」

「景気」と「物価」と「金利」は、密接な関係で結びついています。景気が良い状況が続けば金利は高くなる傾向にあり、景気が低迷したり、悪化したりすれば金利は低くなる傾向にあります。このメカニズムに着目することで、外国為替相場の動きを予測することができます。

「景気」と「物価」の関係が分かったところで、今度は「物価」と「金利」について解説しましょう。

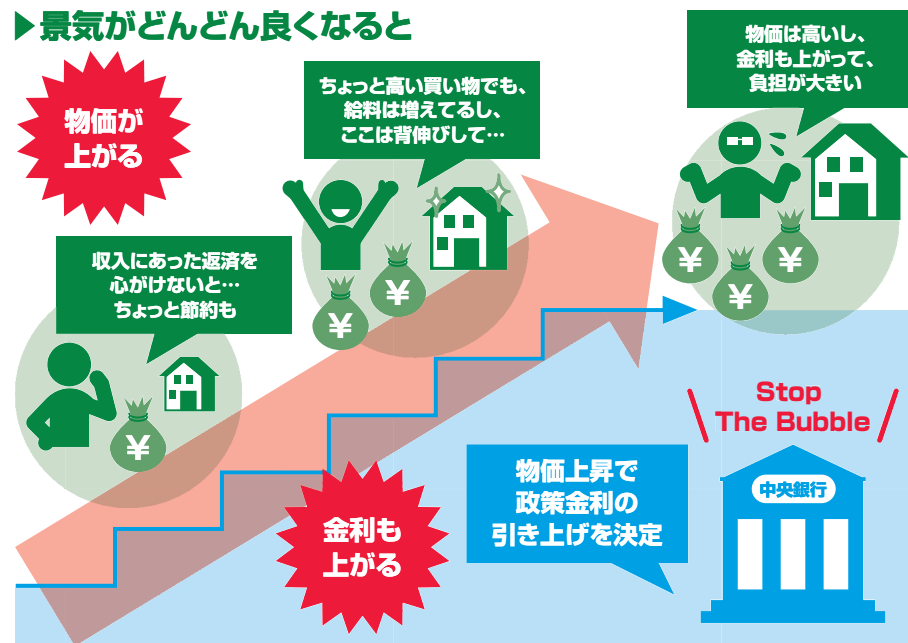
▶▶ 好調な景気が続くと「金利」が上がりはじめる

モノの値段が上がるよりも収入が増えるペースが速ければ、生活は豊かになりますが、その逆になると、生活は苦しくなります。

ニュースなどで、株や不動産で大儲けした人を取りあげることがありますが、こういうときの経済は「好調」から「過熱状態」になっています。しかし、経済の過熱状態はそれほど長続きしません。そして、過熱したあとは景気が悪くなることが多く、そうなってから立て直すのは大変です。

そこで、中央銀行、日本では日本銀行が、経済の過熱を未然に防ぐために金利を引き上げます。この金利を「政策金利」といいます。好景気が緩やかに長く続くことで、国民の生活は豊かになり、国の税収も増えます。そのため、持続的成長を維持することが、経済の舵取りで最も重要です。

▶ 景気がどんどん良くなると



金利が上がれば、銀行にお金を預けるほうが有利なため、消費を控えるようになり、たとえば、転売目的で不動産を買っても思うようには売れず、金利負担だけが大きくなるのしかかります。政策金利は、0.25~0.5%ずつ段階的に引き上げられますが、経済への影響は見た目の数字よりもはるかに大きくなります。「金利」が、経済の調整弁の役割を果たしているわけです。

金利が上がりはじめると、景気に陰りがみられないかぎり下がることはありません。つまり、下がるときはずっと下がり、上がりはじめると景気が過熱しないように一定のレベルまで上がりつづけるのが一般的です。

そのため、経済が好調で金利が高くなりそうな国には預貯金のメリットが高まり、世界からお金が集まる過程で、その国の通貨が買われます。また、経済の好調な国で事業展開をしたいと考える外国の企業も現地で会社を設立したり、支店を作ったりします。このときも、経済が好調な国の通貨を買わなければなりません。こうして、経済の好調な国は金利が高くなり、通貨も人気になるわけです。

第4章

「経済と金利と為替」の関係を理解しよう

003

金利を上げ下げするのは中央銀行の役割

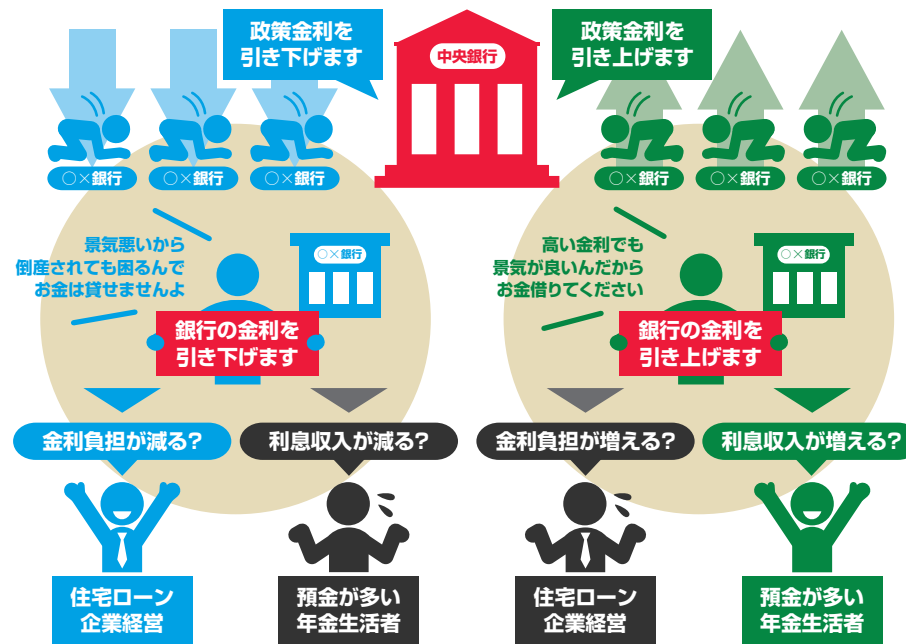
金利と一言と言っても、預貯金の金利や、住宅ローンの金利、銀行がお互いにお金を融通しあう金利など様々です。しかし、その大本は、中央銀行が決める政策金利です。中央銀行は、景気が良ければ続くように、悪ければ早く良くなるように配慮しながら、金利水準を判断しています。

景気の過熱を予防するために、中央銀行は政策金利を引き上げます。金利が上がれば、お金を借りてまで工場を建てたり、社員を採用したりしよとしなくなり、お金を銀行に預けるようになります。

逆に、景気に陰りが見えはじめると、失業者が増えたり、モノが売れなくなったりするため、中央銀行は政策金利を引き下げます。財布のヒモは相変わらず締まっていますが、あまりに金利が低くなれば、利息は雀の涙ほどしか受け取れません。すると、お金をたくさん持っている人は、利息より有利になる株式などの金融商品にお金を移そうとします。

よく、景気が悪いのに株式市場が上昇することがあります。景気が悪く、金利がかなり低い水準になると、金融機関は積極的に株式でお金を運用するからです。銀行は企業や個人にお金を貸したときの利息を主な収入源としていますが、景気が悪くなると全般的にお金を借りなくなるだけでなく、貸す側の銀行も倒産や焦げ付きを恐れてお金を貸さないようになります。

また、金利が低いときに住宅ローンを組むのは有利ですが、景気が悪け



れば、個人はマンションや住宅を買うのをためらうこともあり、銀行はお金を貸すところが少なくなります。そのため、余ったお金を株式などで運用して収入を増やす必要に迫られるわけです。

▶▶すべての金利の基準となるのが「政策金利」

このように、金利と景気には密接な関係があります。ただし、銀行それぞれが金利を完全に自由な形で決めているわけではありません。銀行は、銀行同士でお金を1日に限って融通しあっていますが、中央銀行が決める「政策金利」を基に、その金利を決めています。

中央銀行は、適当に金利を決めているわけではなく、経済の状況を表す様々なデータや、ビジネスマンやタクシーの運転手、店主や経営者にもヒアリングして景気の状態を把握し、適切な金利水準を判断します。したがって、6%だった金利を突然、1%に下げたりせず、**引き上げるときも引き下げるときも、経済に混乱が起きないように段階的に行うのが常**です。

第4章

「経済と金利と為替」の関係を理解しよう

004

世界の経済と金融市場に
絶大な影響力を持つFRB

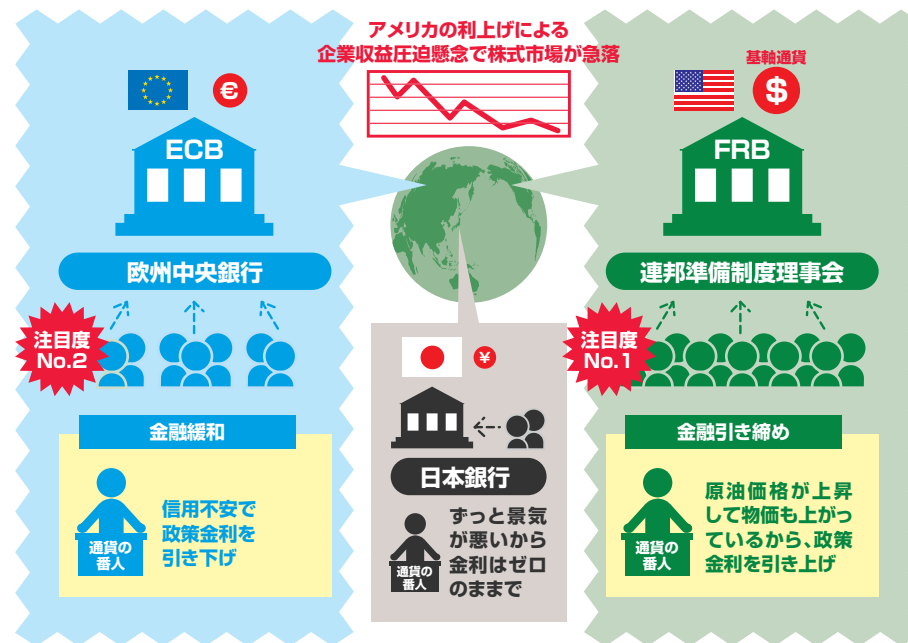
世界各国には、それぞれ中央銀行があります。中でも、世界の経済や金融市場の関係者は常に、アメリカやユーロ圏の中央銀行トップの発言に注目しています。通貨の流通量が多い二大中央銀行の政策が、世界経済の動向を押し量る上で、最も重要だからです。

政策金利の引き上げを「金融引き締め」、引き下げを「金融緩和」といいます。日本銀行は日本の景気が一向に回復しないため、超低金利、もしくはゼロ金利＝金融緩和の状態を長らく続けています。

「超低金利で、しかも膨大な借金を抱える日本の円がなぜ買われる＝円高になるの？」と疑問を持たれるかもしれませんね。この点については、もう少し経済と外国為替の関係を紹介してから解説したいと思います。

▶▶世界の中央銀行の中で最も重要な役割を果たすFRB

ところで、世界各国にはそれぞれ中央銀行があり、別名「通貨の番人」といわれています。主だったところでは、日本の「日本銀行」、アメリカの「連邦準備制度理事会 (FRB)」、イギリスの「イングランド銀行 (BOE)」、ユーロ圏の「欧州中央銀行 (ECB)」、オーストラリア (豪州) の「豪州準備銀行 (RBA)」、スイスの「スイス国立銀行 (SNB)」です。最近では、成長著しい中国の「中国人民銀行」も注目されています。



これらの中で最も重要なのが、アメリカのFRBとユーロ圏のECB。特にアメリカのFRBは、世界の経済や金融市場に対して、とても大きな影響力を持っています。それも当然で、**アメリカは世界最大の経済規模を誇り、ドルが世界の「基軸通貨」として君臨している**からです。

戦前はイギリスのポンドが基軸通貨でしたが、イギリス経済が衰え、その地位を第二次世界大戦戦後にアメリカへ譲りました。アメリカは、大戦に勝利しただけでなく、本土が戦場にならなかったことも、経済が発展した理由でもあります。

中央銀行が経済や金融市場に対して影響力を持つのであれば、当然のことながら、そのトップの総裁や議長などトップの一挙手一投足に、経済や金融の関係者は常に注目します。そして何らかの発言をするたびに、外国為替市場や株式市場、原油、金（ゴールド）などの商品（コモディティ）市場が大きく反応します。市場関係者は、総裁や議長の定例会見後に、発言内容を詳しく分析して、市場の動きを予測することに役立てています。

第4章

「経済と金利と為替」の関係を理解しよう

005

「金利の動き」を理解するには
「国債の値段」に注目しよう

政策金利のほかにも金利が動く理由があります。それを理解するためには国債の値段に注目する必要があります。普段、馴染みのない国債の値段と金利の関係は、金融・経済と外国為替相場の関係を知る上で、とても大切ですが、ちょっと難しい項目でもあります。

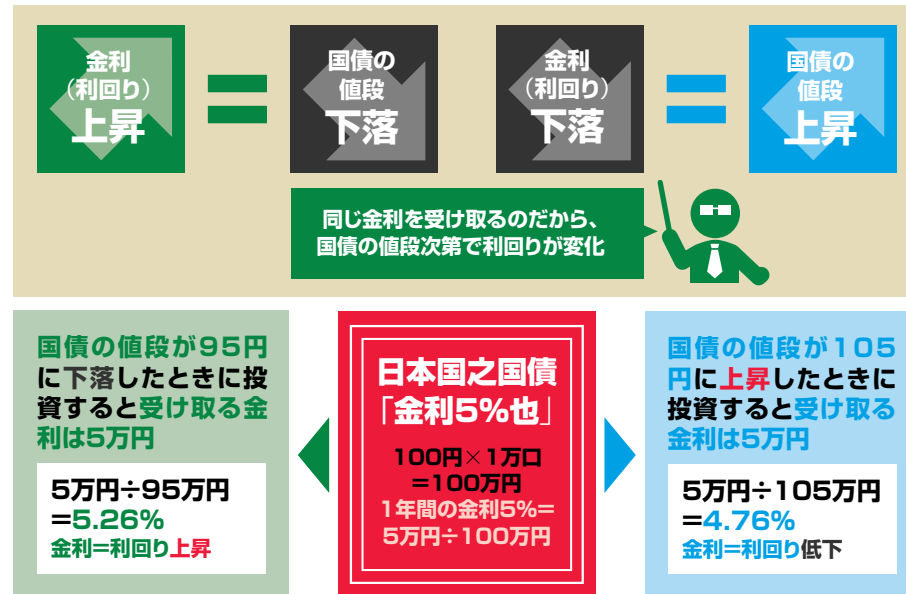
外国為替相場の動きを理解するには、「金利」がどのように動くかに注目することが重要です。政策金利は中央銀行が会議を開いて決めるため、毎日動くわけではありません。ところが、毎日動く金利もあります。それは、国債の金利（利回り）です。

「国債」というと、最近の日本では悪いイメージしかありません。しかし、「国債を多く発行できる」ということは、それだけ「国の信用度が高い」という考え方もできます。そして、日々、国債の値段は動きます。

▶▶ 国債の値段が上がれば、金利は下がる

国債を買うと金利を受け取ることができます。銀行の定期預金と似ていますが、「ペイオフ」という制度が作られて、銀行が倒産（破綻）すれば、最大で1,000万円までしか保証されません。しかし、国債は国が発行するものですから、銀行よりも信用力が高いわけです。個人にだけ販売する個人向け国債が登場してからは、より身近な存在になっています。

▶「金利の動き」と「国債の値段」の関係



一般的な国債は、外国為替や株式のように毎日売買されています。国債の値段が上がれば金利（利回り）は下がり、値段が下がれば金利（利回り）は上昇します。ちょっと難しくそうですね。具体的に解説しましょう。

たとえば、5%の金利が付く国債を100円で1万口、つまり100万円分買ったとします。国債を最初に発行するときの金利を表面利率といいます。

この場合、1年間で受け取ることができる金利は税込で5万円。国債の値段が105円になっても5万円（5%）の金利を受け取れます。ところが、105万円になってから投資すると、利回りはおよそ4.76%（5万円 ÷ 105万円）に下がります。しかも、満期まで持っても100万円でしか戻ってこないため、105万円のときに売ったほうが有利になります。

一方、国債の値段が95円になっても利息は5%ですが、利回りはおよそ5.26%（5万円 ÷ 95万円）になり、金利が魅力的になるばかりか償還まで持てば100万円で戻ってきますから、売るよりも持ち続けるほうが有利ですね。こうして国債の値段が動くことで、金利が変化するわけです。

第4章

「経済と金利と為替」の関係を理解しよう

006

政策金利の変更を
金融機関が「催促」する

国債の値段を動かす、つまり金利が動く原動力となるのが、中央銀行と金融機関＝銀行です。単純な図式では、中央銀行が主導権を握っていますが、ときに金融機関が金利の変化を先取りする場合があります。ここでは金融機関を軸に、次項では中央銀行を軸に解説していきましょう。

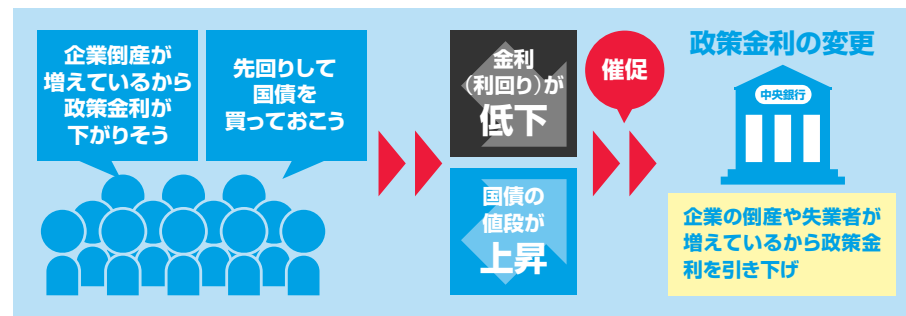
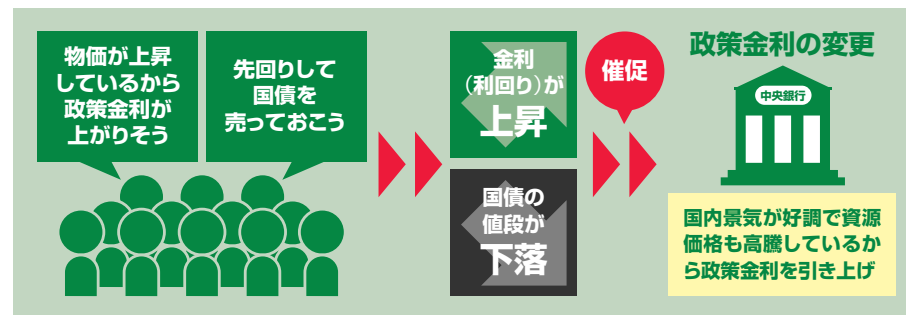
表面的な利率が同じでも、国債の値段が変化することで、金利（利回り）が上下することは、前項で解説しました。

それでは、国債の値段が動くことで、なぜ政策金利に影響をおよぼすのでしょうか。初めての方にとっては、ちょっと難しく感じるかもしれませんが、読み進めるうちにだんだん分かるようになってきますから、「へーっ」という程度で大丈夫です。

▶▶ 経済が良くなるなら金利が上がりそうと考える金融機関

国債は何年か持ち続ければ、満期を迎えて返済されます。返済されることを「償還」といいます。国債は主に銀行などの金融機関が保有し、ときに売買し、中央銀行も国債を買ったり売ったりして、経済に流れるお金の量を調節しています。その結果、**国債の値段が動き、利回りが変動**します。

この先の景気がよりいっそう良くなりそうなら、中央銀行は国債を売って経済からお金を吸収しますし、経済が足踏みしそうなら、中央銀行は国



債を買って経済にお金が行き渡るようにします。この点については、次項で詳しく解説しますね。

ところが、銀行などの金融機関も国債を自主的に売ったり買ったりしています。銀行は、多くの企業や個人と取引をしているため、景気の先行きに敏感です。たとえば、「中小企業に融資したお金の返済が最近滞りがちだ」とか、「以前に比べて、個人の住宅ローンの申し込みが増える傾向にある」と行った具合で、経済の動きを肌で感じています。

景気がちょっと悪くなりそうなら、金利が下がる、つまり、国債の値段が上がりそうと考えます。そうなれば、国債を買っておけば値上がり益が見込めます。一方、景気は良くなりそうだから、金利が上がるだろうと考えれば、持っていた国債を売り、そのお金をより有利な金融商品に投資したり、企業や個人へ融資をしたりして収益アップを図ります。

こうした金融機関の行動が、国債の値段に影響を及ぼし、ときに中央銀行に対して政策金利の変更を「催促」したりします。

第4章

「経済と金利と為替」の関係を理解しよう

007

中央銀行が国債を売買して
金利を微妙に調節する

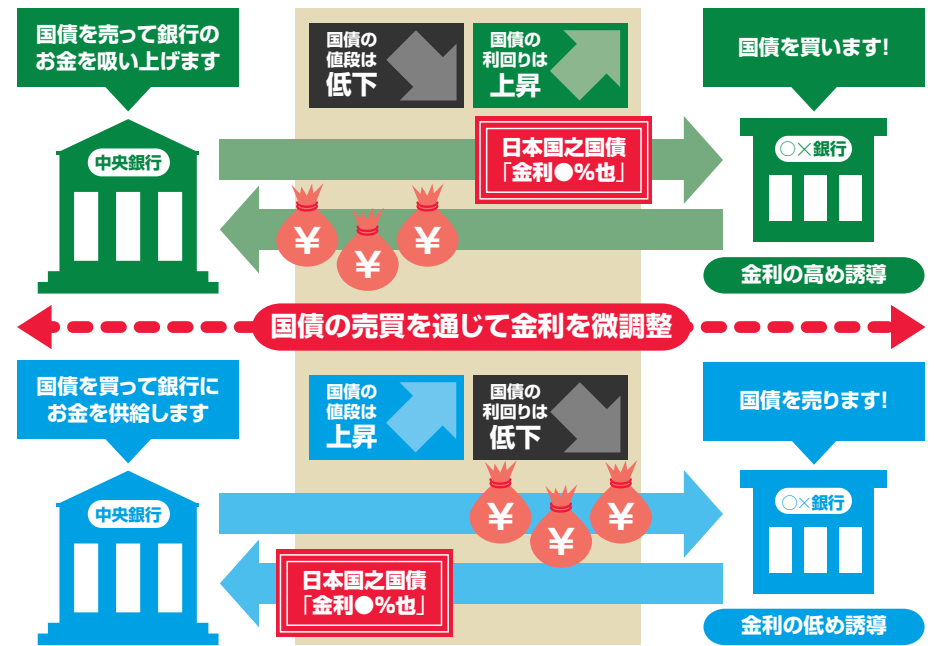
金利が動くということは、経済に行き渡るお金の量が変化することに他なりません。経済に行き渡るお金の量を通貨供給量といいます。これを中央銀行が微妙に調節することで経済・金融のバランスを取っています。そして、金利を微調整することが為替レートが動く理由の1つでもあります。

中央銀行は、政策金利を決める権限を持っていますが、同時に紙幣を発行する権限もあります。言い換えれば、金融緩和や引き締めは、政策金利を動かすことだけで行うわけではありません。

一方、国債の値段は勝手に動くわけではなく、中央銀行が決めた政策金利のあたりをうろつくようになっていきます。ただし、政策金利を動かす必要がないけれど、ちょっと金利を動かして通貨供給量を調節する必要があるときには、中央銀行は国債を買ったり、売ったりする場合があります。ちょっと分かりにくいかもしれませんね。またまた、具体的に解説しましょう。

▶▶中央銀行が国債を買えば、金利が低めになる

中央銀行が国債を買うのは、逆に見れば、金融市場にお金をばらまくことです。銀行が持っている国債を中央銀行が買えば、国債の値段は上がり、金利は低下。銀行は、国債の売却代金を中央銀行から受け取ります。これ



は、経済にお金が出回ることを意味します。

一方、中央銀行が持つ国債を銀行に売れば、国債の値段は下がり、金利は上昇。中央銀行は国債を売却した代金を銀行から受け取ります。つまり、経済に出回っていたお金が吸い上げられるわけです。

このようにして**中央銀行は、政策金利を基準に、金利を微妙に調節することで、経済に行き渡るお金の量（通貨供給量）に変化をつけています。**これを「公開市場操作」「公開市場オペ」、中央銀行が国債を買うときは「買いオペ」、国債を売るときは「売りオペ」といいます。

新聞の経済欄を見ると、「中央銀行が金利を低め誘導」とか、「高め誘導」と書かれていることがあります。金利を微調整することで、経済と通貨供給量のバランスを取っているわけです。

外国為替相場は、政策金利だけでなく、日々の金利動向にも敏感です。金利が上げ基調だったり、下げ基調だったりすることで、為替レートに影響を及ぼします。

第4章 「経済と金利と為替」の関係を理解しよう

008

政策金利がゼロになったとき 中央銀行はど

中央銀行の役割は、大きく分けて2つ。1つは金利を調節すること、もう1つは紙幣を発行することです。ここでは、紙幣を発行する役割のある中央銀行の姿勢から、外国為替相場が大きく動くケースを紹介しましょう。ある意味で、不可思議な「円高の正体」がここにあります。

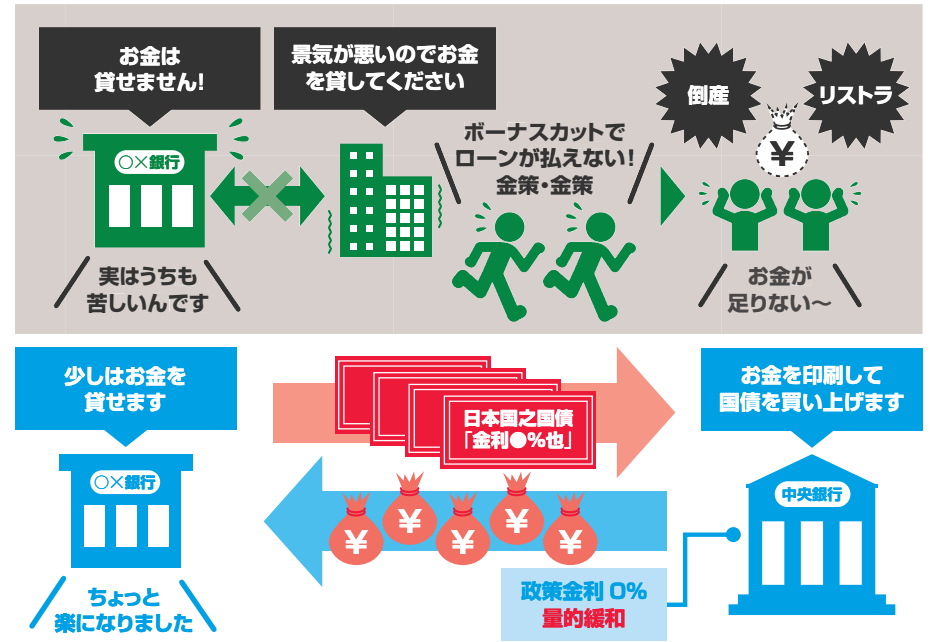
前項では、中央銀行が国債を売ったり買ったりして、金利を微妙に調節することを解説しました。ここでは、中央銀行が紙幣を印刷して発行できる役割に焦点を当てて、金融と経済のバランスを取る方法を解説します。

▶▶中央銀行がお金を必要以上にばらまいて景気を刺激

アメリカのFRBは2010～2011年にかけて、大量のアメリカ国債を購入しました。その額は1兆ドルを超えています。なぜ、中央銀行にそんなお金があるのかというと、紙幣を印刷して発行することができるからです。

つまり、**新しく発行したお金で国債を銀行などから買い上げる**わけです。すると、銀行には大量のお金流れ込みます。お金が手元にたくさんあれば、お金を企業や個人に貸しやすくなりますし、投資も活発になりますから、お金の流れを良くして景気を刺激しようとするわけです。

政策金利が限りなくゼロに近づけば、それ以上、金利を下げてても効果は見込めません。そこで、紙幣を刷って国債や株式を金融機関から買い上げ



てお金をばらまく政策を行います。こうした金融政策を「**量的緩和**」といって、中央銀行の最後の一手ともいわれています。

▶▶2つの国の金利がゼロなら相場は動かない?

それでは、通貨ペアを構成する2つの国の政策金利がともにゼロになると、相場はどうなるのでしょうか。外国為替相場は、金利差で動くことが基本です。ところが、これでは動きようがないのでは?と考えるでしょう。

政策金利が限りなくゼロに近づくということは、それだけ経済が低迷しているわけです。そうなると、両方の国が量的緩和を実施せざるを得なくなります。これでも条件は一緒ですね。ところが、お金をばらまく量が多い国の通貨が売られる、つまり下がることとなります。紙幣を刷ってお金をばらまけば、通貨の価値は下がるからです。あくまで相対的な比較ですが、2010年は日米ともに量的緩和を行いました。アメリカがはるかに多くのお金をばらまいたためにドルが売られ、円高が進行したのです。

第4章

「経済と金利と為替」の関係を理解しよう

009

景気回復の証拠が整えば
金融緩和は解除される

中央銀行は、景気が悪化する過程で政策金利を引き下げ、景気が持ち直す兆しが見えれば量的緩和を行います。一方、企業の生産や設備投資が回復し、仕事が増えて雇用が上向きはじめたことが確認できると、中央銀行は量的緩和を解除し、さらに景気が回復すれば政策金利を引き上げます。

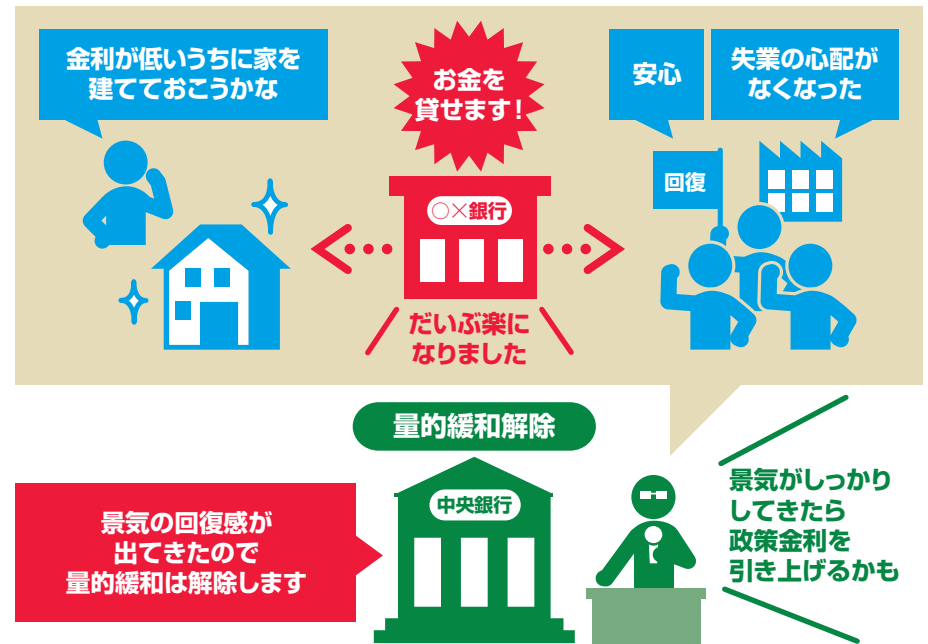
金利の引き下げから量的緩和を行った結果、景気の悪化が止まり、経済には徐々に明るさが出てきます。特に量的緩和は、最後の手段だけに、景気悪化に歯止めがかかれば、早々に解除されます。

しかし、金融機関から買い上げた国債などを一気に売ろうとすれば、国債の値段は暴落して、金利は急上昇してしまいます。そのため、病み上がりの経済に悪影響を及ぼさないように細心の注意をはらいながら、少しずつ売って、ばらまいたお金を回収します。

▶▶景気回復に対する期待感が政策金利の引き上げを連想

政策金利の引き下げや量的緩和をして最初は効果がないように見えても、徐々に求人が増えたり失業者が減ったりして、景気回復の足音が徐々に大きくなってきます。新しく家を建てる人が増えたり、労働時間が伸びたりするのも改善の兆しと考えることができます。

つまり、金融緩和をしているうちに景気が底を打ち、そして上向きはじ



めると、今度はゼロに近かった政策金利を中央銀行が引き上げるのではないかと金融市場に参加している人たちは先読みします。

たとえば、日本は相変わらず景気が低迷していても、アメリカの景気がいち早く上向きそうだと考えれば、アメリカ国債の金利が上昇しはじめて、金利差は拡大します。景気回復の証拠として失業者が減り、「ゼロ金利を解除しよう」となれば、それを先取りして円を売り、ドルを買うという動きに傾きます。これが外国為替相場を動かす原動力です。

しかし、あくまで「～しそう」であって思惑や予想です。一時的に失業者が減っただけかもしれませんし、思惑が外れるときだってあります。期待と失望を繰り返しながら景気回復への期待感が広がり、それが徐々に確実になっていきます。

そして、景気が普通の状態に戻ったと確認できる証拠が整えば、中央銀行はいよいよ政策金利を通常レベルまで引き上げることを検討し、実際に政策金利を引き上げます。これを「出口戦略」といいます。

第4章

「経済と金利と為替」の関係を理解しよう

010

金利差は単なる「差」ではなく「どちらに向かうか」が大切

外国為替は2つの国の通貨がペアとなって取引されます。つまり、一方の国の金利が動かなくても、もう一方の国の金利が動けば、金利差は拡大・縮小します。この傾向を見ることで、為替レートがどのように動くかを予測することができます。ここでは、金利差と相場を解説しましょう。

経済と金利と通貨の関係は難しそうに見えますが、経済がこの先どのようになるか、その結果、金利がどのように動くかを見れば、外国為替相場の動きを予測できるようになります。そこで、世界の経済状況を詳しくみる第5章に移る前に、金利と外国為替相場の関係を整理しておきましょう。

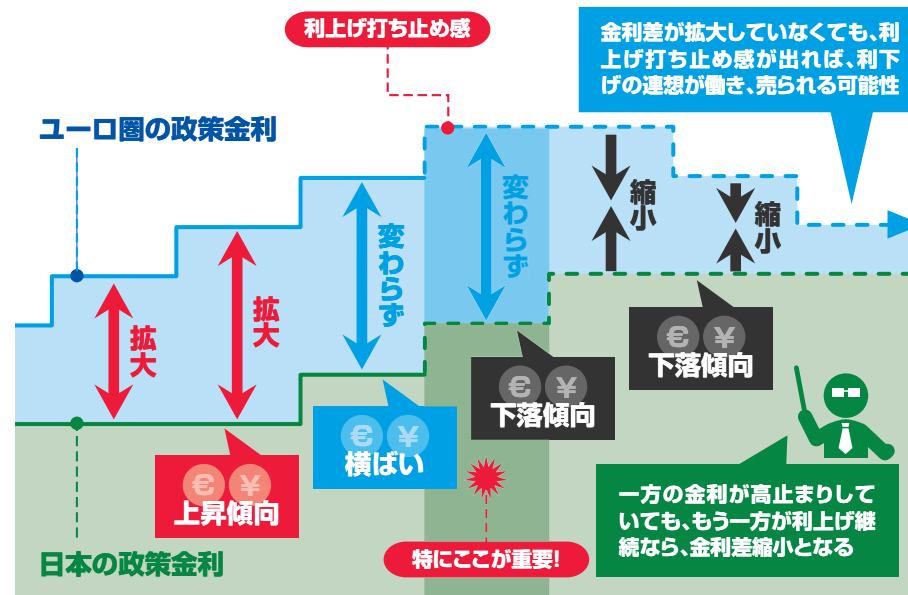
▶▶金利がこの先、どのように動くかが鍵を握る

外国為替相場は二国間の金利差によって動くといわれます。しかし、これでは少し分かりにくいですし、「金利差」という言葉だけを鵜呑みにすると、相場の動きを見誤ることになります。

金利差といっても、この先、**二国間で金利差が拡大していくのか、縮小していくのか、それとも変わらないのかという点に着目**しなければなりません。この点は非常に大事で、一方の国の政策金利が変わらなくても、もう一方の国の政策金利が上昇すれば、金利差は拡大します。

たとえば、日本銀行が政策金利をゼロにしているときに、経済が好調な

▶たとえば、この状況でユーロ／円の相場は…



オーストラリアが金利を引き上げそうなら、金利差は拡大し、円を売って豪ドルを買う方向に相場は動きます。

ところが、日本銀行が政策金利を1%から0.5%に引き下げようとするとき、FRBが6%から5.5%に政策金利を引き下げようとしていたとします。この場合、両方の中央銀行とも政策金利を引き下げるわけですが、アメリカのほうが引き下げる余地が大きく、日本は引き下げる余地がほとんどありません。そのため、金利差はこの先、縮小すると考えられます。

このように、**金利差といっても、単なる「差」だけでなく、政策金利がどちらに向いていこうとしているのかに注目することが大切**なのです。ただし、政策金利はそうたびたび変更することはありません。引き上げや引き下げたことが、経済にどのように影響しているかを見極める必要があるからです。しかし、経済の細かい状況は日々変化します。ちょっとでも良くなる兆しがあれば、国債の値段は下がり、金利は上昇します。こういうことを繰り返しながら、市場参加者は政策金利の変更を催促するわけです。

・コラム——ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール



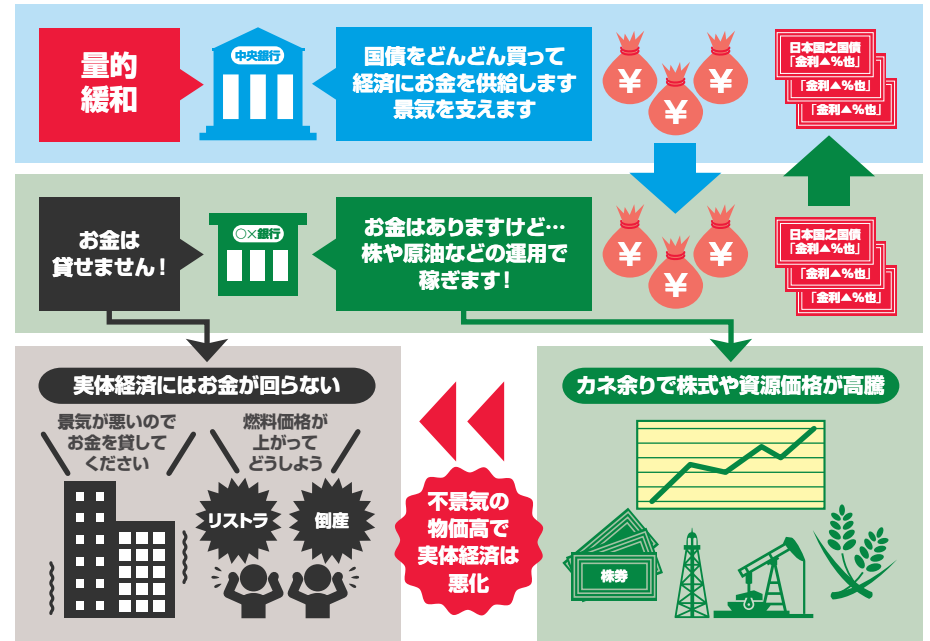
量的緩和は諸刃の剣。 不景気なのに物価が上昇する

2010～2011年に原油相場が再び高騰。この背景には、新興国の急成長と各国の中央銀行が行った量的緩和による世界的なカネ余りがあります。資源価格が上昇すれば、物価高は避けられません。景気悪化に歯止めをかけるための量的緩和が、逆に景気の足を引っ張る危険性ははらんでいます。

2008年9月に発生したリーマン・ショックで、世界経済は奈落の底に突き落とされました。高い金利を維持していたアメリカやユーロ圏、イギリスなどが矢継ぎ早に政策金利を引き下げ、景気悪化に歯止めをかけようとなりました。しかし、金利を引き下げても景気は低迷したまま。そこでアメリカやイギリスの中央銀行は、量的緩和に踏み切りました。

量的緩和をすることで、銀行には大量のお金が流れ込みます。しかし、景気が一向に回復しない状況では、中央銀行から供給されたお金が企業などの融資にはあまり回りません。焦げ付きのリスクはあくまで銀行が負うことになるからです。そのため、**銀行などの金融機関は株式や原油、金の市場で資金を運用しようとするため、不況下の株高や原油高が起きる**わけです。これを「**過剰流動性相場**」といいます。

ちなみに、量的緩和は景気を下支えする効果はあっても、景気を浮揚させる効果はあまりないと言われています。それでも市場参加者が量的緩和を望むのは、株式や原油など市場が活況になる可能性があるからです。



原油価格は21世紀に入って高騰していますが、これは中国やインド、ブラジルなどの新興国が、エネルギー資源を必要としているからです。なにせ、この3つの国で20億人をはるかに超える人口を抱えています。その国々が急成長すれば、原油価格の高騰も、ある意味では仕方ありません。

ところが、ことはそれだけではないのです。発展途上の国が成長するのは1年や2年の間ではありません。最低でも10年単位です。そうなれば、この先も原油価格は上がるだろうと考える投資家が多く、こうした人たちは量的緩和によってお金がだぶつき運用先に困っているため、より多くの利益をもたらそう市場にお金を振り向けます。その結果、新興国が必要とする以上に資源価格が高騰し、世界各国で物価が上昇してしまいます。

好景気の状態であれば仕方ありませんが、不景気の状態では物価が上がれば、消費者はモノを買うことを控えます。そうなると、量的緩和をしたり、公共投資をしたりしても、景気は上向かないケースもでてきます。量的緩和が「諸刃の剣」といわれる理由です。

・コラム——ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール



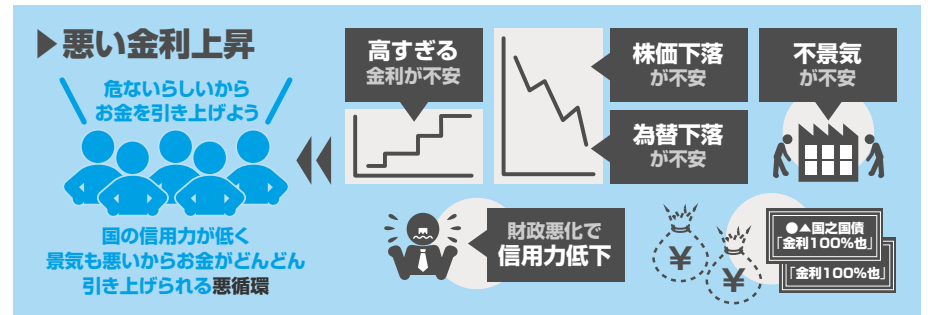
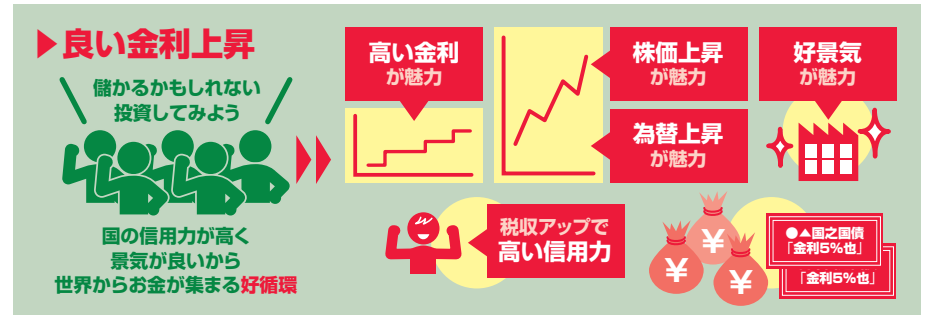
良い金利上昇と悪い金利上昇 これってどういうこと？

外国為替取引を通じて世界の経済と金融を学ぶとき、切っても切れないのが金利の話。最初は、高い金利の通貨が人気になると覚えます。しかし、金利が上がる理由を理解しておかないと大変なことになります。良い金利上昇と悪い金利上昇があることを理解しておくに役立ちます。

一般的に、経済が好調な国の金利は上昇する傾向にあります。外国からの輸入が増えるだけでなく、外国企業がその国に事務所を作ったり、工場を建てたりすることもあります。また、金利が高いことに魅力を感じて、金融面での投資も活発になります。こうして、その国の通貨に人気が集まり為替レートも上昇します。

ところが、経済が好調だといっても、行き過ぎれば弊害をもたらします。特に、不動産や株式市場が過熱し、転売目的の売買が急増すると、中央銀行は政策金利を引き上げ、経済の行き過ぎを押さえようとします。**経済がほど良く成長しているときは良い金利上昇でも、それが過熱すれば、悪い金利上昇に性格が変質**してしまいます。

また、景気が良ければ物価は上がりますが、これは裏を返せば、その国の通貨の価値が下がることを意味します。そのため、金利の高い国の為替レートはいずれ下がるようになります。高い金利が魅力でも、為替レートが下がれば、外貨預金などの投資を見送るだけでなく、これまで投資して



いた人たちはお金を引き上げようとして、ますます為替レートが下がることになります。何事も、ほどほどが好ましいわけです。

信用がなくなると金利が上昇する

もう1つの**悪い金利上昇は、その国の通貨に信頼が置けない**ときです。たとえば、誰かにお金を貸すとき、相手がしょっちゅう踏み倒していれば、高い金利をもらえるように交渉するか、貸さないか、でしょう。

通貨も同じで、国は国債という形で国民や外国から借金をしますが、それがもしかすると返済（償還）されないかもしれないと思えば、高い金利を要求します。借金するだけの裏付けがなければ、なおのことです。場合によっては、高い金利を提示されても投資しないかもしれません。

最近では、ギリシャが国債で借りたお金を返せないかもしれないと不安視されました。借りたお金を返すために、また国債を発行しようとするれば信用は地に落ち、金利はさらに高くなります。金利上昇も善し悪しです。

・コラム—— ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール



国の借金が多いだけで 金利は上がらない

ニュースや新聞紙上では、日本の国と地方自治体の借金が1,000兆円に迫り、増税や年金の減額などで負担を減らすように騒いでいます。日本もギリシャのようになるのでしょうか。今のところ、答えはノーです。この仕組みは難しそうに見えますが、国を家族に見立てれば、とても簡単です。

最近では、世界各国で財政難が深刻になり、政府の予算は切りつめられています。しかし、借金が多いという理由だけで金利は上がりません。

たとえば、1億円の借金をしようとするとき、1億円以上の価値のある不動産や、それ以外に預貯金が1億円もあれば、お金を借りることはできます。銀行などの貸し手は、取りっぱぐれがないように貸す金額と同じ価値の担保を取るからです。したがって、貸し手は焦げ付く心配がないため、金利を高くする必要はないのです。

しかし、何も持っていない人がどんなに高い金利を約束してお金を借りようとしても、貸してもらえません。そもそも、高い金利を約束しても、それを払って、さらに元本も返済してくれる信用や見込みがないからです。

▶▶ 日本は世界一の借金大国でも、資産は世界で指折りの国

それでは、日本は世界一の借金大国なのに、どうして金利が低いのでしょうか。確かに、国や地方自治体の借金は1,000兆円というとても



金額に迫っていますが、その一方で国民は1,400兆円ものお金を持っていますし、国も道路や橋をはじめ、海外にもたくさんの資産を持っています。

国というとなんか難しく聞こえますが、1つの家族に見立てればどうでしょうか。事業を営んでいるお父さんは2億円の借り入れがあり、それを返済するために四苦八苦しています。ところが、賢明な奥さんは、ヘソクリと親からの相続で2億円以上の資産を持ち、息子はこれまでFX投資で1億円を稼ぎ出し、すべて貯金にしています。お父さんの負債だけをみれば、返済は苦しそうですが、家族全体で見れば、1億円以上のプラス。お父さんの借金は、神経質になるほどの額ではありません。

このように**国の財政もバランスが大事**ですし、しかも日本は輸出という形で海外からお金を稼いでいます。国を1つの家族と見れば、ちゃんと稼いでくれる企業があるうちは、金利は上がらないのです。ただし、最近では輸出企業が海外へと移り、貿易は赤字傾向で、国の負債は国民の資産に近づきつつあるため、雲行きが怪しくなっています。

第5章

「経済の動きを 具体的に知る方法」を 理解しよう

- 001 経済の動きを細かに見ると景気と金利の先行きが分かる .. 58
- 002 世界の経済を引っ張るアメリカの経済指標が最重要 59
- 003 「雇用統計」は景気の善し悪しを映す鏡 60
- 004 インフレの傾向を見るのに最適な「消費者物価指数」 61
- 005 経営者の肌感覚が示す「ISM製造業景況指数」 62
- 006 景気の動向に敏感に反応する「新規住宅着工件数」 63
- 007 それぞれの国の経済指標も外国為替相場に大きく影響 64
- 008 経済指標を参考に政策金利を決定する中央銀行 65
- 009 国の経済全体の動きを示す指標も非常に重要 66
- 010 外国為替相場と密接な関係にある「貿易収支」 67
- 011 経済指標が良い結果でも事前予想より低ければ失望 68
- 012 事前の期待が大きければ相場はそれを先取りする 69

コラム ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール
景気が後退しているのに物価が下がらない厄介な経済 ----- 70

第5章

「経済の動きを具体的に知る方法」を理解しよう

001

経済の動きを細かに見ると
景気と金利の先行きが分かる

これまで、経済の大局的な動きを知るために金利の動きに着目してきました。とはいえ、金利が動くには、何らかのきっかけが必要です。第5章では、その「きっかけ」にあたる経済のデータと、その見方や読み方、外国為替相場に対する影響などについて解説していきます。

金利が動くきっかけは何だったのでしょうか？ そう、景気の善し悪しです。それでは、景気の善し悪しをどう判断すれば良いのでしょうか？

景気と一口でいっても、立場によって異なります。たとえば、経営者や自営業者とサラリーマンとでは、景気に対する視点が異なります。また、消費者や生産者という立場でも、景気への認識が違うケースがあります。

たとえば、経営者の立場からすると、自分の会社の業績や業界の先行きが悪かったり、良くなりそうだったりすれば、工場を建てたり、設備を増強したりして、生産を増やそうとします。さらに良くなりそうなら、従業員や新卒社員の採用を増やそうとします。一方、サラリーマンにとって、自分が勤めている会社の業績が上がれば、給料やボーナスが増えることへの期待が膨らみます。

▶▶ 景気の先行きを感じ取るタイミングは立場によって異なる

たった、これだけのことで、多くのことを知ることができます。たと



えば、企業の業績が上がらなければ、従業員の収入が先に増えることはありません。つまり、サラリーマンを消費者と考えれば、企業の業績が上がれば、消費も拡大すると考えることができます。もう1つは、雇用。業績が良くなり、人手不足になったり、事業を拡大したりするときには企業は雇用を増やします。言い換えれば、企業の業績が拡大してから雇用が増え、そして消費が拡大するという順序です。

このように、景気の善し悪しを判断するデータには時間的なズレがあります。それでは、これを外国為替相場にどう活用すれば良いのでしょうか。

「企業の業績が最近良くなっている▶雇用が拡大しそう▶消費も盛り上がりそう」だから、「景気は良くなり、いずれ金利が上がりそう」という流れです。そうして、その国の通貨も買われることになります。

こうしたメカニズムの中で、企業の業績や雇用、消費動向などのデータを見ることがとても重要です。これらのデータは統計や指標などといわれ、毎月や3カ月に1回、政府や民間の調査機関が発表します。

第5章

「経済の動きを具体的に知る方法」を理解しよう

002

世界の経済を引っ張る
アメリカの経済指標が最重要

経済の善し悪しを判断するための経済指標は、国ごとに数多くあります。しかし、そのすべてをチェックして判断することは専門家でもないかぎり簡単なことではありません。そこで、世界の経済に大きな影響を及ぼすアメリカの経済指標から、世界景気の先行きをひも解こうというわけです。

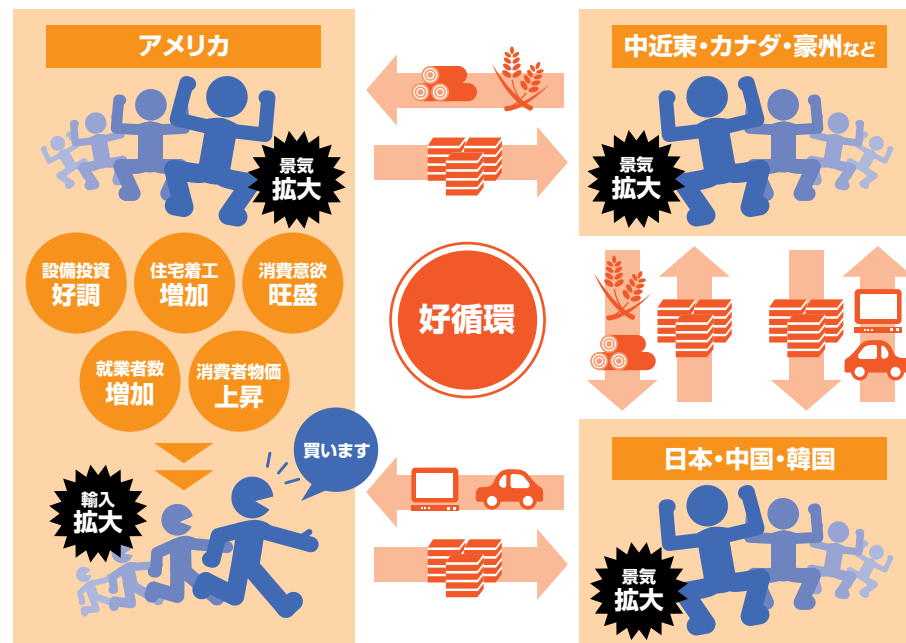
アメリカは世界最大の経済規模を誇ります。つまり、アメリカの経済がこの先良くなりそうなら、世界経済も全般的に良くなります。

特にアメリカは世界最大級の輸入国、つまり消費国です。そのため、アメリカの景気が良くなれば、アメリカに輸出している国の景気も上向き、雇用や消費も盛り上がります。そういう意味で、アメリカの経済指標は注目度が一番。ここからしばらくは、この点に絞って解説しましょう。

▶▶ 世界最大の経済規模だから、外国為替相場への影響も大きい

主な分野としては、雇用者や失業者の数がどのくらい増えたか減ったかを示す**雇用統計**、スーパーや百貨店などで買い物をするときの値段＝消費者物価がどのくらい上がったか下がったかをみる**消費者物価指数**、経営者が景気の先行きをどのように感じているかを調査した**ISM製造業景況指数**と**ISM非製造業景況指数**があります。

それから、土地や住宅に関係する経済指標も重要です。住宅は、裾野が



広い産業です。たとえば、新築住宅が多く建てられれば、それに併せてテレビや家具などの住宅用品を新しく揃えます。また、建材などの木材をはじめ、アルミサッシやガラス、カーペット、電気やガス工事など広い分野の産業が関係してきます。さらに、新築住宅を建てたり買ったりしようということは、消費者は大きな買い物ができる経済的な余裕があり、銀行もお金を貸しやすい環境にあることに他なりません。

そして、土地など不動産価格が上がるということは、それだけ多くの人が家を建てたり、その準備のために土地を買おうとしていることの裏返しでもあります。一方、地価が下がることは、ローンの支払いに対して不安を抱いたり、損をしたくないと考えて家を手放そうとしている証でもあります。そうした意味で、**新規住宅着工件数**や**中古住宅販売件数**は重要です。

ところで、21世紀になってからは新興国が急成長、世界経済に対する影響力が大きくなっています。中でも中国は、日本を抜いて世界第2位の経済規模になったため、これからは中国経済の動きからも目が離せません。

第5章

「経済の動きを具体的に知る方法」を理解しよう

003

「雇用統計」は
景気の善し悪しを映す鏡

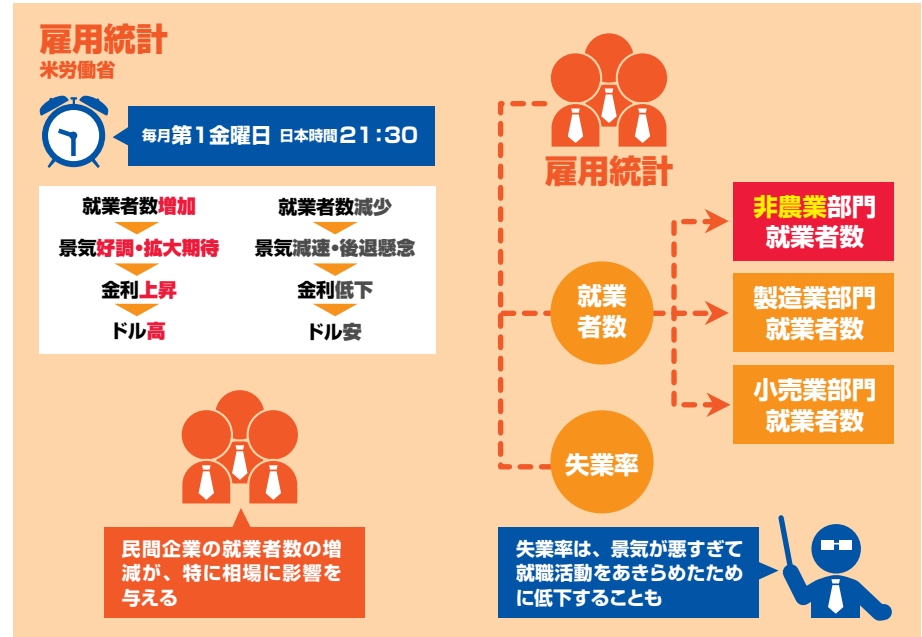
景気の善し悪しを手っ取り早く理解するには、どのくらいの人が「就業・失業」しているかを把握することが重要です。中でも、アメリカの「雇用統計」は、世界経済の動向を左右するくらい大切な経済指標で、当然、外国為替相場にも大きな影響を及ぼします。

景気の善し悪しを把握する経済指標には、さまざまなものがあります。その中でも、1カ月の間で、どのくらいの人たちが新たに職に就いたかを示す経済指標が「就業者数」、労働人口のうち職を失った人たちがどれくらいいるかを割合で示したのが「失業率」。こうした「労働」をテーマにした経済指標を「雇用統計」といいます。

▶▶ 世界経済を引っ張るアメリカの「雇用統計」が最重要

世界各国の政府機関は、**就業者数や失業率などの「雇用統計」**を発表しています。その中でも、**世界の市場関係者が最も注目するのが、アメリカの「雇用統計」**です。この数値を前月や前年同月と比べることで、景気が良くなっているのか、悪くなっているのかを判断することができます。そして、その結果次第では、ドルを中心にした外国為替相場が大きく動くことになり、株式市場にも大きな影響を及ぼします。

雇用統計は、**毎月第1金曜日の早朝（日本時間では21時30分）にアメ**



リカの労働省が発表。中でも、「**非農業部門就業者数**」に注目が集まります。これは文字通り、**農業以外の仕事をしている人たちの数が減ったのか増えたのかを示す指標**です。悪い数値が継続すれば、景気が悪化していることを示し、金利が低下する可能性が高くなります。

一方、良い結果が続けば、景気は好調と判断できるだけでなく、物価上昇などのインフレ傾向が鮮明になり、金利上昇の可能性が高くなります。労働者数が増え、失業者数が減少すれば、消費が盛り上がり、景気をけん引します。

また、不景気が続いて金利が低い水準で推移していても、就業者数がマイナスからプラスになったり、失業率が低下しはじめたりすれば、景気が底を打ち、緩やかに回復する期待が高まります。そして、実際に景気が良くなる兆候が現れれば、金利を低い水準にしておく必要がなくなります。そうすると、金利が上がりそうという判断から、ドルが買われる可能性が高まり、それを先取りした動きが活発化することになります。

第5章

「経済の動きを具体的に知る方法」を理解しよう

004

インフレの傾向を見るのに
最適な「消費者物価指数」

モノやサービスなどの値段を物価といいます。これは常に一定ではありません。物価が上がる傾向にあるということは、一般的に景気が良くなる傾向にあります。消費者がモノを買うときの物価を消費者物価、メーカーなどの生産者の物価を生産者物価といいます。

経済活動が旺盛になればなるほど、モノやサービスの値段は高くなる傾向にあります。これを逆にみれば、モノやサービスの値段、つまり「消費者物価」が上昇していれば、経済活動は活発だと判断できます。

アメリカの労働省が約5,000家庭と2,000品目以上を対象に調査し、翌月の15日前後の午前8時30分（日本時間では21時30分）に発表するのが「消費者物価指数」。「Consumer Price Index」の頭文字をとって「CPI」ともいわれ、世界各国にも同じような経済指標があります。

▶▶ 経済指標は前年と比較したり、流れで見たりするのが重要

経済指標は、1回だけで判断するよりは、前月や前年の同じ月と比べてどうだったかを見るのが大切。特に、前年同月比は重要です。たとえば、アメリカでは1年の中で消費がもっとも盛り上がるクリスマスシーズンを迎える11~12月のCPIを比較すると、変化がよく分かるでしょう。

話は横道にそれますが、クリスマスシーズンといえば、「小売売上高」

消費者物価指数(CPI)

米労働省



毎月15日頃 日本時間21:30

消費者物価上昇
景気好調・拡大期待
金利上昇
ドル高

消費者物価低下
景気減速・後退懸念
金利低下
ドル安



小売売上高

米商務省



毎月15日頃 日本時間21:30

小売売上高拡大
景気好調・拡大期待
金利上昇
ドル高

小売売上高縮小
景気減速・後退懸念
金利低下
ドル安



も重要です。どの国でも似たり寄ったりですが、その国の国内総生産（後述）の7割を占める個人消費が増えれば、景気的好調さを確認できます。この指標の管轄は商務省。発表日時は「消費者物価指数」と同じです。

「小売売上高」の難点は、短期的な景気の動きを見るのには適していないところ。そのため、長い期間で流れを見ることが大切です。

話を元に戻すと、消費者物価指数が上昇していることは、経済が活発に動いていることの裏付けになりますが、一方で原油や穀物などが高騰すると、物価が上昇してしまうことがあります。

たとえば、原油は中国などの新興国が急成長することで上昇するだけでなく、投機筋が一儲けを企んで高騰してしまうことがあります。穀物も同じですが、干ばつや洪水など天候不順で作付けや収穫ができないときも上昇して消費者物価に影響してしまいます。そのため、物価が急激に高騰したり、活発な経済以外の理由で上昇しているときには、景気の腰を折る恐れがあり、その動向にも注目する必要があります。

第5章

「経済の動きを具体的に知る方法」を理解しよう

005

経営者の肌感覚が示す 「ISM製造業景況指数」

消費者物価が動くのは、景気が本格的に良くなったり悪くなったりするときで、経済の動きを先取りするには適していません。これは「雇用統計」も同様です。それに対して、企業の動きは消費者よりも早い傾向にあります。そのため、経済の動きを先取りするには、こちらが適しています。

企業300社の購買担当役員に対するアンケート調査から景気の動きを知ることができるのが「ISM景況指数」。これは、「**製造業**」と「**非製造業**」に分けて公表されます。大雑把に言えば、製造業はモノ作りのメーカー、非製造業は主にサービス業や小売・流通業などです。

▶▶生産者の景気が良くなれば、消費者にも好影響をもたらす

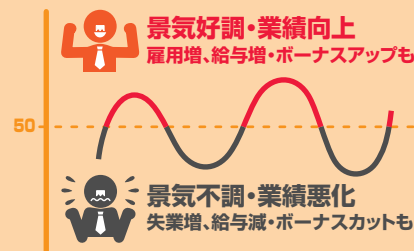
ISM製造業景況指数はアメリカの供給管理協会（ISM）が調査し、**毎月第1営業日の10時（日本時間では23時）**に公表。景気の動きを先取りする上で最も重要な指標として、金融市場の関係者が注目しています。

この指標は中央の数値が「50」。これを上回ると景気が拡大、つまり良くなっていると判断し、下回ると景気が悪くなっていると判断します。

企業の動きが活発になりつつあるということは、今後、業績の向上だけにとどまらず、給与やボーナスのアップにつながり、雇用が増えることに期待できるというわけです。

ISM製造業景況指数

米供給管理協会（ISM）



生産者物価指数（PPI）

米労働省



特に、景気が悪い状況から立ち直る過程では、消費者より企業が先にその影響が出ます。そういう意味では、景気が転換するとき、つまりは金利が下げ止まるのを察知するのに役立つことができます。

ところで、企業の側から見る経済指標で消費者物価指数と対になるのが「**生産者物価指数**」。英語では「Producer Price Index」、頭文字を取って「**PPI**」と表します。こちらも、アメリカの労働省が毎月の数値を翌月の15日頃に発表します。時間は消費者物価指数と同じです。

消費者物価指数に比べて重要度は一段下がりますが、アメリカ国内のメーカーが売る約1万品目の価格を数値としてまとめたものですから、経済を占う上では買い手（消費者）ばかりでなく、売り手（メーカー）の販売価格も重要です。ただし、消費者物価指数も同じですが、食品や資源エネルギーの価格は季節的な変動が大きいため、それを除外した「コア指数」が最も重要視されます。また、PPIが上がり、CPIが上がらなければ、その上昇分を企業が負担することになり、業績向上は見込めません。

第5章

「経済の動きを具体的に知る方法」を理解しよう

006

景気の動向に敏感に反応する
「新規住宅着工件数」

この章の冒頭で書いたように、景気に対して敏感に反応するという点では、不動産の動きに着目することが重要です。日本でも、バブル経済が華やかなりし頃には不動産価格が高騰し、逆にバブル経済がはじけた後は不動産価格が低迷したことで、景気の足を引っ張る傾向がありました。

経済の動きを住宅や建築から見るとき、いくつかのポイントがあります。1つは、「新築住宅」か「中古住宅」かです。新築住宅は「**新規住宅着工件数**」、中古住宅は「**中古住宅販売件数**」として、アメリカの商務省が発表するデータも分けられています。発表の日と時間は、雇用統計などと同様です。

中古住宅は、新築住宅に比べて価格が安いので、先に動き出します。また、新築住宅より市場の規模ははるかに大きいのが特徴です。一方、すでに書いたように、**新築住宅は産業的に裾野が広いので、経済に対する波及効果が大きいのが特徴**です。また、住宅ローンを組むケースが多いため、金利の動きにも敏感で、経済の動きと密接な関係にあります。

ただし、世界経済を奈落の底に突き落としたサブプライムローン問題は、低所得者層に返済のあてがないまま住宅ローンを組ませたことが原因で、いまだにその傷は癒えていません。アメリカで発生した住宅バブルは完全に破裂。差し押さえ件数は減少する兆しがなく、土地の価格も上向かない

新規住宅着工件数

米商務省



毎月15日頃 日本時間21:30

<p>件数増加</p> <p>景気好調・拡大期待</p> <p>金利上昇</p> <p>ドル高</p>	<p>件数減少</p> <p>景気減速・後退懸念</p> <p>金利低下</p> <p>ドル安</p>
---	---



一戸建てと集合住宅が対象。金利が上昇する傾向のときは、早く購入しようと思いが起ることも。住宅建設は、消費への波及効果が大きい

中古住宅販売件数

米商務省



毎月25日頃 日本時間23:00

<p>件数増加</p> <p>景気好調・拡大期待</p> <p>金利上昇</p> <p>ドル高</p>	<p>件数減少</p> <p>景気減速・後退懸念</p> <p>金利低下</p> <p>ドル安</p>
---	---



中古住宅販売は、新規住宅着工より立ち上がり早く、市場規模が大きい

景気の先行指標として注目!



状況です。アメリカも以前の日本と同じ道をたどりつつあります。

住宅価格をみればインフレかデフレかが一目瞭然

もう1つは、四半期に1回、全米20都市の住宅価格をまとめて公表されるのが「**S&Pケース・シラー住宅価格指数**」。サブプライムローン問題が深刻になり、リーマン・ショックで世界の経済が深い傷を負ってから、アメリカの住宅価格は低迷。これが上向かなければ、経済が復活したとはいえません。また、「**建設許可件数**」も参考になります。大規模な物件を建設するには自治体の認可が必要ですが、それを示すデータがコレ。政府や自治体が公共事業として建設するものは含まれていません。そのため申請は企業が中心ですから、件数が多いければ、企業に資金的な余裕があったり、銀行からお金を借りられる状況にあったりすることを示しています。

住宅など不動産の価格を見れば、現在の経済がインフレなのか、デフレなのかが一目瞭然。とても重要な経済指標です。

第5章

「経済の動きを具体的に知る方法」を理解しよう

007

それぞれの国の経済指標も 外国為替相場に大きく影響

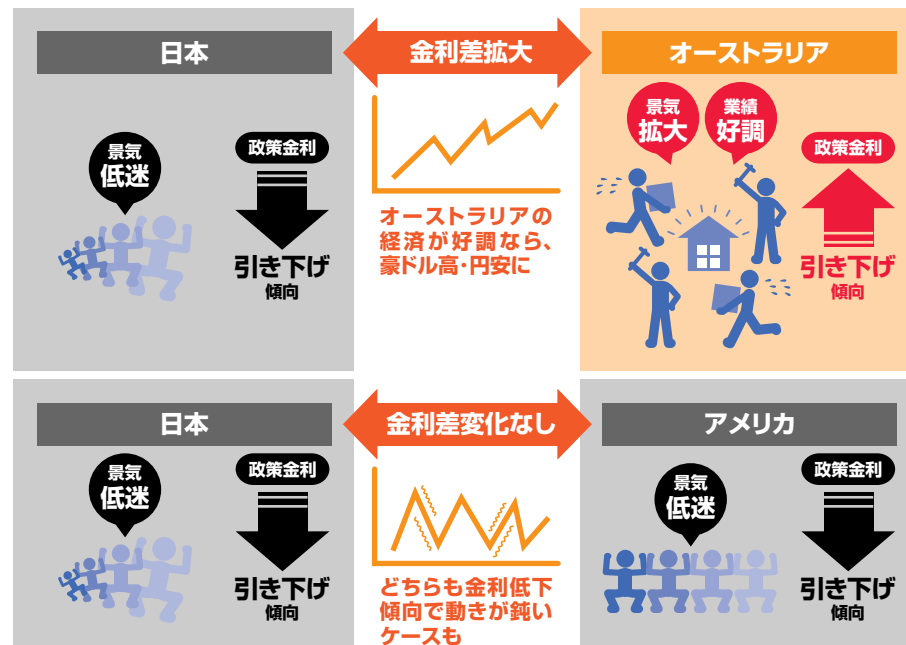
外国為替市場全体への影響力はアメリカの経済指標が大きいとしても、個別の通貨ペアでみれば、それぞれ2つの国の経済指標も重要です。特に、景気が上向いたり下向いたりしているときでも、何かのきっかけで状況が変わるケースがあります。その変化を経済指標から察知するわけです。

アメリカは世界の経済に大きな影響力を持つため、毎月や四半期に一度発表される経済指標の善し悪しによって、外国為替市場の参加者は一喜一憂します。しかし、アメリカ以外の国にも経済指標がありますから、結果次第では、その国の通貨が売られたり買われたりすることもあります。

外国為替取引は通貨ペアが基本。豪ドル/円を取引しようとするときには、オーストラリアと日本の経済の強弱を比較することが重要です。

リーマン・ショックで世界の経済は大きな傷を負い、日本は東日本大震災の影響も重なり景気回復への期待は遠のき、金利はゼロ水準が継続。ところが、鉱物資源と農産物が豊富なオーストラリアは成長著しい中国との関係が深いことと、金や原油の価格が上昇したこともあり、いち早く景気が回復軌道に乗りました。そのため、政策金利を度重ねて引き上げ、日米欧との金利差は拡大しました。

この中で注目を集めたのが、オーストラリアの雇用統計です。数値的な増減規模はアメリカやユーロ圏に比べると小さいのですが、金利を引き上



げて経済は絶好調。外国為替市場の参加者はさらなる金利上昇を期待して豪ドルを買い、ドルや円、ユーロに対して大きく買われました。

▶▶ オーストラリアの雇用情勢が勢いをなくすと豪ドルは失速

この間、日本の失業率は高止まり、アメリカの雇用も回復しそうな感じだったのが急激に悪化したりと、経済情勢は思うように上向きませんでした。そうこうしているうちに、オーストラリアの雇用も市場が予想した数値より低い結果になると、景気の腰折れを心配して豪ドルは主要通貨に対して失速。これ以上の政策金利の引き上げは難しいとの読みが働きました。

案の定、豪州準備銀行の議事録が公開されると、「当面の間、金利を引き上げる必要はない」とのコメントが記されていて、市場参加者の読みを裏付けました。雇用が伸びなければ、消費は減退。経済が緩やかに失速するとの連想から、日本の経済情勢がほとんど変わらなくても、今度は豪ドルがドルや円、ユーロに対して売られたことがありました。

第5章

「経済の動きを具体的に知る方法」を理解しよう

008

経済指標を参考に
政策金利を決定する中央銀行

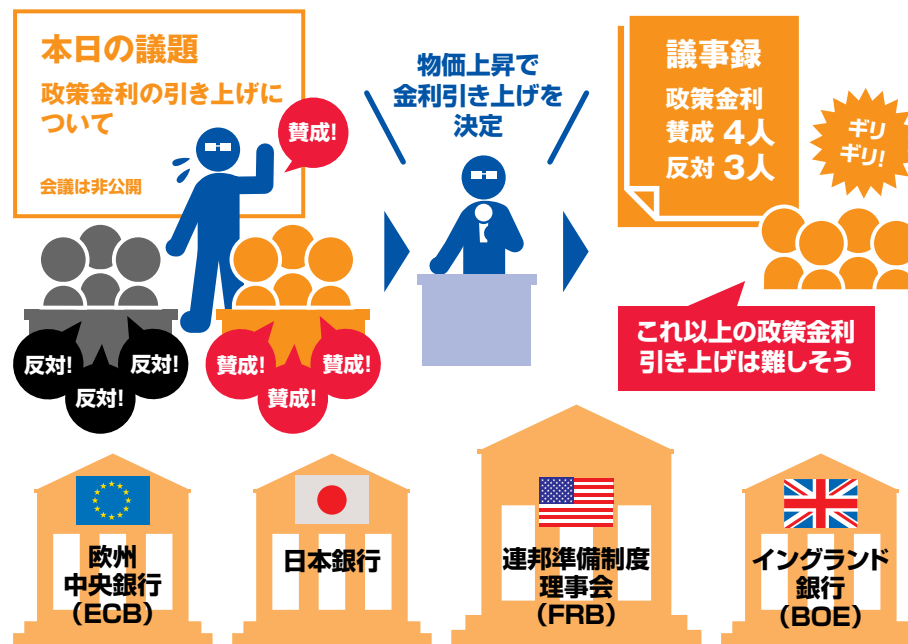
主だったアメリカの経済指標を解説したところで、金利との関係を少し解説しておきましょう。中央銀行が政策金利を決める上で、個別の経済指標を参考にしているからです。たとえば、アメリカの中央銀行である連邦準備制度理事会（FRB）は、月に1回の会議で政策金利を決定しています。

経済指標は何も、外国為替市場場に参加している人たちだけが見ているわけではありません。通貨の番人である各国の中央銀行は自分の国だけでなく、外国の経済状況の変化にも神経をとがらせています。まして、経済がグローバル化した現在は、諸外国との関係はより密接に。どこかの大きな国の景気が悪くなれば、次第に自分の国にも影響してしまいます。

そのため各国の中央銀行は、経済指標や自らが調査・分析したデータを基に景気が良くなりそうなのか、悪くなりそうなのか、政策金利を引き上げるべきか、引き下げるべきかを常に検討しています。

▶▶ 政策金利は月例の会議で決まる

ただし、中央銀行は「今日から政策金利を変更します！」と突然、宣言するわけではありません。毎月、月例の会議を開いて、何人かのメンバーと相談した上で多数決で決定します。もちろん、全会一致が好ましいのはいうまでもありません。月例の会議の名前は、中央銀行によって異なりま



す。日本なら日本銀行が開く「金融政策決定会合」、アメリカならFRBが開催する「連邦公開市場委員会（Federal Open Market Committee=FOMC）、ユーロ圏ではECBによる「ECB理事会」がそれぞれです。

外国為替相場に対する影響力という点では、アメリカ、ユーロ圏、日本の順番ですが、利上げや利下げの可能性が高いときには、注目度が変わります。そして、政策金利を変更しないときには「据え置き」といって、今後の経済状況を慎重に見極めるなどとコメントされることがあります。

こうした月例の会議の後には必ず、中央銀行のトップが会見を開いて、その概要を説明します。前月までに比べて発言内容のたった一言が変わっただけで、金融市場が大きく反応することも稀ではありません。中央銀行トップの発言は金融市場に対して、そのくらい影響力が大きいわけです。

また、会見では概要だけが公表され、**実際に会議で交わされた内容は、後に「議事録」として公開**されます。決定されたことは、実は多数決でぎりぎりだったことが分かると、また金融市場は敏感に反応したりします。

第5章

「経済の動きを具体的に知る方法」を理解しよう

009

国の経済全体の動きを示す
指標も非常に重要

「木を見て、森を見ず」という言葉があるとおりに、投資の世界では、バランスを取りながら両方を見据えることが重要。毎月発表される個別の経済指標（木）だけでは近視眼的になりがちです。あくまで経済の一側面を切り取ったデータにすぎませんから、全体（森）を見ることが大切です。

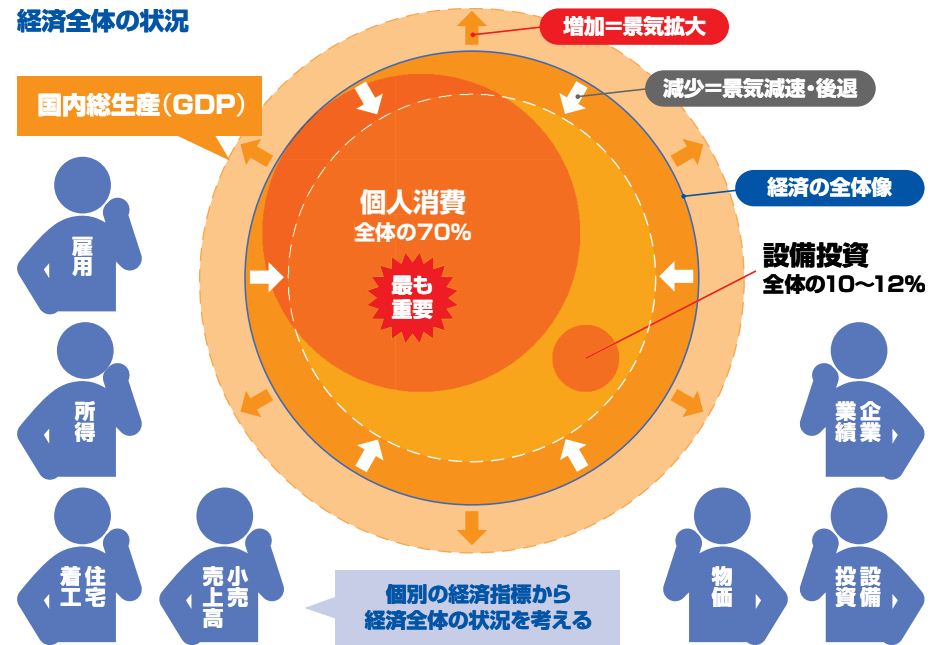
消費者や生産者の物価指数、雇用統計は、経済の一側面を切り取ったデータ、一分野に過ぎません。これはこれで、とても大切ですが、もっと大きな視点、つまり国全体の経済指標を見ることも重要です。

国全体の経済指標には、「国内総生産（GDP）」があります。これは、1年間や半年、四半期の間、国内で新たに生み出されたモノやサービスの付加価値を合計したものです。付加価値というと分かりにくいですね。簡単にいえば、モノやサービスには必ず費用（コスト）がかかっています。GDPは、それを除いた分の合計というわけです。

たとえば、日本で1億円分の自動車売れたとします。この自動車のコストは全部で3,000万円なら、付加価値分は7,000万円です。GDPはあくまで国内でのものですから、日本企業が海外で生産して販売した分は含まれません。GDPが伸びれば、その国の経済は成長していると考えます。

多くの場合、GDPは四半期、つまり3カ月ごとに発表されますが、数値は四半期分にとどまります。そのため、発表された数値を大雑把に4倍

経済全体の状況



すると年率になります。たとえば、4～6月のGDPの伸び率が0.5%の増加なら、年率換算ではざっと2%になります。

▶▶ 経済成長の原動力は個人消費と企業の設備投資

このGDPのうち、7割を占めるのが個人消費です。そして、もう1つ重要なのが企業の設備投資。この両輪が揃ってこそ、経済は成長しているといえます。しかし、最近の日本は企業の設備投資が回復したり旺盛になったりしても、個人消費が低迷しています。日本は少子・高齢化や年金受給の将来不安が大きいため、消費が盛り上がりません。長生きリスクなどといわれるように、長寿が必ずしも幸福ではない国になってしまいました。

いつまで生きるか分からないから、無駄遣いをしないで貯蓄するとなれば、経済の成長は期待できません。逆に経済が成長する期待があれば、外国の企業も日本に続々上陸し、投資も活発になり、ますます成長します。成長する国の通貨は魅力的になり、金利も健全に上昇するわけです。

第5章

「経済の動きを具体的に知る方法」を理解しよう

010

外国為替相場と
密接な関係にある「貿易収支」

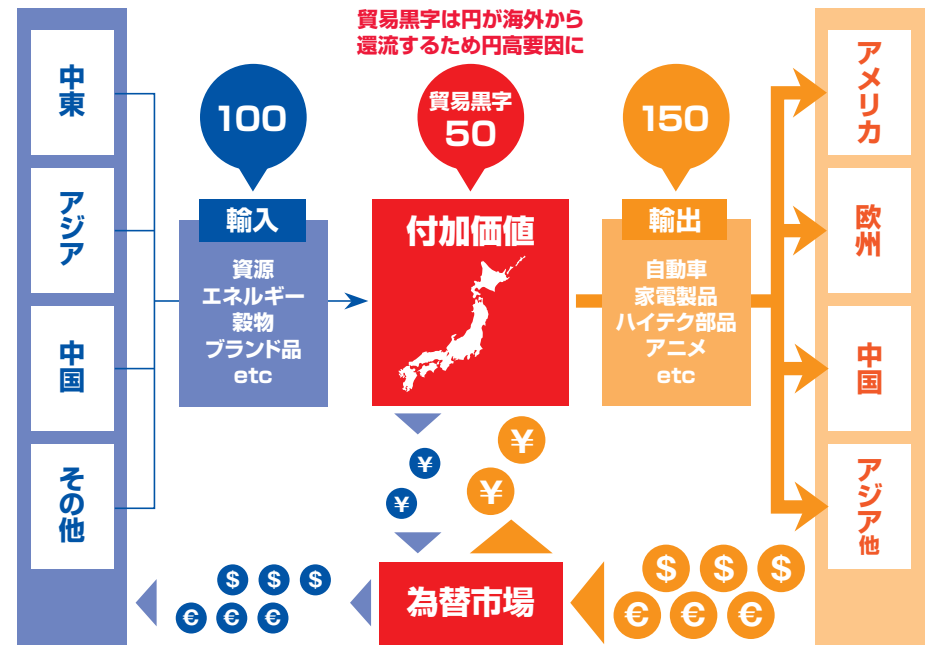
日本経済は「輸出頼み」といわれます。しかし、国内総生産に占める割合はわずか15%。にもかかわらず、輸出産業が重要なのは、少子・高齢化や将来に対する不安で消費は低調で、海外からお金を稼いでこなければならないからです。そして、この輸出が円高を引き起こす原因でもあります。

経済がグローバル化すると、貿易の重要性は高まる一方です。特に日本のような資源のない国は、鉄鉱石やレアメタル、原油を輸入して付加価値の高い製品を生み出し、海外の国々に売ることによって経済を保っています。しかも、少子・高齢化の影響で個人消費の大きな伸びは期待できません。そのため、日本では以前にも増して自動車やハイテクなど輸出産業の重要性が増しています。

ところが、一向に回復の兆しを見せない日本経済にもかかわらず、継続的に円高が進行。輸出産業に陰を落としています。輸出産業にとって円高は死活問題。すでに書いたように、1ドルが100円と70円とでは、同じ製品を海外で販売しても受け取れる金額に大きな差が出てしまいます。

一方、中国などで衣料品を生産し、日本で販売すれば円高の恩恵に預かれます。また21世紀になってからは、穀物や原油価格はうなぎ登りですが、円高のおかげで、それほど深刻な影響を受けずに済んでいます。

輸出も輸入も、どちらか一方だけが良ければ良いというものではなく、バ



ランスが肝心というわけです。

▶▶ 貿易収支が黒字なら、海外から円が戻ってくる

このように海外との貿易＝輸出と輸入の差をみるのが「貿易収支」です。貿易収支が黒字なら輸入より輸出が多く、貿易収支が赤字なら輸出より輸入が多いことになります。ここで肝心なのが、外国為替との関係です。

日本企業が海外で販売して得たドルやユーロは、いずれ円に交換されて戻ってきます。つまり、貿易収支の黒字が多ければ多いほど、円高になる可能性が高く、貿易収支が赤字であれば、近い将来、円をドルやユーロ、人民元などに替えて支払う必要があるため、円安になりやすいわけです。世の中、なかなかうまくいきません。

ところで、貿易黒字が大きいということは、それだけ外貨を稼いでいることになり、日本経済にとってはプラスです。これが、財政赤字がふくれあがっても、何とか持ちこたえているもう1つの理由でもあります。

第5章

「経済の動きを具体的に知る方法」を理解しよう

011

経済指標が良い結果でも
事前予想より低ければ失望

投資を始めたばかりの人は、「ユーロ圏の（政策）金利が上がったので、ユーロを買ったのですが、なぜか下がってしまっ。本には『金利が上がる国は為替レートもあがる』と書いてあったのに……」と、よく口にします。一連の動きには、一般常識では計れないメカニズムが潜んでいます。

外国為替取引を実際に始めると、よく目にするのが「**市場の事前予想**」「**市場コンセンサス**」といわれるものです。

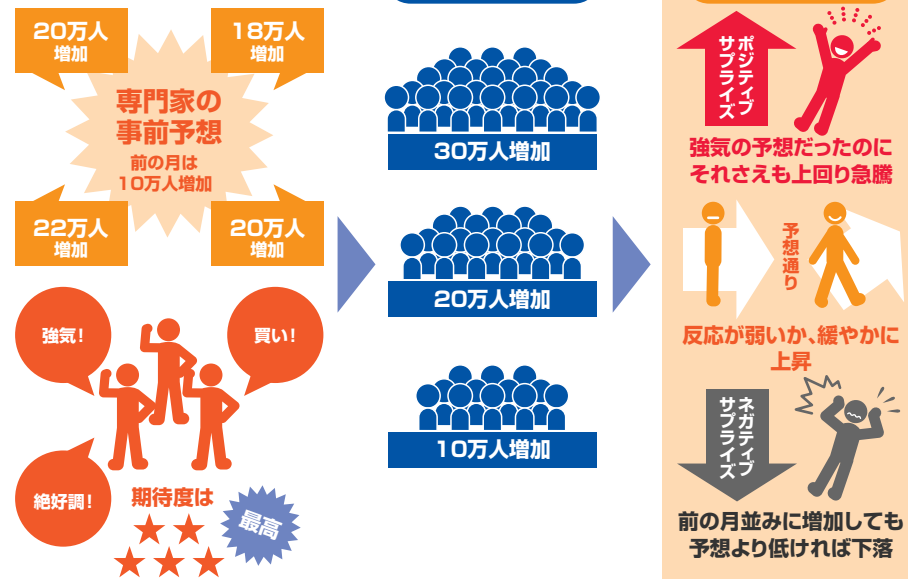
これは、経済指標が発表される前に、各国の金融機関などのアナリストやエコノミストといわれる専門家が、どの程度の結果になるのかを予想・集計したものです。多くの場合、最も多かった予想値を予想中央値、最低、最高などが金融通信社などから公表されます。

▶▶ 投資家を惑わす市場の事前予想

しかし、この「市場コンセンサス」というのがくせ者。雇用統計を例にしてみましょう。

たとえば、ある月に発表されるアメリカの就業者数の事前予想の中央値が10万人の増加で、結果が8万人の増加だったとします。こうなると「市場の事前予想」に届かなかったとして、ドルが失望売りを浴びることがあります。これを「**ネガティブ・サプライズ**」といいます。

「米雇用統計」の発表を週末に控えたある日…



つまり、景気回復の足取りがしっかりしてきたにもかかわらず、単に**専門家の予想（期待）が高すぎた**というだけで、**市場参加者が失望してしまう**ことがあります。これが、個人投資家を悩ませる「くせ者」です。

一方、これまでの就業者数は減少傾向にあったため、金融機関などの専門家も、それほど期待していない数値を予想してしましましょう。たとえば、就業者数が5万人の減少といった具合に、です。ところが、ふたを開けたら3万人の増加になっていたとすると、今度は「**(ポジティブ) サプライズ**」となり、景気が底を打ったと判断されたり、場合によっては利上げを連想できたりすると、ドルが買われることとなります。

専門家の都合の良いように外国為替相場が動いてしまっている感じがするかもしれませんね。FXを始めたときに、最初に悩むのが専門家との価値観のズレです。感覚的なものですが、専門家は、景気が良くなるときは比較的当たる確率が高い一方、悪くなる時は経済状況を過大評価する傾向にあります。そのため、売られるときには急なケースが多いわけです。

第5章

「経済の動きを具体的に知る方法」を理解しよう

012

事前の期待が大きければ
相場はそれを先取りする

この章の冒頭で「企業の業績が最近良くなっている▶雇用が拡大しそう▶消費も盛り上がりそうだから、景気は良くなり、いずれ金利が上がりそう」と書きました。投資の世界は連想ゲーム。このシナリオが描けそうなら、期待感を先取りして相場は上昇します。期待通りなら、それで終わりです。

市場の事前予想について、もう1つ。専門家の期待が大きければ、市場に参加する投資家は、それを先取りします。そして、これはある意味で、「連想ゲーム」です。

たとえば、こここのところユーロ圏の雇用が順調に増えているとしましょう。そうすると、専門家は強気の前想を出すようになります。就業者数の増加が継続していれば、今度、良い結果が出ると、その直後のECB理事会では政策金利が引き上げられるかもしれないという連想まで働きます。そうすると、ユーロは俄然、買われて上昇します。

▶▶ 投資家を惑わす市場の事前予想

結果はというと、雇用は専門家が予想した以上に良い結果となり、利上げへの期待はさらに膨らみます。ここで、外国為替相場に不慣れた投資家は、「利上げの発表を待ってユーロを買おう」となります。

そして、ECB理事会後の会見で「予想通り利上げを発表」。千載一遇の

「ECB理事会」を
2週間後に控えたある日…

0.25%
引き上げ

政策金利
に対する
専門家の
事前予想

0.25%
引き上げ

据え置き

市場は0.25%の
引き上げに傾く



チャンスと見て、強気でユーロを買います。ところが、このタイミングが相場としては天井。その後は下落の一途をたどると、投資家の頭の中は「? ? ?」だらけになります。これをどう解釈すべきか? 謎は深まるばかりです。相場の世界では、こういうケースを「織り込み済み」「材料出尽くし」といって、これで上昇が終わるわけです。というのも、さらなる好調な雇用統計と利上げの可能性を先取りして上昇していたからです。

特に初心者・入門者のときには、この感覚が分からずに四苦八苦することがありますが、これは慣れていくしかないですね。専門家の予想と市場の反応が「天の邪鬼」に見えるかもしれませんが、これが相場の世界です。

こうしたことをうまくとらえた相場格言があります。「噂で買って、事実で売る」というものです。「噂」とは「雇用統計は予想以上に良さそうで、その結果、利上げされるようだ」、事実とは「実際に利上げが発表される」こと。相場で儲けるコツは、「どれだけ早く噂を知って買える(売れる)か」「事実で確実に売れる(買い戻す)か」にかかっています。

・コラム——ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール



景気が後退しているのに 金利が上昇する厄介な経済

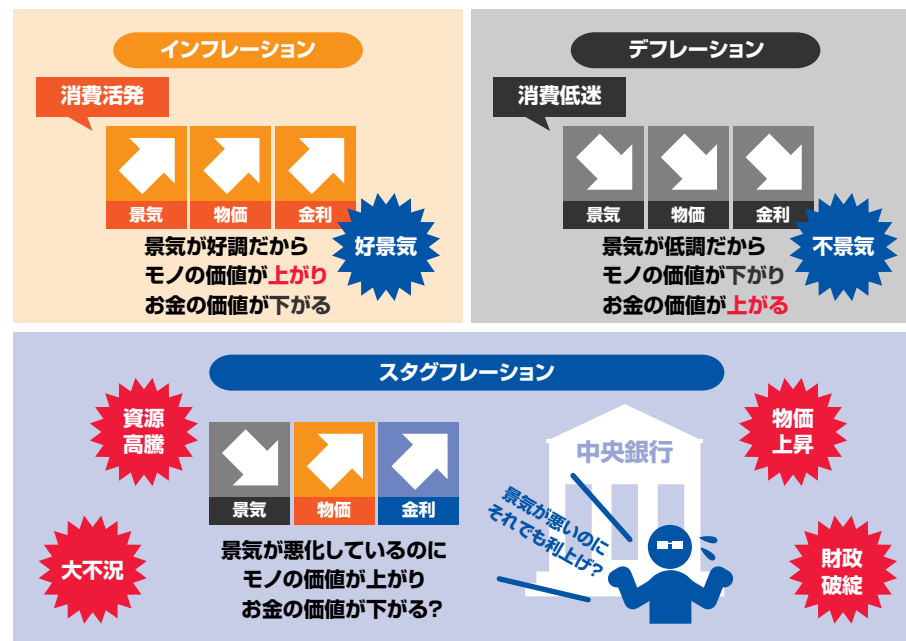
景気と金利の関係は、一般的にシンプルです。景気が好調になればなるほど金利は上昇し、景気が悪化すれば金利は低下するからです。ところが、景気が悪いにもかかわらず金利が下がらないことがあります。この経済現象はデフレとともに扱いが厄介で、中央銀行の腕の見せ所でもあります。

景気が好調だと物価と金利が上昇し、景気が減速したり、後退したりするときは物価も金利も下がるのが普通の経済です。ところが、**景気が減速や後退をしているのに、物価と金利が下がらないケース**があります。これが「スタグフレーション」です。

スタグフレーションは、英語で停滞や不況を意味する「スタグネーション」と、物価上昇を意味する「インフレーション」を合成した言葉です。

▶▶デフレよりも厳しい経済状況のスタグフレーション

景気が後退してモノの価値が下がり、お金の価値が上がるデフレは、社会全体の元気をなくしてしまいます。それでも、お金の価値が上がれば、現金をより多く持っている人は、将来的に何かを買おうという意欲が強まる可能性があります。現金をより多く持っているのはお金持ちですが、富裕層層が経済をけん引することはよくある話です。また、物価が下がれば、年金などで生活している人にとって、多少は生活が楽になるメリットもあ



ります。ところがスタグフレーションとなると、景気が悪化しているのに物価も金利も上昇してしまうわけですから、富裕者層も消費をする気になりません。年金生活者は、厳しい生活を強いられることとなります。それ以上に、普通に働く現役世代の生活を直撃すると言っても過言ではないでしょう。何せ、景気が後退しているわけですから、企業の業績は下降線をたどり、ボーナスはなくなり、場合によっては給料も激減してしまう恐れがあります。株価も下落するため、不況下の株高を期待することはできません。にもかかわらず、物価は上昇し、生活はかなり苦しくなります。

2010年の後半から、一部の専門家の間でスタグフレーションを心配されたのが米国です。FRBが紙幣を刷って国債を買い入れたために、世界的にドルが余り、それが原油や穀物市場に流れて、物価が上昇したからです。本来なら、景気が悪いから金利を低くして、量的緩和もしているのに、これでは消費が減退し、景気回復を遅らせる原因になってしまいます。

第6章

押さえておきたい 「取引の基本」

- 001 注文の出し方と決済の方法を理解しよう 72
- 002 最も重要な「指値注文」の仕組みを理解しよう 73
- 003 予想した方向と逆に動いても保険をかけておけば安心 74
- 004 チャンスを逃さず、想定外の損失も避ける方法【1】 75
- 005 チャンスを逃さず、想定外の損失も避ける方法【2】 76
- 006 取り損ないを避ける「魔法」の注文方法 77
- 007 基本的なトレードスタンスについて理解しよう 78
- 008 なぜ、トレードスタンスを守り続けたいといけないの? 79
- 009 投資家の手間を省くシステムトレード(自動売買) 80

第6章 押さえておきたい「取引の基本」

001

注文の出し方と決済の方法を
理解しよう

ちょっと早いかもしれませんが、先に注文の出し方と決済の方法を解説しておきましょう。FXの魅力や取引をするために、いろいろな角度から必要な知識を身に付けていただきますが、やってみたいと思ったら、FX会社に口座を開設して、デモトレードで慣れていくと理解が深まります。

何ごとも、興味津々のときが始め時です。そのほうが身に付きやすいし、理解も深まるからです。第6章では、注文の出し方や決済の方法を解説しましょう。すでに、FXで儲ける仕組みについては解説しましたが、一口に買いや売りといっても、注文の出し方にはいくつかの方法があります。

▶▶ 基本中の基本の注文方法は2種類

新規に買いや売りとしたいとき、真っ先にくるのが「**成行注文**」です。これは、相場の世界で基本中の基本といわれています。もう1つの基本的な注文方法が「**指値注文**」です。まず、「成行注文」から紹介しましょう。

「**成行注文**」とは、いくらでも良いから必ず買いたい、売りたい、決済したいというときに使います。少し荒っぽい感じがするかもしれませんね。

しかし、**相場の世界は買いたいとき、売りたいとき、決済したいときに、注文したとおりに売買が成立することが何よりも重要**です。売買が成立することを「**約定**」といいます。

「成行注文」か「指値注文」か 思案のしどころ

「指値注文」で 丁寧な取引を 心がけよう

成行注文

指値注文

いつも相場を見ていられるわけではない

焦らずに 指値注文をして じっくり待とう

ただし、約定を優先するからといって、取引量の少ない通貨ペアや相場の動きが荒いときなどに使うのはお薦めできません。ときに予想とかけ離れた値段で約定してしまうこともあるからです。つまり、このチャンスはどうしても逃したくないというときに「成行注文」を使うと効果的ですが、それ以外では、次の「指値注文」を中心に売買する習慣を付けてください。

▶▶ 指値注文の方法を身に付けると注文方法の幅が広がる

「この値段で買いたい、売りたい、このくらい儲かったら決済したい」と具体的な値段を決めて、あらかじめ注文を出す方法が「指値注文」です。

何しろ、ほとんどのFX投資家は日中、仕事や家事に追われていますから、相場を見続けることは難しいはずで。そこで、「指値注文」を利用すれば、その値段になったら自動的に買ったり、売ったり、決済したりしてくれるので時間的な制約を受けません。そして、これをちょっと応用すると、次に紹介する様々な投資家の注文ニーズを満たしてくれます。

第6章 押さえておきたい「取引の基本」

002

最も重要な「指値注文」の
仕組みを理解しよう

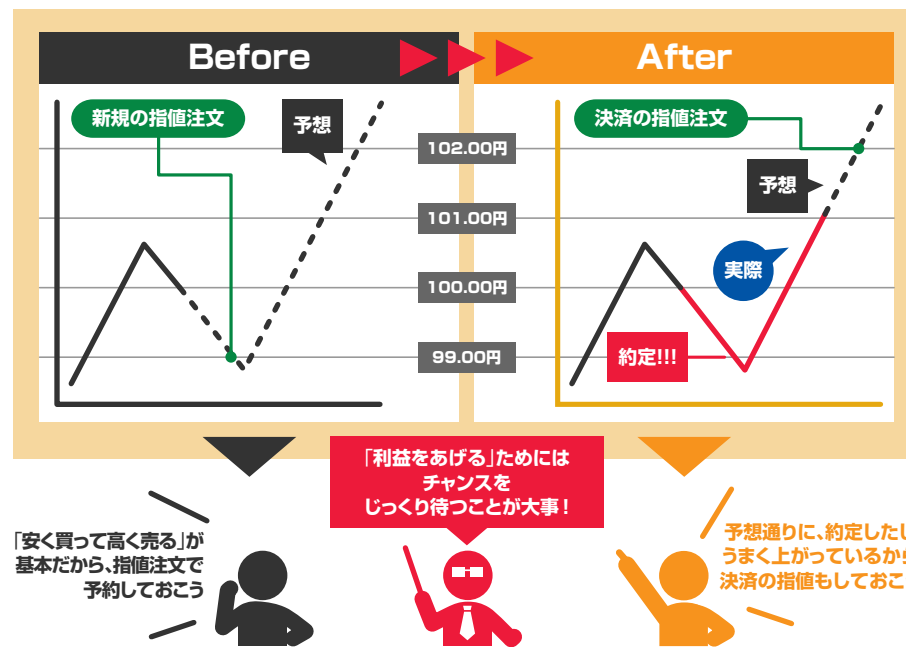
前項では、「注文方法は基本的に2つの方法があり、指値注文には様々な応用が利く」ことを紹介しました。そこで今回は、指値注文の仕組みについて具体的に理解を深めていきましょう。指値注文を応用するためにも、基本をしっかり押さえてください。

「この値段で買いたい、売りたい、このくらいの利益になったら決済したい」と具体的な値段を決めて注文を出すといっても、初めての方はピンとこないかもしれません。そこで、具体的に仕組みを解説しましょう。

▶▶ 指値注文を「予約」と考えると分かりやすい

たとえば、いまの時点でドル／円の値段が100.00円としましょう。どうも、これから上がりそうな気がするとき、少しでも安く買いたいと投資家は考えます。何でも安く買えたほうがお得感がありますから……。

通常、ドル／円が1日で5円も10円も動くことはありませんから、いまより1円安いレートなら買っても良いかなと思い、99.00円で買い注文を出したとします。何しろ、今より1.00円も安い値段ですから、「スグに約定!」というわけにはいきません。朝の出勤前に自宅のパソコンで指値注文を出しておいたり、通勤途中の電車の中で経済新聞を読んでいたら、「円安の可能性～」の見出しが飛び込んできて、早速、スマホから指値注



文を出すという具合です。

つまり、**指値注文**というのは「**注文の予約**」というわけです。あくまで「予約」ですから、99.00円にならないと約定しません。99.01円では駄目です。「予約」ができれば、相場を見続ける必要もなく、仕事や家事に集中できるもの。ただし、仕事中に為替レートが気になり、トイレに入ってケータイでのぞき見したり、我慢しきれずに成行注文に変更したりしてトレードしてしまう投資家もいるようです。

▶▶ 指値注文は「注文の期間」も決められる

指値注文は、いつまで注文を出し続けるかという期限を決めることができます。さすがに、1分単位というわけにはいきませんが、今日中とか、今週中といった感じです。×日×時までや無期限の設定ができるFX会社もあります。ただし、為替レートは刻一刻と変化するため、あまり長い期限で注文を出しておくのも考え物です。基本は1日と考えてください。

第6章 押さえておきたい「取引の基本」

003

予想した方向と逆に動いても
保険をかけておけば安心

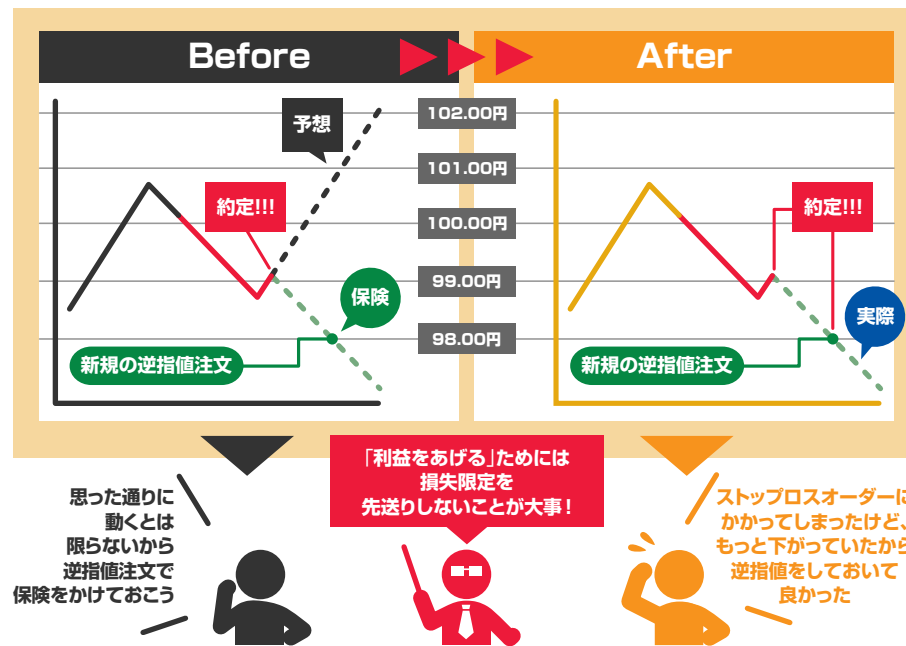
個人投資家は専業でトレードをしない限り、四六時中、相場に張り付いていることはできません。そのため、損失を限定することも忘れないようにしましょう。おかしな話に聞こえるかもしれませんが、大負けしないトレードこそ、投資家を常勝へと導いてくれるのです。

これから上がりそうなら買い、下がりそうなら売りと、成行注文や指値注文で約定して思い通りに相場が動いたら、利益を確保したいものです。ここでも指値注文が効果的です。

ちなみに、**新規で買うことを「買い建て」、売ることを「売り建て」と**いいます。**買い建てしたものを「買い建て玉」「買いポジション」、売り建てしたものを「売り建て玉」「売りポジション」と**いいます。逆に、**すでに持っている建て玉の利益を確定したり、損失を限定したりすることを「決済」と**いいます。FXは売りと買いを自由に行えるため混同しないように、「新規買い」に対して「決済売り」、「新規売り」に対して「決済買い」と対にした言葉を使います。なお、新規を「仕掛け」、決済を「手仕舞い」というときもありますので、好きな言葉を使うと良いでしょう。

▶▶ 予想した方向と逆の動きに備える

ところで、投資をすると利益をあげることばかりを考えがちですが、そ



れだけではいけません。予想した方向と逆に動いたときの保険をかけておく必要があるからです。

要するに、上昇すると思って新規買いとしたのに、何の備えもしないまま下落してしまえば、想定外の損失を被ることになります。多くの投資家は損失を確定（限定）することを精神的に受け入れられず、損切りの決断を先送りしてしまうケースがあります。こうしたことは、損失がさらに拡大する恐れがあり、あまりにも危険です。

予想した方向と逆に動いたときは、一定以上の損失を被らないように、損失を限定する注文＝ストップロスオーダーを出しておくことが大事です。これが投資家自身のお金を守ることになります。**ストップロスオーダーには、「逆指値」という注文方法**を使います。たとえば、80.00円で新規買いとしたとき、逆指値は79.00円という感じです。逆指値をしておくことで、最大の損失は1.00円に限定することができます。「負けないトレードを心がける」、これが相場に勝つ秘訣でもあるのです。

第6章

押さえておきたい「取引の基本」

004

チャンスを逃さず、想定外の
損失も避ける方法【1】

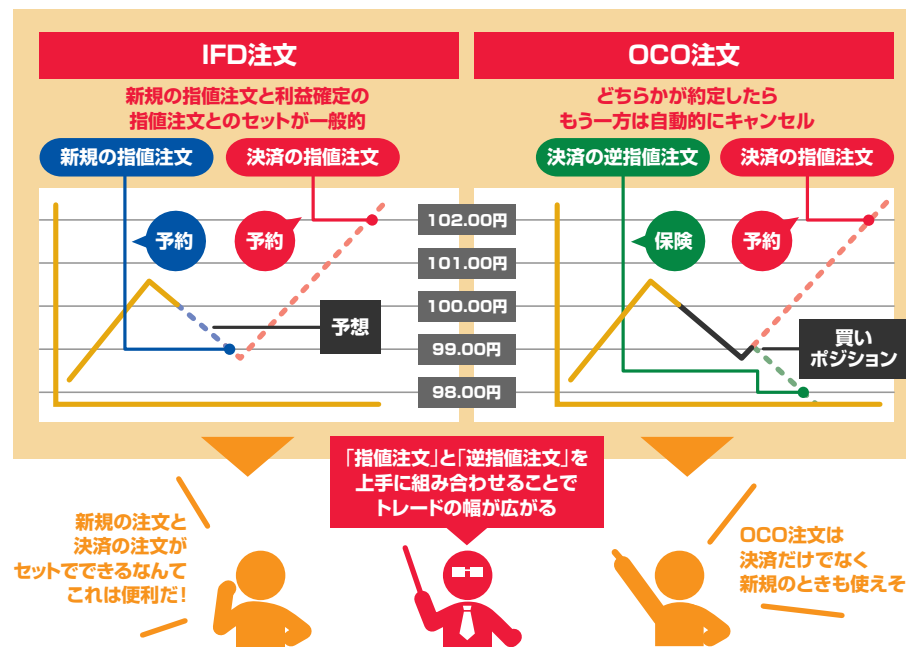
利益確定と損失限定。この2つを理解すれば、当然のことながら、両方の注文を同時に出して楽をしたいものです。できれば、「エントリーも！」と投資家の欲望は尽きません。でも、3つの注文をいろいろ組み合わせる方法があるので、この項と次の項で解説しましょう。

ここまで「成行注文」「指値注文」「逆指値注文」を解説しました。中でも、指値注文と逆指値注文を組み合わせると、チャンスを逃さず、想定外の損失を回避することができます。

ここでチャンスと一言で書いてしまいましたが、チャンスには2種類あります。新規でポジションを建てるときのチャンスと、一定の利益を確保できたときに着実に決済するチャンスです。

▶▶ 新規と利益確定の注文を同時に出して儲けの確率を上げる

たとえば、ドル／円が80.00円まで下がったら買いポジションを建て、81.00円まで上昇したら決済したいと考えたとしましょう。そういうときは、^{アイエフディー}「IFD注文」を使います。英語の「IF Done」の頭文字を取ったもので、「もし、新規の注文が約定した後に、指定の価格に達すれば決済します」という注文方法です。2つの注文を同時に出しておけば、予想通りに相場が動いてくれば、利益確定の確率は上がります。これなら、2つのチャ



ンスを逃さないようにできますね。

▶▶ どちらか一方が約定したら、もう一方をキャンセルする

次に、2つの注文を組み合わせる別の方法を紹介しましょう。新規でポジションを建てるときに、成行注文か普通の指値注文を使ったとします。

「IFD注文」の場合は、利益確定にスポットを当てた注文方法でしたが、こちらは、利益確定の指値注文と想定以上の損失を避けるための逆指値注文を同時に出す方法で、「^{オーシーオー}OCO注文」といいます。英語の「One Cancels the Other order」の頭文字を取ったもので、「**どちらか一方の注文が約定すれば、もう一方の注文をキャンセルします**」という意味です。

80.00円で新規買いとしたドル／円のポジションに対して、81.00円で利益確定の指値注文と、79.00円で損失を限定する逆指値注文を同時に出すわけですね。利益確定のチャンスを逃さず、想定外の動きに対して保険もかけることができます。指値注文と逆指値注文の応用で選択肢が増えますね。

第6章

押さえておきたい「取引の基本」

005

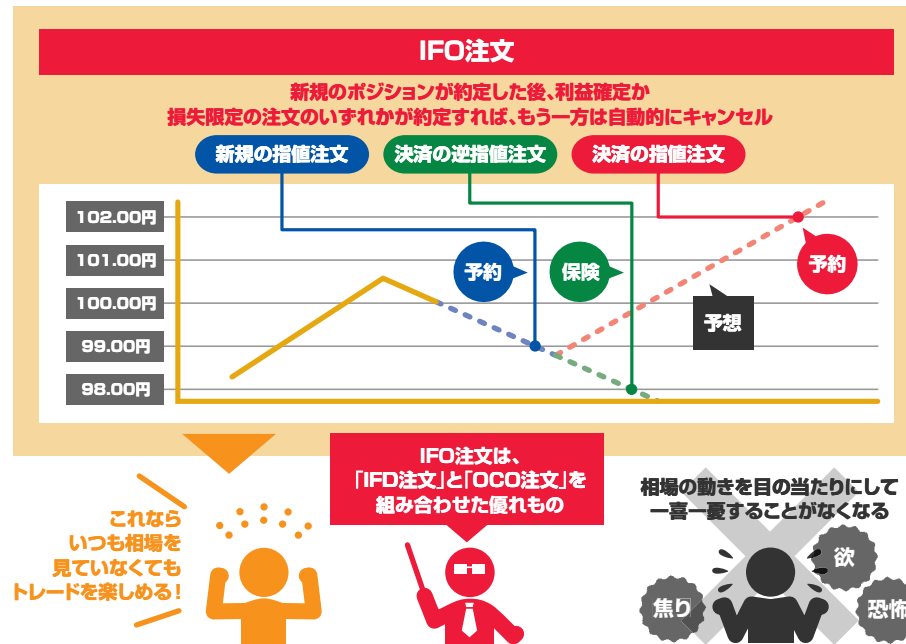
チャンスを逃さず、想定外の損失も避ける方法【2】

「相場を見ながらタイミング良く注文を出して、効率的に利益をあげたい」これが投資家の心理です。ところが、実際に利益が乗ってくると「もうちょっと利益を伸ばしたい」、損失を抱えれば「もう少し損が減ったら」と判断を先送りします。これが大敵。潔いトレードが「儲けのコツ」です。

IFD注文とOCO注文は便利な注文方法ですが、どちらにも欠点があります。IFD注文には損失を限定する注文がなく、OCO注文は新規でポジションを建てるときと、2つの決済注文がバラバラというところ。たとえば、仕事や家事でうっかり確認するのを忘れていたら、最初は思った方向に動いたのに、その後、逆の方向に動いてしまって儲けを取り逃がしてしまうばかりか、最終的に損失を抱えてしまうケースが考えられます。

▶▶ 新規建てから、利益と損失の確定までをセットで注文する

IFD注文とOCO注文をセットにしたのが「^{アイエフオー}IFO注文」。英語の「If done & One cancels the other order」の頭文字を取ったもので、「もし、新規の注文が約定した後に、指定の価格に達すれば決済します」という方法です。新規建てから始まって、利益確定と損失限定までの3つの注文（2つの指値と1つ逆指値）をあらかじめ同時に出すことができます。注文画面に切り替えると、自動的にIFO注文の画面が現れるように設定されている



FX会社もあるほどです。これには、3つの注文は常にセットで考え、取るべき利益を着実に手にし、必要以上の損失＝リスクを限定することで、健全なトレードを習慣付けてもらおうという目的があります。また、トレードに費やす時間的な面でも効率的です。

▶▶ IFO注文を習慣付けるために必要なこと

「新規建ての価格から始まって、利益確定と損失限定の値段まで、最初から予測するなんて無理な話では?」と感じるかもしれませんね。

価格の動きを予測するには、第7章のチャート分析を身に付ける必要があります。そういう意味で、チャート分析はFX投資家にとって、なくてはならないものです。もう1つ大事なことは、投資家は、相場を目の当たりにすると、「たくさん儲けたい（欲）けど、できるだけ損失は確定したくない（恐怖）」という心理に支配されます。欲と恐怖の心理に支配されないためには、IFO注文を習慣付けることが大切です。

第6章 押さえておきたい「取引の基本」

006

取り損ないを避ける「魔法」の注文方法

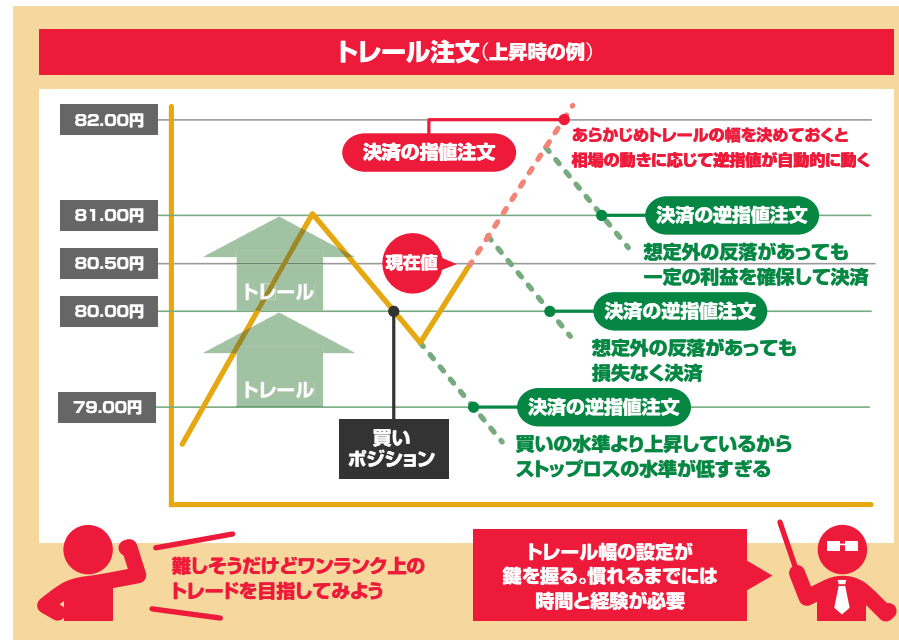
めまぐるしく変化する外国為替相場は、一方通行になることがよくあります。潔いトレードが「儲けのコツ」といっても、やはり大きなチャンスを逃したくありません。相場が一方通行になるとき、リスクを限定しながら利益をできるだけ追い求めることができる注文方法があれば便利ですね。

かなり便利な「IFO注文」を使いこなすと、新たな欲求が湧き上がってきます。たとえば、IFO注文を使って、ドル/円を80.00円で新規買い、利益確定の水準を81.00円、損失限定の水準を79.00円にしましょう。これでセット完了！ 明日の朝が楽しみです。ところが、朝起きて口座にログインしてみると「現在、あなたのポジションはありません」という表示。「儲かったかな？」と期待に胸を膨らませます。

確かに、予測どおりに80.00円で新規買いの注文は約定しています。その後も上昇していました。よく見ると、80.85円まで上昇した後に何かの原因で急落。78.85円まで下がった後に再び上昇して82.50円に到達しています。どうも、利益が確定される前に逆指値注文が執行されたようです。出勤前なのに、どっと疲れが出て意気消沈……。よくあるケースです。

▶▶トレール注文でワンランク上のトレードをマスター

「**トレール注文**」を使いこなせると、そんな悲しい目に遭うケースがか



なり減ります。「トレール」には「獲物を追う」「だらだらと後をつける」という意味があります。つまり、**トレール注文とは、相場の動きに応じて、あらかじめ決めた値幅ずつ逆指値が自動的に動く注文方法**です。そのため、相場が予測通りに動けば、必要以上に損失を限定する必要はなくなります。

具体的にいうと、80.00円で新規買いとして80.50円まで順調に上昇すれば、当初設定した79.00円の逆指値ではリスクを取りすぎていることになります。ただし、上昇と同じ幅だけ逆指値が上がるような設定だと、ちょっとした下落で逆指値注文が執行されてしまいます。そのため、相場の動きに対してトレールの幅をどの程度にするかを投資家自身が決めなければなりません。ここが腕の見せ所です。

慣れるまでには多少の時間と経験が必要ですが、興味のある方は、トレール注文の使い方に挑戦してください。トレール注文の仕組みは、FX会社ごとに工夫が施されています。FX会社のマニュアルを見たり、問い合わせをしたりして、ワンランク上のトレードスキルを身に付けましょう。

第6章

押さえておきたい「取引の基本」

007

基本的なトレードスタンスについて理解しよう

どんなに知識を身に付けても、トレードのテクニックを知らなければ、無茶なトレードをしてしまうことになります。そういう意味で、トレードスタンスの特徴を知るとはとても大切ですし、利益をあげるためにはレバレッジと投資期間の関係をしっかり理解することが必要不可欠です。

様々な注文方法を使いこなして、取引（トレード）の精度を高めることはとても重要です。しかし、あまり縦横無尽に（都合良く）外国為替市場で立ち回ろうとするのは考え物。やはり、トレードスタンスを理解し、それを忠実に守り続けることが、結果的に儲けることへの近道になります。

トレードスタンスを決めるポイントは、大きく分けて2つあります。1つは「**トレードの期間**」、もう1つは「**相場の流れに乗るか、相場の勢いを重視するか**」です。「相場の流れや勢い」については、次章で解説するとして、ここでは、「トレードの期間」に着目したスタンスについて解説していきましょう。

▶▶FXで最も一般的な「スイングトレード」

トレードスタンスを期間別にみると、**1日のうちに売買を完結するデイトレード**、**1週間程度で売買を完結するスイングトレード**があげられます。そのほか、小刻みにトレードするスキャルピングという手法もあります

▶トレードスタンス

スキャルピング		デイトレード	
トレード回数	非常に多い(数十~100回/日)	トレード回数	多い(数回/日)
目標利益	非常に小さい(数pips/回)	目標利益	小さい(十数~数十pips/回)
レバレッジ	かなり高い(20~25倍)	レバレッジ	高い(10~20倍)
保有期間	とても短い(数分~数十分)	保有期間	短い(数時間)
投資家像	専業	投資家像	専業、ベテラン
スイングトレード		中長期保有	
トレード回数	ふつう(1~数回/週)	トレード回数	とても少ない(数回/年)
目標利益	ふつう(100~200pips/回)	目標利益	とても大きい(数百pips/回)
レバレッジ	低い(3~5倍)	レバレッジ	とても低い(1~2倍)
保有期間	ふつう(数時間~数日)	保有期間	とても長い(1~数カ月)
投資家像	入門・初心者、一般	投資家像	入門・初心者、一般

トレードスタンスごとの特徴を理解し、ライフスタイルや性格に合わせて選ぶことが大事



が、かなり慣れないと難しいでしょう。スキャルピングは、高速回転のトレードで狭い値幅の利益を補うという考え方からきています。また、非常に高いレバレッジでトレードするのも特徴です。しかし、個人で取引するときの最大レバレッジが25倍まで引き下げられ、そのメリットは小さくなりました。さらに、1日に多いと数十~100回程度のトレードをするには、仕事や家事を一切しない専業トレーダーになる必要もあります。

一方、非常に長期間の保有でスワップを狙うトレードもあります。しかし、各国の政策金利の差が小さくなる傾向にあるときは、少なくともレバレッジを利かせてトレードするのであれば、あまりメリットはありません。高レバレッジ取引は、短期保有が原則だからです。政策金利が拡大していく経済環境では、売買による利益とスワップを受け取ることで、大きな利益を期待することができますが、スワップはあくまで「オマケ」程度に考えておくべきでしょう。いずれにしても、**自分の性格とライフスタイル、相場状況を理解してトレードスタンスを決めることが重要**です。

第6章 押さえておきたい「取引の基本」

008

なぜ、トレードスタンスを 守り続けられないといけないの？

「億単位の利益をあげた」「一生使い切れないほどのお金を稼いだ」という投資家に対して、相場を縦横無尽に渡り歩くイメージを持っていませんか？ とんでもありません。長期的に勝ち続けて大金を手にした投資家ほど、一定のリズムを守り、コツコツとトレードしているものです。

なぜ、トレードスタンスを一定にして、それを守り続けられないといけないのでしょうか。人は多くのお金を手に入れたいという欲求があります。そのためにFXをするわけです。つまり、利益をあげられるなら1回のトレードでできるだけたくさん稼ぎたいと思うのが人の心理です。

しかし、これがくせ者。たまたま買ったドル/円が大きく値上がりして予想以上の利益を手にしたとします。そうなると、大きな利益を狙うのが当たり前になり、長くポジションを持つようになります。それまでは、小さくても確実に利益を取ろうというスタンスだったにもかかわらず、です。

▶▶FXで儲けるためにはリズムが大切

しかし、良いことは長続きしません。ポジションを長く持てば持つほど、損失が大きくなると、また元の小さい利益を確実に狙うというスタンスに逆戻りします。いくなれば、相場に翻弄されているのですが、成功できない投資家はそれに気付かないことが多いのが実情です。

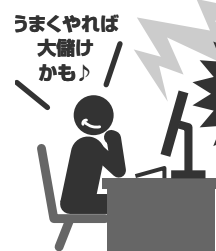
▶勝ち続ける投資家の真の姿



- 儲けのチャンスは1回ではない
- ここ一番の勝負をしない
- 負けを深く認めて損切りをする
- 保有期間やレバレッジを変えない
- スリルを味わおうとしない
- 勝ちパターンを身に付ける
- 勝てる相場展開を見つける
- 情報過多に陥らない
- 他人のトレードスタイルをつまみ食いはしない

他人は他人 自分は自分

▶負ける投資家が陥りやすい罠



- うまくやれば大儲けかも！
- 市場を縦横無尽に渡り歩く
- 臨機応変のトレード！
- 大きな利益を手にする！
- 億単位のお金を稼いだ！
- プロの華々しい話 武勇伝！
- ハイリスクハイリターン！

他人の成功物語は、それがすべてとは限らない。一時的に大成功しても、有頂天になれば、奈落の底に。地道にコツコツが勝利への近道



自分にあったトレードスタンスが決まるまでは試行錯誤も必要ですが、これで行こう！と決めたら、後はそれを続けることです。もう少し持っていれば儲かったのに、と悔しい思いをすることもあられるでしょう。しかし、**長い目で見ると、その時々で保有期間を長くしたり短くしたりすることはデメリットのほうが大きいのです。**

書店などで数億円のお金を稼いだトレーダーの本を目にしますが、FXで巨額のお金を手にし、有名になった後もそれが続いている人のほとんどは、いつも同じスタンスを貫いています。利益を確定した後に値上がりしても、損失を限定した後に元のレートに戻っても、それを悔やんだりはしません。「チャンスは常にある」ことを肝に銘じているからです。

そして、トレードをスリルあるものとは決して考えていません。優先するのは利益なのか、スリルなのか、投資家の腹ひとつです。儲けよう、儲けたいと思って参加する以上、それを貫き、**トレードスタンスを一定に保つことの大切さ**をよく覚えておいてください。

第6章 押さえておきたい「取引の基本」

009

投資家の手間を省く システムトレード(自動売買)

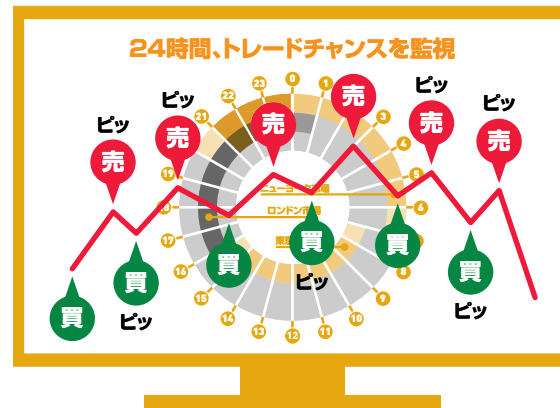
外国為替市場は24時間眠りません。しかし、人間は生身。市場が動いているときに四六時中、監視していることはできません。そして、自分が見ていないときに限ってチャンスが到来していることも……。コンピューターシステムにトレードを任せてしまう方法もあるんです。

トレードの手法には、これまで解説したのとは別次元のものがあります。それがシステムトレード（自動売買）です。日本の個人投資家にはあまり馴染みがなく、ほとんどの入門者はシステムトレードの存在を知らずにいます。しかし、欧米では珍しいものではありません。それどころか、売買をシステム任せにするかは別にして、それが発するシグナルに沿ってトレードすることは日常的に行われています。

システムトレードとは、次章で解説する「チャート分析」という手法をベースに、投資家がそれぞれトレードルールを決めて、それをコンピューター（システム）にトレードさせる手法です。特に外国為替市場の場合は、24時間眠らずに世界を駆け巡ります。つまり、チャンスがいつ訪れるか、利益を手にするタイミングがいつなのかは分かりません。

システムトレードなら、時間的な制約は皆無ですし、「もっと儲けたい」「これ以上損失を膨らませたくない」といった心の葛藤もありません。何しろ、コンピューターがあらかじめ決めたとおりにトレードしてくれるの

▶システムトレード



システムトレードを実践するプロセス

- チャート分析を
しっかり身に付ける
- ↓
- トレードルールを考える
- ↓
- 過去の相場データで
ルールを検証する
- ↓
- 実際の相場で試してみる

**システム
トレードの
メリット**

相場の動きに
一喜一憂する
ことがなくなる

システムには
欲がない
↓
スタンスが一定

トレードに割く
時間を有効活用
できる

ですから、心の葛藤もなく、忙しい、眠い、売りと買いを間違えてしまったということはありません。

▶▶ファンダメンタルズ分析も不要

システムトレードを採用すれば、経済指標の発表に一喜一憂する必要もなくなります。こう書くと、まるで夢のシステムに聞こえるかもしれませんが、その代わりといっは何ですが、先ほど書いたように、「チャート分析」を徹底的に研究して、テストを繰り返さなければなりません。これは、想像以上に地道な作業です。しかし、そういうことが向いている人も多いはず。どうしても、**相場の動きに一喜一憂してしまいそうという方は、システムトレードに目標を定めるのも一案**かもしれません。

あえてシステムトレードを紹介しているのは、「最初が肝心」だからです。**何事も、成功の秘訣はゴール（目標）を決めて邁進すれば、最短距離で到達**できます。興味のある方は、チャート分析に重点を置きましょう。

第7章

FXに欠かせない 「チャート分析」を 極めよう

- 001 為替レートの履歴書、それが「チャート」 82
- 002 たった1本のローソク足でも多くの情報が含まれている ... 83
- 003 チャート分析の基本はトレンドを見極めること 84
- 004 トレンドラインを引いて相場のトレンドを把握する 85
- 005 トレンド&チャンネルラインを使ってタイミングを計る 87
- 006 チャンネルラインを使ってトレンドの変化を先取りする 88
- 007 トレンドラインを下抜けると元に戻るの簡単ではない ... 89
- 008 トレンドラインを修正してトレンドの変化を確認する 90
- 009 チャートの山や谷に引くサポート&レジスタンスライン 92
- 010 サポート&レジスタンスラインを引く3つのルール 94
- 011 数値でしっかり管理できるテクニカル指標 96
- 012 移動平均線はトレンドを測る便利なツール 97
- 013 サポート&レジスタンスラインとして移動平均線を使う ... 98
- 014 周期の異なる移動平均線の特徴を理解しよう 99
- 015 1本の移動平均線を使ってトレードのタイミングを計る ... 100
- 016 2本の移動平均線を使ってトレードのタイミングを計る ... 101
- 017 中長期移動平均線の向きに着目して精度を上げる 102
- 018 見やすさが個人投資家に人気のMACD 104
- 019 買われすぎと売られすぎが一目瞭然のストキャスティクス ... 105
- 020 使いこなしが難しいRSIはダイバージェンスに注目する ... 106
- 021 チャート分析を使ってトレードの成果を高めるには 107

- コラム** ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール
- 経済のグローバル化と外国為替相場の密接な関係 ----- 108
- 通貨安はメリットばかりではない ----- 109

第7章 FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

001 為替レートの履歴書、 それが「チャート」

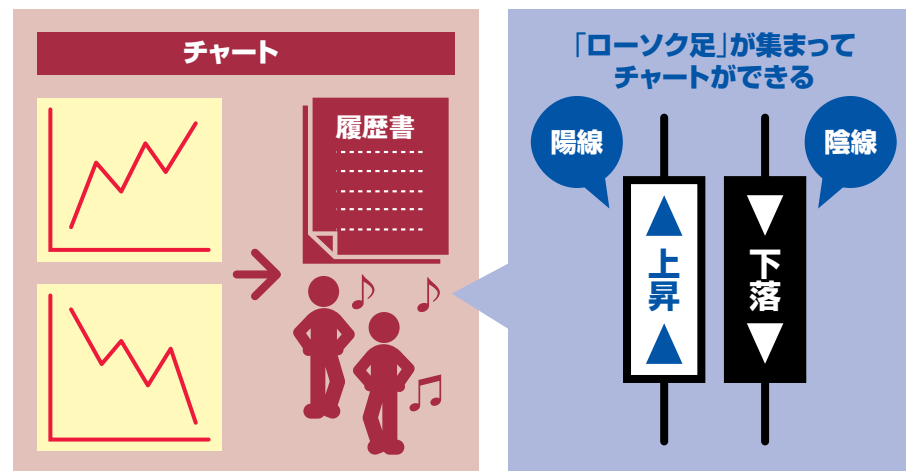
各国の経済環境や金利、経済指標の事前予想などを入念にチェックしても、最終的に為替レートがどのような水準にあるのか、現状は上がっているのか、下がっているのかを把握していなければ、トレードをすることはできません。そのためにはチャートを読みこなす必要があります。

外国為替市場の仕組みや経済指標の見方を理解して、注文の出し方を身に付けたら、いよいよ実戦に突入です。しかし、現在の為替レートだけを知っていても、できるだけ有利な値段で取引したいものです。しかも、外国為替に限らず、相場というものは「流れを知る」ことが大事。そこで欠かすことができないのが「チャート」です。

▶▶相場の流れが一目で分かる「チャート」

チャートという聞き慣れないかもしれませんが。たとえば、ドル／円相場が過去1年間でどのような動きをしてきたのかを知るためのグラフと考えれば分かりやすいでしょう。FXのチャートはいわば、為替レートの履歴書。それを見ることで、相場の流れが一目で分かります。

グラフといってもいろいろあります。折れ線グラフやローソク足が集まったグラフだったりします。これらのグラフのことをチャートといいます。チャートを見るときには、一般的に4つの為替レートで形作るローソク



チャートを見ると、こんなことが分かる

- 過去にどんな動きをしたのか
- 最近では上がっているのか、下がっているのか
- 長い目で見て、上がっているのか、下がっているのか
- 通貨ペア特有の動きがあるかどうか……など

足を使います。厳密には、これを「ローソク足チャート」といい、2通りのローソク足があります。上昇を示す白いローソク足＝陽線と、下落を示す黒いローソク足＝陰線で、あわせて「陰陽線」といわれています。インターネットが普及して、カラー表示では、陽線が「赤」、陰線が「緑や青」で表示されるのが一般的です。ローソク足の具体的な仕組みについては、次項で解説しますね。

ところで、ローソク足は日本で生まれました。欧米では、折れ線グラフやバーチャートが主流でしたが、ローソク足はシンプルながら非常に優れていると認められ、「キャンドルスティック」として世界で広く使われるようになりました。ローソク足以外にも様々なチャートがありますが、本書ではチャートといえばローソク足チャートと考えてください。そして、チャートを漠然と見るのではなく、一定のルールに基づいて読み解くことで、相場の流れをより深く理解することができます。これを「チャート分析」「テクニカル分析」といいます。

第7章 FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

002

たった1本のローソク足でも多くの情報が含まれている

江戸時代に開発されたローソク足は、今やグローバルスタンダード。いろいろな形のローソク足が連なっているのがローソク足チャートです。これを読み解くことで相場の流れが分かり、トレードのタイミングを計れるようになります。ところで、ローソク足って？ それをここで解説します。

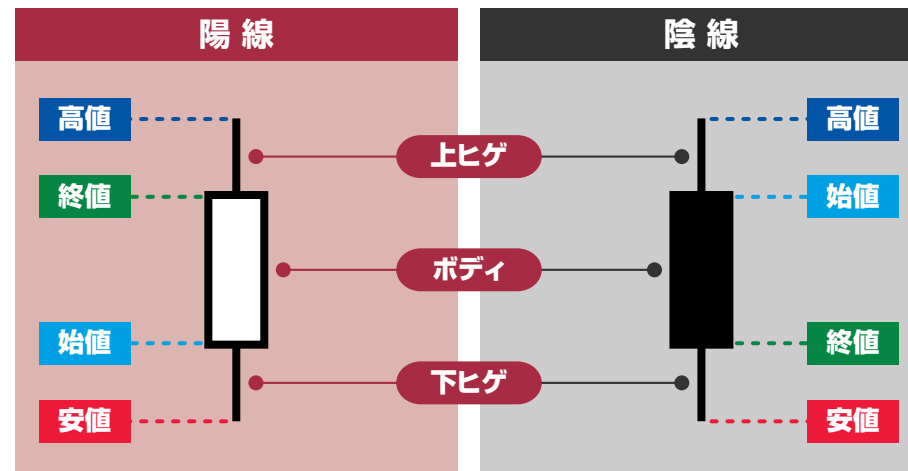
ユニークな形をしているローソク足には、ちゃんとした意味があります。まずは1本のローソク足の各部位には、「はじめね始値」「たかね高値」「やすね安値」「おわりね終値」という名前が付いています。「始値より終値が高い」のが陽線、「始値より終値が安い」のが陰線です。また、始値と終値の間の長方形を「ボディ」、ボディの上下に伸びている線を「ヒゲ」といいます。ヒゲは上に伸びていれば「上ヒゲ」、下に伸びていれば「下ヒゲ」です。

▶▶ローソク足の形で相場の強弱を計る

上昇を意味する陽線のボディが長ければ、それだけ買いたい投資家が多く、下落を意味する陰線のボディが長ければ、それだけ売りたい投資家が多いことを意味します。

また、下ヒゲが非常に長く伸びたときは、大きく下落してお買い得感が出たために、「この価格水準なら買っても良いかな」「良い加減に決済して利益を確定しないと」と考える投資家が多かったことを意味します。一方、

▶「ローソク足」の基本



上昇や下落だけでなく、ボディやヒゲの長さから相場の強弱を計ることができる優れたもの

上ヒゲが非常に長く伸びたときは、下ヒゲの解説と逆に考えてください。

ちなみに、下落しているにもかかわらず新規買いとすることを突っ込み買い、同様の状態で売りポジションを決済することを買い戻しといいます。また、一定の上昇を見たあとに長い上ヒゲを伸ばしたり陰線が出現したりするときのことを（利益確定の）売りに押されるといいます。

このように、たった1本のローソク足を見るだけで、相場の強弱を計ることができます。江戸時代に米相場で財をなした本間宗久は、数本のローソク足を組み合わせることで、相場の強弱と方向を見極める方法を編み出しました。ただし、レバレッジを利かせて取引をするときには、より短期間のトレードが求められるため、数本のローソク足だけで判断するのは難しいといえるでしょう。

そこで、一定期間のローソク足を見て、相場の流れを把握することが重要になります。相場の流れ（向き＝方向性）のことを「トレンド」といいますが、外国為替相場を読み解く上では、これに着目する必要があります。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

003

チャート分析の基本は
トレンドを見極めること

相場の流れという、分かるような分からないような感じがするかもしれません。相場を流れで捉えないと、上か下かにかける「ギャンブル」になってしまいます。FXをただのギャンブルにするのか、それとも、まっとうな投資にするかは、チャートを使いこなせるかどうかにかかっています。

「トレンドに着目する」というと、なんだか難しそうに聞こえるかもしれませんが、ご心配なく。相場は基本的に「上がるか、下がるか」です。一定期間上がる＝上昇する相場を「**上昇トレンド**」、その逆の**下落する相場**を「**下降（下落）トレンド**」といいます。もう1つ、**上がりもしないし、下がりもしないで一定の値幅を行き来する「横ばいトレンド**」というのがありますが、まずは**上昇トレンドと下降トレンド**を覚えましょう。

株式や商品相場にもトレンドはありますが、特に外国為替相場では「**トレンド**」が重視されます。2つの国の通貨ペアを取引するのが外国為替取引ですから、どちらかが強くなれば、もう一方は弱くなります。その理由が金利だったり、通貨の供給量だったり、景気の善し悪しだったりします。

チャートを見ると、トレンドは一目瞭然。一般的には、ファンダメンタルズ分析を基礎に、チャート分析で**トレンドを確認し、買いか売りか**と、その**タイミングを決めること**になります。また、**買いならいくらで買うか、どこまで上昇したら決済するか、ストップロスオーダーをどこに置くべき**

▶「相場の流れ＝トレンド」の基本



上昇トレンド

上昇トレンドのときに
買うか売るか？

買い = 順張り

売り = 逆張り



下降トレンド

下降トレンドのときに
買うか売るか？

買い = 逆張り

売り = 順張り

..... 為替レートの動き



横ばいトレンド

相場の流れ＝トレンドに
付くのが基本。だから、
チャートは**トレンドを重視**
して分析するのが大切



かもチャート分析から導き出します。

▶▶相場の流れ＝トレンドに付くのがトレードの基本

トレンドを見極めてトレードするときに、まず**スタンスを決めなければなりません**。トレンドに付く、つまり「**順張り（トレンドフォロー）**」にするか、**トレンドに対して逆のポジションを取る「逆張り」**にするかです。

トレンドを形成するといっても、上がり続けたり、下がり続けたりするわけではありません。上昇すれば一定の**下落**、下落すればまた**上昇**するというように、**タイミングは別にして、ジグザグを描きながらトレンド**ができあがります。

外国為替相場は「**トレンドが出やすい**」ため、「**順張り**」がトレードの基本となります。ただし、**逆張り**は厳禁というわけではありません。横ばいトレンドのときは「**順張り**」より「**逆張り**」が効果的な場合もあります。この点を踏まえながら、**トレンドについて掘り下げてい**きましょう。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

004

トレンドラインを引いて 相場のトレンドを把握する

相場の方向性、それが「トレンド」。特に外国為替相場は、トレンドが出やすいといわれています。となれば、トレンドを把握し、それに沿ったトレードをすることが大切です。トレンドライン分析は、チャート分析の中でも定番中の定番。まず、これをしっかりマスターしましょう。

トレンドはチャートを見れば一目瞭然ですが、問題は**トレンドの「角度」**です。そして、**どの程度のジグザグ、つまり「振幅」で相場が動いているのかを確認することが必要**です。といっても、見た目で角度や振幅を測るわけではありません。「**トレンドライン**」と「**チャンネルライン**」という線を引き、できるだけ正確に**角度と振幅を把握**します。

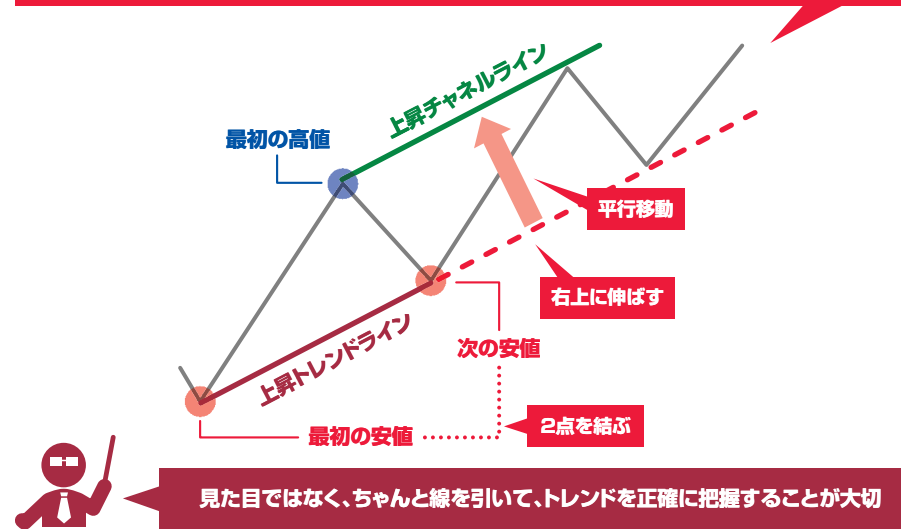
FX会社が提供するチャートには、描画ツールが備わっていますから、それを使ってトレンドライン、チャンネルラインの順に引きます。

▶▶トレンドラインとチャンネルラインがチャート分析の基本

最初に、トレンドラインの引き方を説明しましょう。まずは、**上昇トレンドライン**からです。チャート上の「**最初の安値**」と「**次の安値**」を見つけて、**その2点を結び、右上に伸ばします**。最初の安値は基本的に一定期間の最も安いポイントを選びますから、それほど問題ではありません。ところが、「**次の安値**」がくせ者です。

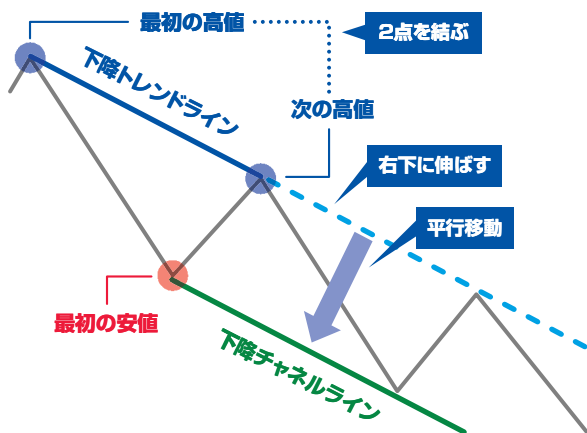
▶「上昇トレンドライン」と「上昇チャンネルライン」の引き方

トレンドラインは角度を、チャンネルラインは振幅を把握するのに役立つ！



▶「下降トレンドライン」と「下降チャンネルライン」の引き方

トレンドラインは角度を、チャンネルラインは振幅を把握するのに役立つ!



トレンドラインとチャンネルラインが、後々の相場の予測に重要な役割を果たす



前ページの図のように、最初の高値から上昇して高値をつけて下落し、2回目の安値をつけて反転上昇するポイントが「次の安値」です。この場合、最初の高値より次の安値が水準的に高い位置にあることが、上昇トレンドの前提になります。そうでないと、トレンドラインは右肩上がり＝上昇にならないからです。

一方、下降トレンドラインはその逆。チャート上の「最初の高値」と「次の高値」を見つけて、その2点を結び、右下に伸ばします。左の図のように「次の高値」は、最初の高値から下落して安値をつけた後に上昇し、2回目の高値をつけて反転下落するポイントです。最初の高値より次の高値が低い水準にあるのが下降トレンドの前提になります。

チャンネルラインは、上昇、下降のトレンドラインを平行移動します。どこに移動するかですが、**上昇トレンドでは最初の高値から上昇して高値をつけたポイント**、**下降トレンドでは最初の高値から下落して安値をつけたポイント**です。これでトレンドの角度と振幅が分かるようになります。



第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

005

トレンド&チャネルラインを使ってタイミングを計る

トレンドラインを引いたときに、欠かせないのがチャネルラインです。チャート上に、この2本の線を引くことによって、トレンドだけでなくトレードのタイミングを計ったり、トレンドの変化をいち早く察知したりできるようになります。決して軽視してはいけない重要なツールなのです。

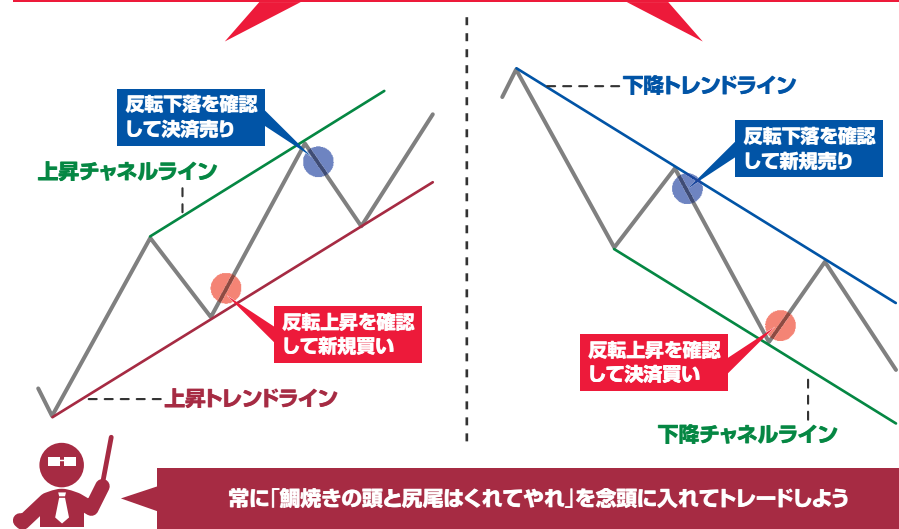
トレンドラインとチャネルラインを引くことで、トレンドの角度と振幅が分かるようになります。仕掛け（新規）や手仕舞い（決済）のタイミングを計ることができるようになります。また、振幅の大小からトレンドの変化をあらかじめ察知することもできます。まず、タイミングの計り方から解説しましょう。

▶▶ 鯛焼きの頭と尻尾はくれてやれ

たとえば、上昇トレンドラインを引くときには、2回目の谷をどう判断するかが問題になります。下落の最中に1本の陽線が出現しただけで反転と決めつけるわけにはいきません。少なくとも数本は欲しいところです。しかし、分析のためではなく、実際にタイミングを計るとなると、3~4本の陽線の出現を待ってはいは仕掛けが大幅に遅れてしまいます。ということは、2本の陽線が出現し、しかも2本目の陽線が最後の陰線の高値を抜いてくれたときを、新規買いのタイミングとして考えるべきでしょう。

▶「仕掛け」と「手仕舞い」のタイミングの取り方

特に、トレンドラインで反転を確認しないと、逆方向へ動くリスクが高まる



手仕舞いのはときは、この逆。チャネルラインに到達して、しかも反転下落を確認して決済売りとします。チャネルラインに到達したときに決済すると、チャネルラインを突き抜けてしまう恐れがあります。要するに、利益がもっと大きくなるはずが、それを取り逃がすことになるのはもったいないですね。売りポジションを取るときも考え方は同じです。これが「トレンドフォロー戦略」という手法です。

まとめると、上の図のように、**トレンドラインと仕掛けの価格水準、チャネルラインと手仕舞いの価格水準の間には、少しですが「のりしろ」**があります。のりしろの部分「鯛焼きの頭と尻尾」にたとえて、「鯛焼きの頭と尻尾はくれてやれ」という相場格言が生まれました。

トレードするときには、たとえば、最安値で買いたい、最高値で決済したいと考えるのが人情。しかし、それは大切な資金を無用なリスクにさらしているだけです。**長く続けるには、「ちょっとだけ控えめなスタンス」が何よりも大切**だということを肝に銘じてくださいね。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

006

チャネルラインを使って トレンドの変化を先取りする

トレンドラインは上昇や下落を漠然と見るものではありません。トレンドには急激に上昇したり緩やかに上昇したりと、様々な性質があります。トレンドラインとチャネルラインから、トレンドの性質を見極めることによって、仕掛けだけでなく、手仕舞いのタイミングも計ることができます。

トレンドフォロー（順張り）戦略にとって、最大の敵は「**トレンドの変化**」です。トレンドの変化には2種類あります。1つは、**上昇から下落、下落から上昇にトレンドが変わる＝トレンドが転換**すること。もう1つは、**トレンドの角度が変わる**ことです。

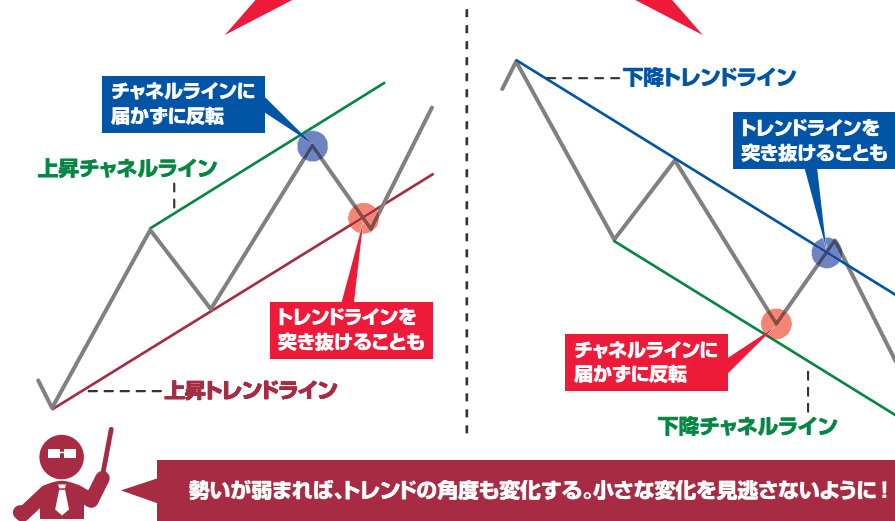
トレンドの変化を知るためには、「チャネルラインに着目」する必要があります。たとえば、ローソク足がトレンドラインで反転上昇し、チャネルラインに向かっていくとします。決済のタイミングは、チャネルラインに到達して反落したところでした。

▶▶チャネルラインに到達しなければ、トレンドの変化に警戒

ところが、チャネルラインに到達せずに反落したら？ この場合は、**早めに決済して利益を確定するだけでなく、トレンドラインを下に突き抜けることを警戒しなければなりません**。ちなみに、**トレンドラインやチャネルラインを上や下に突き抜けることを「ブレイク」と**いいます。

▶「トレンドの変化」を見極めるポイント

チャネルラインに届かなければ、トレンドが変化する可能性が高い



トレンドラインをそのまま下に突き抜けてしまえば、最低でもトレンドの角度が変化し、最悪ならトレンドが転換してしまうため注意が必要です。つまり、**チャネルラインは単にトレンドの振幅を測るだけでなく、トレンドの変化をいち早く察知するという役割もある**のです。トレンドラインを見ているだけでは、トレンドラインを下抜けたときに初めて、トレンドの変化を知ることになり、対応は後手に回ります。

投資家は、事前に想定していなかったことが起きると、「ちょっと下抜けただけで、すぐ元に戻るだろう……」と自分に都合の良い解釈をして結論を先延ばしにしてしまいます。こうしたことを起こさないためにも、「事前に察知する」「変化を先取りする」ことはとても大切です。

仮に、チャネルラインに到達しなかったからという理由で早めに利益確定をしたのに、その後、チャネルラインを突き抜けてしまったら……。投資家心理としては、「もっと儲けられたのに！！」と後悔しがちです。しかし、これは利益を取り損なただけで、損失を被ったわけではありません。

第7章 FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

007 トレンドラインを下抜けると 元に戻るの簡単ではない

たとえばトレンドラインは、上昇トレンドのときに相場を支え、下降トレンドのときは相場の行く手を阻むという性質があります。トレンドラインやチャンネルラインを突き抜けると、これまでの性質が逆の立場に転じます。この点に着目すると、ワンランク上のトレードができるようになります。

FXで利益をあげるためには、負けないトレードを心がけることが最も大切です。前項では、「取り損ない」と「損失を被ること」について書きました。投資家の多くは「取り損ないを減らす」ことを重視し、「損失を被らないようにする」ことを軽視しがちです。

取り損ないを減らすために、できるだけ多くの利益をあげようとポジションを引っ張る、言い換えれば、最高値や最安値で利益確定を狙います。「このあたりまで上昇するはず」と決めてかかることが多いのが実情です。

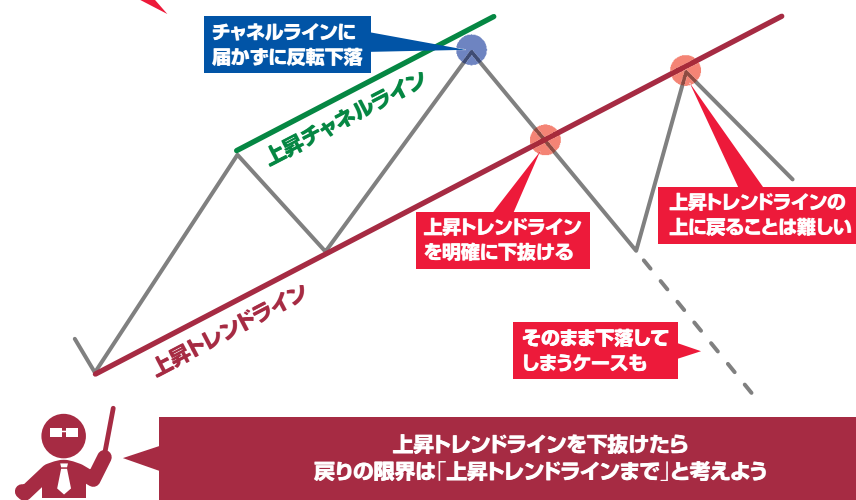
▶▶トレンドラインを下抜けると、それが相場の上昇を阻む

トレンドラインを引いてチャート分析をするときも、これと同じようにある意味で「決め打ち」をしてしまう投資家が多いようです。

たとえば、チャンネルラインに到達せずに反落し、トレンドラインも下方ブレイクしているにもかかわらず、「ちょっとぐらいのブレイクならトレンドは元に戻る」と決めてかかっているときです。

▶「上昇トレンドライン」を下抜けたときによく見られるケース

上昇トレンドラインを明確に下抜けると、元に戻ろうとする力が働くが…



トレンドラインを下抜けてしまうと、相場はトレンドラインの上に戻ろうとします。しかし、これがなかなか難しい。トレンドラインやチャンネルラインには、相場を支えたり、相場の行く手を阻んだりする性質があるからです。ちなみに、**相場を支える線を「サポートライン」、相場の行く手を阻む線を「レジスタンスライン」と**いいます。チャンネルラインに到達して反落するというのは、まさにこのメカニズムが働いているわけです。

話を元に戻すと、**これまで相場を支えていた＝サポートラインとして機能していたトレンドラインを下抜けると、その性格は転換します。**つまり、トレンドラインの役割はサポートラインからレジスタンスラインに転じて上昇を阻み、トレンドラインの上に戻ろうとするのを邪魔します。したがって、投資家が勝手に「元に戻るだろう」と考えても、トレンドラインまでが上昇（戻り）の限界となり、元の価格水準に戻らないケースが多くあります。そして、トレンドラインから離れてしまえば、損失が膨らんでしまいます。相場の動きを特徴的に捉えることが、チャート分析なのです。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

008

トレンドラインを修正して トレンドの変化を確認する

トレンドと一言で言っても、常に一定の角度で上昇したり下落したりするわけではありません。その時々の方場の勢いによってトレンドの角度も変化します。となれば、トレンドラインやチャンネルラインをブレイクしたら、その角度を測るために修正すると、トレンドが分かりやすくなります。

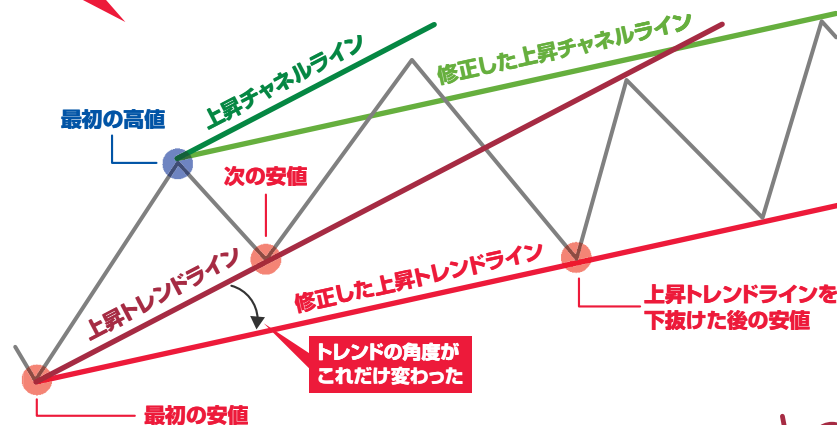
相場が上昇トレンドを形成しているときにトレンドラインを下抜ければ、それはサポートラインからレジスタンスラインに役割が転換します。そして、上昇(戻り)の限界がトレンドラインになると、上昇トレンドの角度はそれまでよりも小さくなります。

問題は、トレンドラインを下抜けた後に、上昇トレンドを維持できるのか、それとも下降トレンドに転換するのかです。トレンドラインを引くときの起点にした水準より上で再び上昇に転じれば、上昇の角度は小さくなったものの上昇トレンドは継続と判断します。ただし、**それまでのトレンドラインを引き直す、つまり「修正」する必要があります。**

最初に引いたトレンドラインの起点と、トレンドラインを下抜けてから上昇に転じたところ、つまり「谷」を形成したところを新しいトレンドラインの終点として結びます。こうすることで、新しいトレンドラインを引くことができ、これまでよりも上昇の角度が小さくなったことが確認できます。そして、修正したトレンドラインが新しいサポートラインとして機

▶「上昇トレンドライン」を下抜けたら、トレンドラインを修正する

上昇トレンドラインとともに、上昇チャンネルラインも修正する



トレンドの変化(角度)をしっかり把握することが、後の相場予測に役立つ



●豪ドル/円 ●日足 ●2009.01.26~11.13 (チャート提供:GMOクリック証券 <http://www.foo.bz/click/>)

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

009

チャートの山や谷に引く サポート&レジスタンスライン

角度のあるトレンドラインやチャンネルラインが完全に水平になったら？
これが本来のサポートラインやレジスタンスラインです。サポート&レジスタンスラインの使い方は幅広く、使いこなすにはちょっと時間がかかるかもしれませんが、相場の節目としては重要なものばかりです。

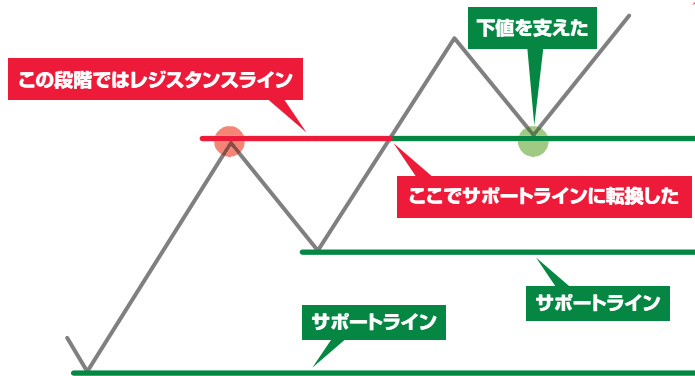
横ばいトレンドになったときも、トレンドラインやチャンネルラインを引くことができます。ただし、定規で測ったような水平のトレンドラインというのは、ちょっとあり得ません。トレンドラインの終点と起点が、まったく同水準になることは非常に稀だからです。

そのため、起点と終点を結ぶというよりは、**上昇から反転下落したときの高値、下落から反転上昇したときの安値に水平の線を引く**ことで、後に同じような水準で下げ止まったり、上げ止まったりして、一定の値幅で動くことが後で分かる、それが横ばいトレンドです。

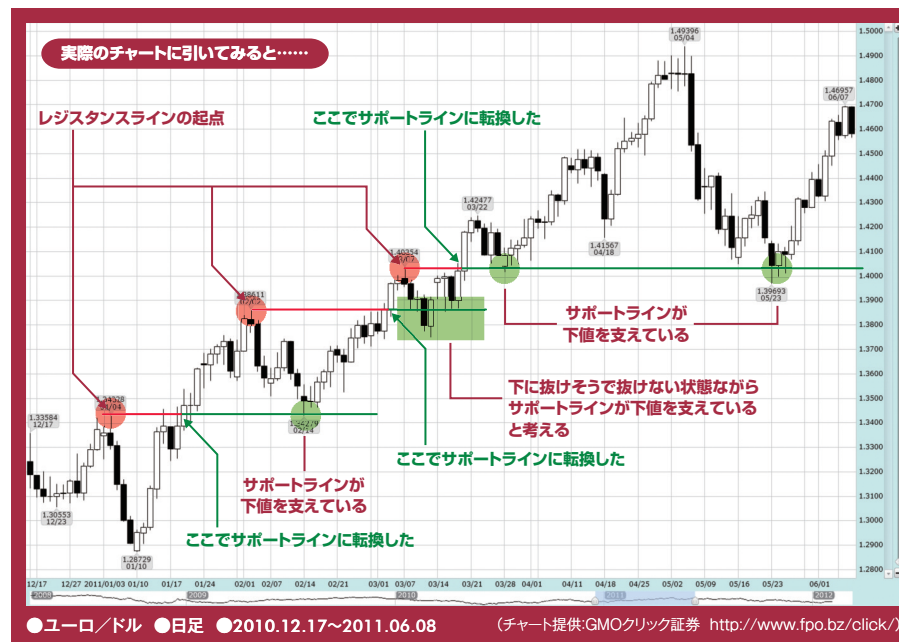
たとえば、**下落した後に反転上昇したところに、最初の水平の線を引きます**。その後は、この線をトレンドラインと同じように考えます。トレンドラインやチャンネルラインの役割を解説したときに「**サポートラインとして機能**」と書きましたが、水平の線こそ、本来の「サポートライン」です。紹介の順序が逆になったのは、トレンドという考え方をまず、理解していただくためからです。

▶「サポートライン」と「レジスタンスライン」の基本①

上昇トレンドでは、特にサポートラインが機能するかに着目する



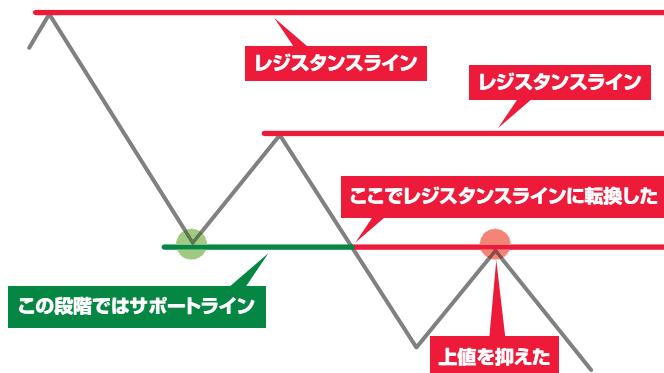
レジスタンスラインを上抜けるということは、それだけ買い圧力が強い証拠



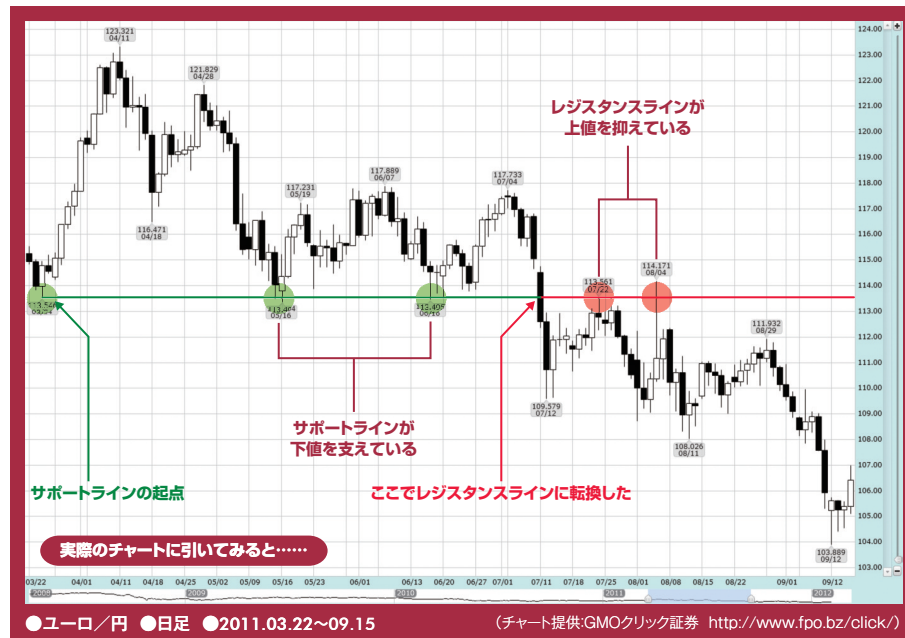
●ユーロ/ドル ●日足 ●2010.12.17~2011.06.08 (チャート提供:GMOクリック証券 <http://www.foo.bz/click/>)

▶「サポートライン」と「レジスタンスライン」の基本②

下降トレンドでは、特にレジスタンスラインが機能するかに着目する



サポートラインを下抜けるということは、それだけ売り圧力が強い証拠



一方、最初のサポートラインを引いてから順調に上昇。そして、いつかは必ずといっていいほど反落します。下落に転じたときの高値にもう1本、水平の線を引きます。これが本来の「レジスタンスライン」です。サポートラインとレジスタンスラインの範囲に収まって上げ下げを繰り返す相場が横ばいトレンド、別名、「ボックス圏相場」「レンジ相場」といいます。

▶▶サポート&レジスタンスラインの引き方はいろいろ

サポート&レジスタンスラインの特性は、トレンド&チャンネルラインで解説したように上下にブレイクすることによって、その性質が転換します。問題は、どこにどう引けば良いかです。チャートの山を形成した高値や谷を形成した安値に引くというのが一般的ですが、実際に引こうとしても、チャートには山や谷はいくらでもあります。

そのため、一定のルールを決める必要があります。主だったところでは3つの引き方を覚えてください。それは次項で解説します。



第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

010

サポート&レジスタンスラインを引く3つのルール

ここではサポート&レジスタンスラインの代表的な引き方を3つ紹介しましょう。まず、トレンドラインを引くときの起点と終点、チャンネルラインを平行移動する点に引くのが基本です。また、サポート&レジスタンスラインにも強弱があり、これを見極めて相場の反転ポイントを探ります。

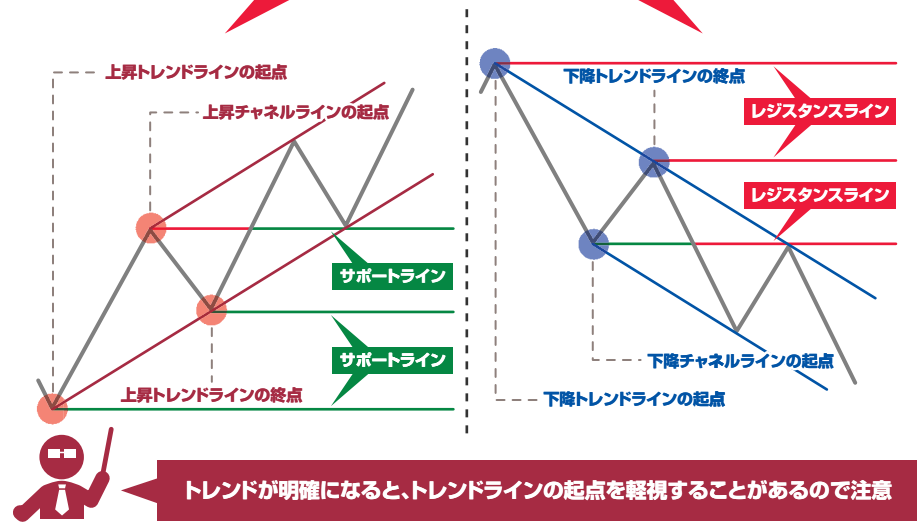
チャートを初めて見る方やチャート分析をしたことがない方は、サポート&レジスタンスラインの基本的な引き方を3つ覚えましょう。

最初は「**トレンドラインの起点と終点、チャンネルラインの起点（トレンドラインを平行移動する点）**」に引きます。チャートの表示期間によって上昇トレンドと下降トレンドの両方があるケースでは、合計6本のサポート&レジスタンスラインを引くことになります。

次に、ヒゲに着目します。「**非常に長いヒゲを伸ばした高値や安値**」に単独で引きます。非常に長いというと、日足なら始値に対して1.5~2%前後というところでしょうか。たとえば、100円の始値に対して、ヒゲの長さが1.5~2円という感じです。下ヒゲ陰線なら安値と終値の差、上ヒゲ陽線なら高値と終値の差と始値を比べることで判別します。余裕があれば、「**非常に長いヒゲを伸ばした方向の終値**」に引くと、相場の動きを把握するのに役立ちます。ただし、こうした長いヒゲはあまり多く出現することはありません。その分、チェックポイントとしては重要です。

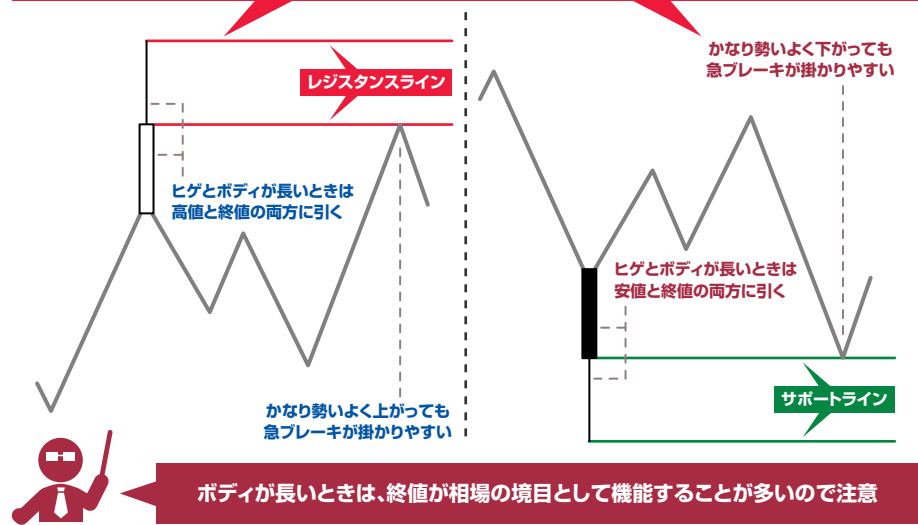
▶「トレンドラインの起点と終点、チャンネルラインの起点」に引く

まず、基本中の基本となる3本は必ず引く習慣を付けよう



▶「非常に長いヒゲを伸ばした高値・安値と始値・終値」に引く

ボディとヒゲの両方が長いときは、必ずセットで引くようにしよう



もう1つは、「**チャート上の目立った山の高値、谷の安値**」に引きます。これは多少、感覚的なものになりますが、山や谷が大きいものを探してください。**山の頂上や谷の底の部分に目立ったヒゲを伴っているケース**なら、サポート&レジスタンスラインは引いておくべきです。ただし、1年程度のチャートでは、トレンドラインの起点や終点、チャンネルラインの起点にサポート&レジスタンスラインを引いていれば、その他のサポート&レジスタンスラインは多くて2~3本もあれば十分でしょう。

▶▶サポート&レジスタンスラインの強弱

ところで、サポート&レジスタンスライン、トレンド&チャンネルラインには強度があります。3つの引き方はいずれも強い部類に入りますが、トレンドラインの起点が大きな谷で、長いヒゲを伸ばしていれば一段も二段も強度は上がります。強度を判定するスキルは、実際に線を数多く引いて、感覚を徐々に養っていきましょう。



第7章 FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

011

数値でしっかり管理できる テクニカル指標

パソコン画面上のチャートに実際に線を引いて分析する手法に対して、為替レートを使って様々な方法で計算した結果をグラフ化して数値的に判断するのがテクニカル指標です。これは、相場の方向性を見る「トレンド系」と、相場の勢いに着目した「オシレーター系」に分けることができます。

トレンド&チャンネルラインや、サポート&レジスタンスラインを引くときの判断は、投資家の裁量に委ねられています。そのため、1人ひとりの投資家によって引き方は違い、それに伴ってトレードの判断も異なる可能性があります。したがって、相場の展開次第では十分なトレーニングと経験が必要となってくるでしょう。その反面、独自の分析手法やトレードのルールを作ることができますし、醍醐味もあります。

一方、数値で管理するテクニカル指標というものがあります。**テクニカル指標は、相場のトレンドを把握したり、見極めたりする「トレンド系」と、相場の勢いに着目した「オシレーター系」に大別されます。**一部、どちらにも属さない独立した指標もありますが、まず、この2種類があることを覚えましょう。ただし、**外国為替相場は多くの場合、トレンドが明確になるのが最大の特徴**です。そのため、トレンドラインの引き方から紹介を始めました。

となると、少なくともFXでテクニカル指標を使うのであれば、やはり

	トレンド系 テクニカル指標	オシレーター系 テクニカル指標
目的	相場の「方向性」を知る	相場の「勢い」を知る
長所	トレンド相場で 威力を発揮	一定幅のレンジ相場で 威力を発揮
短所	レンジ相場になると 機能不全に陥る	トレンドが明確になると 機能不全に陥る
トレード シグナル	サポート&レジスタンスライン として使うか、数値を基準にする	複数の線の交差に着目するか 数値を基準にする
注意点	ローソク足が並んでしまうような べた風の相場になると信頼性はかなり揺らぐ	
代表的な 指標	移動平均線 MACD ボリンジャーバンド モメンタム	ストキャスティクス 移動平均乖離率 RSI DMI

「トレンド系」を使うのがベストでしょう。

▶▶テクニカル指標の代表格

トレンド系テクニカル指標の代表格は、「**移動平均線**」と、移動平均線を応用して作られた「**MACD**」、通称「マックディー」。本書では、移動平均線の見方と使い方を中心に解説し、MACDは補足的に紹介します。

オシレーター系テクニカル指標の代表格は、「**移動平均乖離率**」や「**ストキャスティクス**」「**RSI**」です。本書では、移動平均乖離率を中心に、残りの2つは紹介程度にとどめています。というものの、先ほども書いたように、トレンド系のほうが外国為替相場と相対するときにはより重要です。あれもこれも中途半端では、実戦で使いこなすことができないからです。さらにいえば、**2~3つの分析手法を深めたほうがはるかにパフォーマンスは上がります**。数少ない手法を深める過程でコツが培われますし、他のツールを使うときも、それが有効になるからです。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

012

移動平均線はトレンドを測る
便利なツール

テクニカル指標で定番中の定番といえば「移動平均線」。入門したての投資家が必ず学ぶものです。このテクニカル指標の歴史は古く、プロの投資家も必ずといって良いほど使っています。移動平均線は分かりやすい反面、とても奥が深い指標です。是非、使い方を極めてください。

トレンド系だけでなく、テクニカル指標の代表格が移動平均線です。「移動平均線」とは、移動平均という数値を結んで折れ線グラフにしたものです。それでは「移動平均」は？ チャート分析の世界で多くの場合は、終値を基準にします。

たとえば、5日間の移動平均なら5日前からの終値をすべて足して、5で割った数字が前日までの移動平均です。具体的に簡単な数字で事例を解説しましょう。

5日前からのドル/円の終値が、80円、82円、81円、83円、84円だとします。この終値を全部足して5で割ると、 $(80円 + 82円 + 81円 + 83円 + 84円) \div 5日間 = 82円$ （5日前から前日までの移動平均）となります。

今日の終値が85円だとすると、最初の80円の代わりに85円を加えて、同じように5で割ります。したがって、 $(82円 + 81円 + 83円 + 84円 + 85円) \div 5日間 = 83円$ （4日前から今日までの移動平均）となります。これを繰り返すことで、移動平均を線で結び、チャート分析に役立てます。ち



なみに、5日分の終値を基準にするのは「5日移動平均線」、25日分なら「25日移動平均線」で、5日や25日といった計算期間を周期といいます。ここでは移動平均線の仕組みを理解していただくために計算式を挙げただけで、実際にはチャート上に表示されますから、面倒な計算は不要です。

▶▶移動平均線は常時3本の表示が基本

ベテランになると、移動平均線の使い方もいろいろ工夫しますが、初心者の方は、まず3種類の移動平均線を表示するようにしましょう。3本でも何が何だか分からなくなりそうという方は、2本でも大丈夫です。

2本や3本って何を表示するのでしょうか。「超短期」「短期」「中期」「長期」という異なる周期の移動平均線を使うと、相場の特徴を知ることができます。「これじゃあ、4本もあるじゃないか」と思われたでしょうけど、このうち、2本なら「短期と中期」、3本なら「短期、中期、長期」です。次項では具体的な周期とそれぞれの特徴について解説しましょう。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

013

サポート&レジスタンスライン として移動平均線を使う

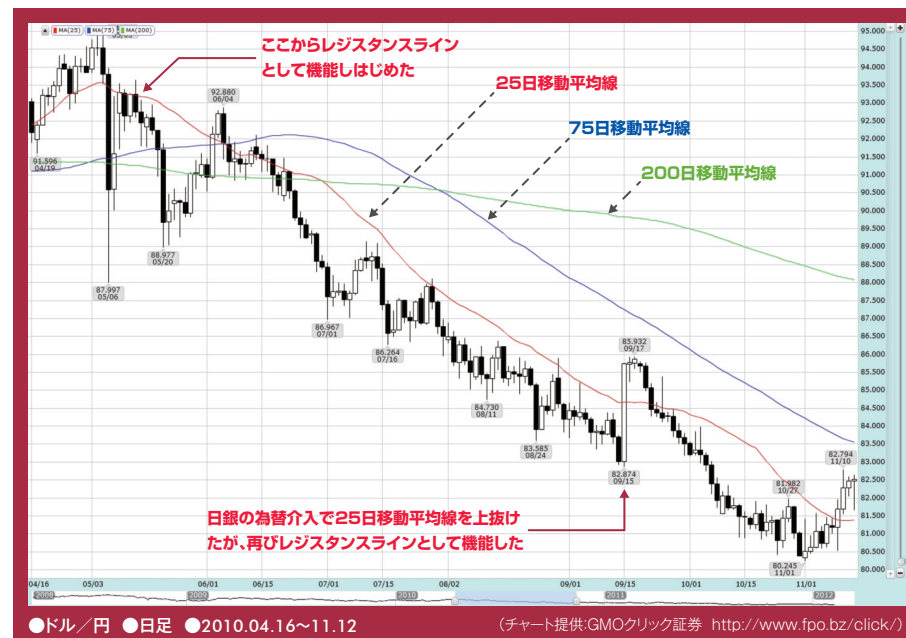
トレンドを把握する移動平均線は、サポート&レジスタンスラインとして使うことができます。このときの使い方は、トレンドラインやチャネルラインとまったく同じ。しかも、計算する期間の長短によって、信頼性や強弱を計ることができるトレンドラインにはない使い方もあります。

複数の移動平均線を使いこなす前に、まず1本の移動平均線を使えるようにしましょう。使い方は、大きく分けて2つです。1つは、移動平均線を「サポート&レジスタンスライン」として使う方法、もう1つは「移動平均線とローソク足の離れ具合」に着目する方法です。まずは、サポート&レジスタンスラインとして使う方法から解説しましょう。

▶▶周期が長いほど、移動平均線の信頼性が高まる

1本1本のローソク足の動きをつぶさに見ようとしても、それを継続的に行うのは無理なことです。そもそも相場は「点で見るよりも流れで見る」ことが重要なように、移動平均も日々の点で見るのではなく、それらを結ぶことで「トレンドを見る」ことが大切です。そういう意味では**トレンドラインと同じような使い方**ができるわけです。

トレンドラインは、チャネルラインと併用することで、相場の角度や振幅を測ることができました。1本の移動平均線では振幅を測ることができ



ない代わりに「**周期に着目したトレンド**」を把握することができます。

たとえば、25日移動平均線なら短期的なトレンドを知ることができ、200日移動平均線なら200日間、つまりほぼ1年間の長期的なトレンドを把握するのに役立ちます。

そして、相場の向きだけでなく、サポート&レジスタンスラインとして使うこともできます。チャート解説のレポートなどでは、「**25日移動平均線がサポートラインとして機能して相場を支えた……**」などと書かれています。つまり、移動平均線よりローソク足が上に位置しているケースでは、移動平均線が相場を支える可能性が高く、移動平均線よりローソク足が下に位置していれば、相場の行く手を阻む可能性があると考えます。また、**ローソク足が移動平均線をブレイクすれば、その性格が転換する**のも、トレンドラインなどと同じメカニズム。加えて、周期が長いほどサポート&レジスタンスラインとしての信頼性が高いのが一般的ですから、中長期の移動平均線も表示する必要があるわけです。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

014

周期の異なる移動平均線の特徴を理解しよう

複数の移動平均線を表示しておくことで、短期、中期、長期のトレンドを把握することができます。周期が違えば、移動平均線が持つ性質もちょっとずつ異なります。その特性を理解して使いこなせるようになると、チャート分析やトレードの質は格段にアップします。

移動平均を計算する期間が長かったり短かったりすることで、何が変わるのでしょうか。仮に1日移動平均線を表示した場合、これは毎日の終値を線で結んだグラフになるだけです。この場合、4つの情報を含むローソク足の特徴がなくなってしまい、相場の勢いが分からなくなるだけでなく、上げ下げばかりが気になりますし、そもそもローソク足と併用する意味がなくなってしまいます。

▶▶ 役割が異なる短・中・長期移動平均線

たとえば、計算期間を25日間とする25日移動平均線は、**細かな振幅がなくなるものの、日々の大きな動きには比較的反応**します。そのため、短期移動平均線は、相場の短期的な動きを捕捉するのに役立ちます。サポート&レジスタンスラインとしても十分に機能しますが、中長期移動平均線に比べて、信頼性は一段落ちます。

一方、計算期間がもう少し長い中期移動平均線は、より滑らかな線を描



きます。最も基本的な周期は75日間。75日移動平均線の特徴は、**25日移動平均線に比べて、相場に対する反応が鈍いため、1日だけ何かの理由で急騰したり急落したりしてもほとんど反応しません**。一方、**中期的なトレンドが分かりやすく、はっきりとしたトレンドが出ている場合は、サポート&レジスタンスラインとして最も重要**です。

最後の長期移動平均線は、200日間を使うのが多いようです。200日間の平均ですから、期間は約1年に及びます。そのため、**相場の変動に対する反応は非常に遅く、トレンドが転換しても、しばらくは逆方向を向いていることのほうが多い**くらいです。また、明確なトレンドが出ているときにはほとんど使い道はありませんが、何らかの理由で急騰や急落をしたときは、**サポート&レジスタンスラインとして機能することが多く、短中期の移動平均線に比べて圧倒的な存在感を示す**のが最大の特徴といえます。

なお、ここでは**25日、75日、200日**を例に挙げましたが、FXの世界では、**21日、89日、200日**を組み合わせて使うプロも多いようです。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

015

1本の移動平均線を使って トレードのタイミングを計る

トレンドラインとチャンネルラインでトレードのタイミングを計りましたが、この移動平均線でも、タイミングを計ることができます。1本だけを使うときと2本以上を使うときなどバラエティーがありますので、一通りの仕組みを理解したら、ご自身が使いやすい方法を採用してください。

周期の異なる移動平均線の特徴を理解したところで、もう少し具体的な使い方を解説しましょう。ここでは短期移動平均線を中心に話を進めます。

移動平均線は、その向きに着目しながら、サポート&レジスタンスラインとして使います。もう1つの使い方は、**移動平均線よりローソク足が上にあるのか、下にあるのか、そしてどのくらいの割合で離れているかに着目**します。これが「**移動平均乖離率**」で、単位は「%」。ちなみに、移動平均乖離率も、いちいち計算する必要はなく、チャートの設定画面を使えば、自動的に表示されます。

周期にかかわらず、**移動平均線よりローソク足が上であれば相場は強く、下であれば相場は弱い**と判断します。ただし、周期が短ければ、その強弱は短期的に終わるケースが多いため、位置関係だけで判断しても精度が落ちます。しかし、これをトレードのタイミングとして活用することができます。たとえば、移動平均線を上回った段階で新規買い、下回った段階で決済売りという具合にです。



この**最大の欠点は、着目する移動平均線に一定の角度、つまりトレンドが出ていないと、利益を獲得することができないこと**です。ところが、これをちょっと応用すると、利益確定の確実性は増すことになります。

▶▶ 移動平均乖離率が大きくなったら決済

応用はこんな感じです。**移動平均線を上抜けたら新規買いとして、移動平均乖離率が一定のプラス乖離に到達したら決済売りとする方法**。ローソク足の期間や通貨ペアによって、目標とする移動平均乖離率は異なります。逆に言えば、その特徴をあらかじめ把握しておけば、トレードのタイミングを計るツールとしては高い信頼を置くことができます。売りで利益をあげようとするれば、**移動平均線を下抜けた段階で新規売りとし、移動平均乖離率が一定のマイナス乖離に到達したら決済買い**とします。

日足ではチャンスは限られますが、1時間足や30分足など短い期間のローソク足を使うとトレード回数（チャンス）を増やすことができます。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

016

2本の移動平均線を使って トレードのタイミングを計る

FXはトレンドが命。トレンドが出るときに、いかに多くの利益を獲得するかが勝負の分かれ目になるからです。周期の短い移動平均線と長い移動平均線が入れ替わるとき、トレンドが転換することがあります。そして、これに着目すると、トレードのタイミングを計ることができます。

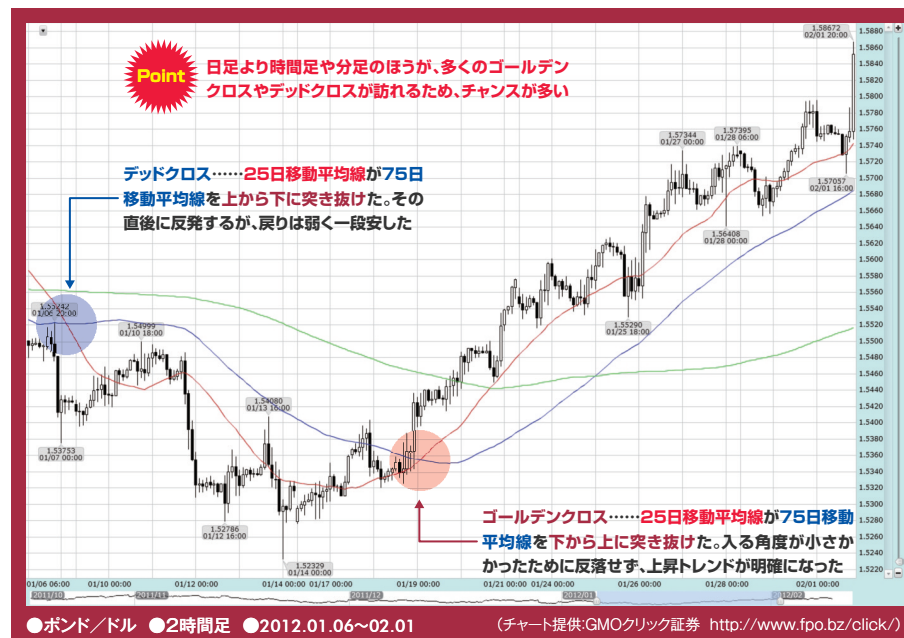
移動平均乖離率は、1本の移動平均線を軸にするシンプルな手法でした。この最大の特徴は、トレンドがはっきりしているかどうかに関係なく使えることです。反面、トレンドが変わったことを把握するのは苦手です。

そこで、2本の移動平均線を使ってみましょう。トレンドが明確になりやすい外国為替相場では、トレンドの転換をいかに察知するかが重要な課題です。トレンドが明確になったときに「しっかり稼ぐ」ことが、FXの醍醐味であり、継続的に利益をあげる秘訣でもあります。

▶▶ 短期×中期の移動平均線のクロスに着目する

2本の移動平均線を使う場合、一般的に短期×中期の移動平均線に着目します。そして、どこに着目するかというと、**2本の移動平均線がクロスして、位置関係が逆転するタイミングをトレンド転換**と見なします。

たとえば、25日移動平均線が下、75日移動平均線が上に位置しているとしましょう。そして、はっきりとした上昇相場になると、ローソク足が25



日移動平均線や75日移動平均線を上抜き、それに遅れて、**25日移動平均線が75日移動平均線を下から上に突き抜けます**。これを「**ゴールデンクロス (GC)**」といいます。

逆に、25日移動平均線が上、75日移動平均線が下に位置しているとき、下落相場になると、ローソク足が25日移動平均線や75日移動平均線を下抜き、それに遅れて、**25日移動平均線が75日移動平均線を上から下に突き抜けます**。これを「**デッドクロス (DC)**」といいます。2本の移動平均線がクロスしたことをトレンド転換のシグナルとして使うわけです。

GCやDCを使うときの注意点は、短期移動平均線の角度。下から上、上から下に突き抜ける角度が大きいくほど、クロスした直後に反転しやすい性質を持ちます。これは、移動平均乖離率がかなり大きくなっているからと考えられます。また、移動平均線はローソク足を後追いするため、一時的に目先の高値や安値をつかんでしまうことがあります。こうしたケースでは、一呼吸置くか、最低でも乖離率が縮小するまで待つと効果的です。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

017 中長期移動平均線の 向きに着目して精度を上げる

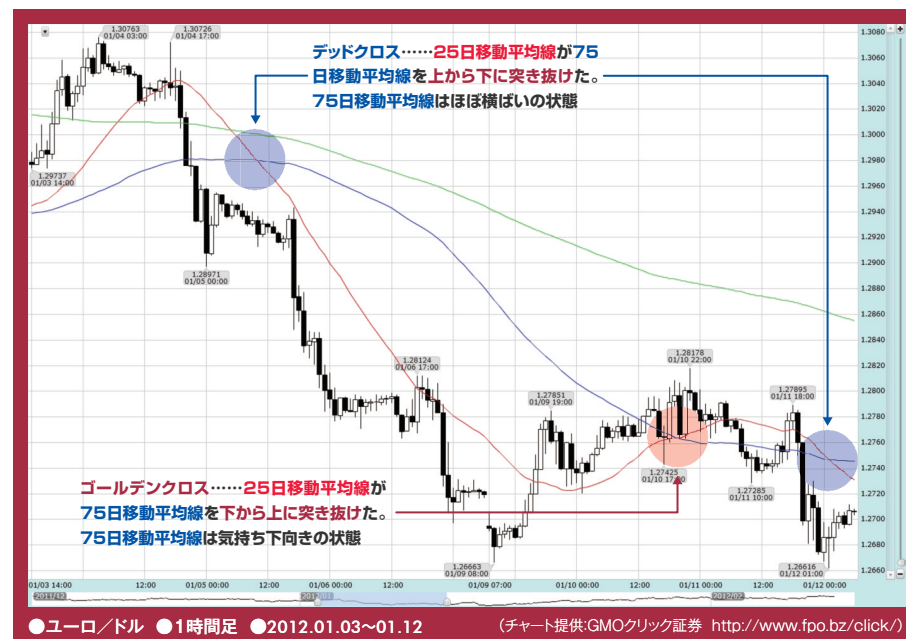
周期の異なる移動平均線は、それぞれに特徴があります。ゴールデンクロスやデッドクロスでは、短期移動平均線の角度に着目すると、想定外の損失を避けられます。また、中・長期移動平均線の「向き」に着目すると、その精度を上げることができます。

GCとDCは、トレンドの転換を察知し、トレードのタイミングを計る上で有効です。しかし、前項の最後で書いたように、多少アレンジして使わないと、その恩恵に浴することはできません。

そこで、もう少し精度を上げる方法はないのでしょうか。そのためには、2本の組み合わせのうち、中期や長期の移動平均線の向きに着目しましょう。25日×75日の移動平均線を使うときは、75日移動平均線の向きに注意を払います。75日移動平均線が上を向いているときは、中期的なトレンドは上昇です。しかし、DCによってトレンド転換の可能性が高まります。このときは、最低でも25日移動平均線までの反転上昇を待って売りポジションを取ると、含み損を抱えるリスクを限定することができます。

▶▶中・長期移動平均線の向きと相場の方向が同じなら高信頼性

ここではあえて、ちょっと難しい展開を示しました。何を言いたいかというと、中長期移動平均線の向きと相場の方向が重要なポイントになりま



す。DCをしたとき、中・長期移動平均線が下を向いていれば、そのDCは信頼できる可能性が高いというわけ。GCのときは向きが逆になります。ちょっと難しいかもしれませんが、まずクロスの基本を整理しましょう。

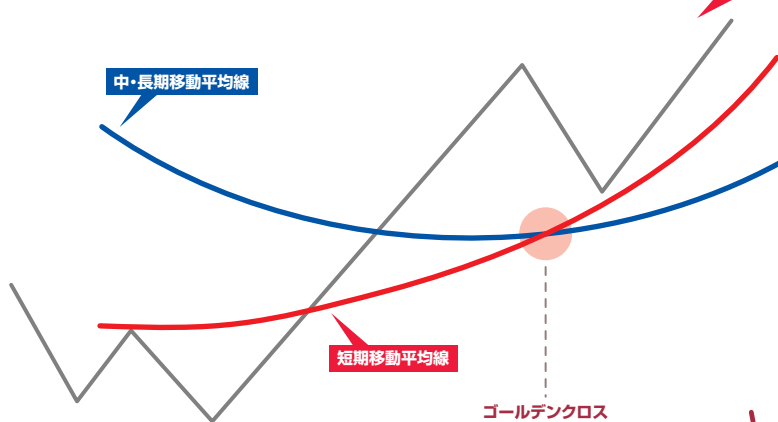
- ①中・長期移動平均線が上向きのGC……信頼性が高い
- ②中・長期移動平均線が下向きのGC……信頼性があまり高くない
- ③中・長期移動平均線が下向きのDC……信頼性が高い
- ④中・長期移動平均線が上向きのDC……信頼性があまり高くない

この4つのケースに、短期移動平均線の角度を確認することを付け加えると、トレードのタイミングを取るときの精度は格段に上がります。

すごく簡単に儲かりそうな気がしてきたのではないのでしょうか。ただし、注意していただきたいことがあります。頭の中で描いたイメージと実際のチャートでタイミングを計るのとでは、似て非なるもの。実践に移る前に多くのチャートを見て、このメカニズムを確認してください。相場に相対すると「欲」が邪魔をします。しっかり、トレーニングを積みましょう。

▶ 上昇転換の信頼性が「高い」ゴールデンクロス

実践的には中・長期移動平均線の向きは横ばい程度が好ましい

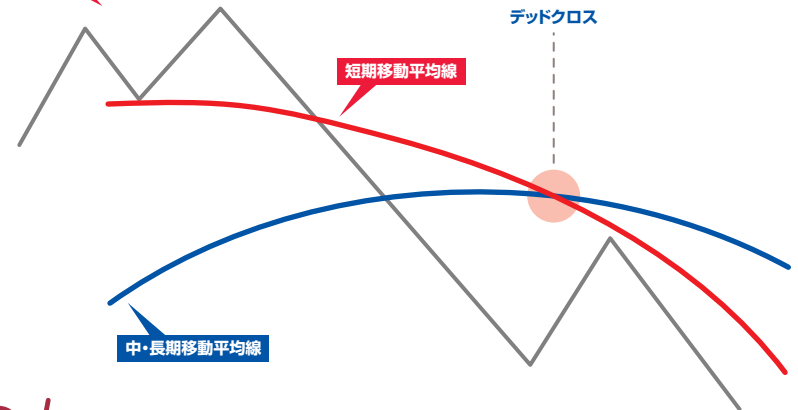


短期移動平均線の入る角度が大きいときは、反落を待ってからが安全



▶ 下落転換の信頼性が「高い」デッドクロス

実践的には中・長期移動平均線の向きは横ばい程度が好ましい

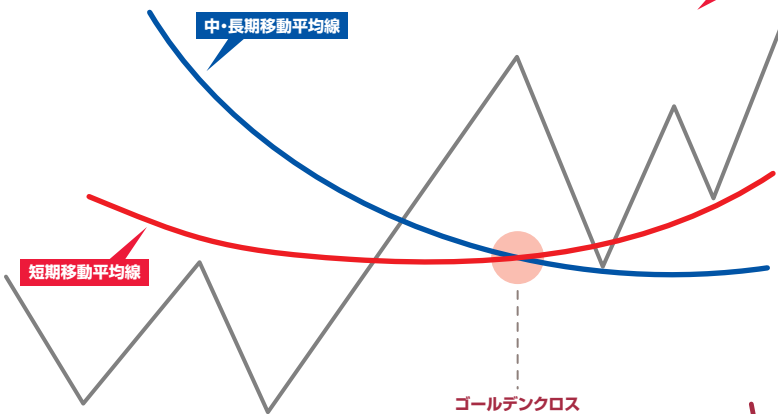


短期移動平均線の入る角度が大きいときは、反騰を待ってからが安全



▶ 上昇転換の信頼性が「あまり高くない」ゴールデンクロス

実践的には中・長期移動平均線が下向きのケースが圧倒的に多い

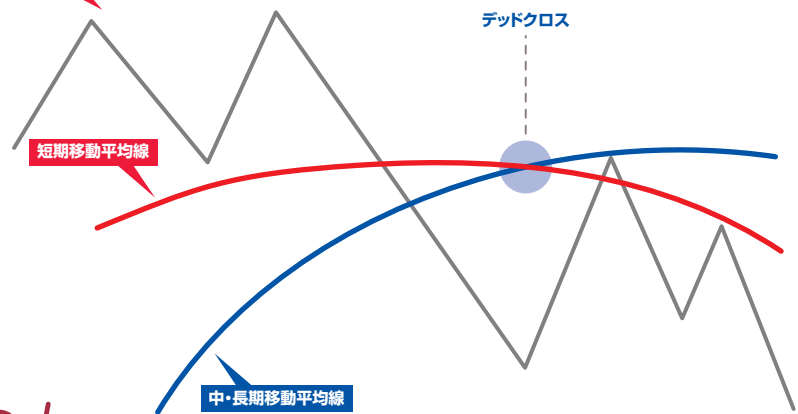


短期移動平均線の入る角度が大きいときは、中・長期移動平均線までの反落を待つ



▶ 下落転換の信頼性が「あまり高くない」デッドクロス

実践的には中・長期移動平均線が上向きのケースが圧倒的に多い



短期移動平均線の入る角度が大きいときは、中・長期移動平均線までの反騰を待つ



第7章 FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

018

見やすさが 個人投資家に人気のMACD

移動平均線を発展的に開発されたのがMACDです。移動平均ベースですからトレンド系ですが、相場の勢いを見ることもできる優れたもので、オシレーター系指標として扱われるときもあります。チャートの外に表示されるグラフが見やすく、個人投資家から絶大な人気を博しています。

移動平均は正確には「単純移動平均」、英語で「Moving Average」といいます。これに対して、直近にウェイトを置いて計算する「指数平滑移動平均」というものがあり、これを使ったのがMACD（通称、マックデー）。正式には「移動平均収束拡散法」という名前が付いています。まあ、2本の移動平均線を応用的に使うものと考えてください。

MACDの仕組みは小難しい計算式がありますが、ここでは割愛します。設定さえすれば、自動的に表示されるからです。また、グラフが見やすく使いやすいため個人投資家の間で人気です。

▶▶ 2本の移動平均線が収束・拡散する点に着目

一般的に12日間と26日間の指数平滑移動平均線の差（乖離）が「MACD」、9日間のMACDの指数平滑移動平均が「シグナルライン（SIG）」で、この2本がローソク足チャートとは別枠で表示されます。何か、すごく難しそうですが、使い方はいたってシンプルです。



MACDがSIGを下から上に突き抜けたときが買いシグナル、上から下に突き抜けたときが売りシグナル。たったこれだけです。

比較的短い移動平均線の乖離に着目しているだけに、トレンドの転換をいち早く知らせしてくれるのが最大のメリット。また、2本の線がクロスした後でトレンドが明確になると、MACDは効果を最大限に発揮します。ただし、横ばいトレンドに陥ると、MACDとSIGが頻繁にクロスしてしまい機能不全に陥ることもあります。これが最大の弱点です。とはいえ、これは何もMACDに限ったことではなく、移動平均線も、この後に紹介するオシレーター系のテクニカル指標も同様です。

ところで、MACDを別の角度でみると、おもしろいことに気がきます。たとえば、高値を更新しているにもかかわらず、MACDとSIGが緩やかに下落しているケースです。これは、すでに相場の勢いがなくなりつつあり、その後、大きな下落に見舞われることが多くあります。これをダイバージェンス（拡散）といって、相場の変化を先取りする方法として重宝します。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

019

買われすぎと売られすぎが 一目瞭然のストキャスティクス

一定値幅のレンジ相場になったとき、絶大な効果を発揮するのがオシレーター系指標です。オシレーター系指標を使うときには、買われすぎ、売られすぎに着目します。また、使い方次第では、相場が大きく崩れたり、底練りから上昇に転じるときを察知することもできます。

相場の性格は「方向性」と「勢い」に大別することができます。これまで解説してきたトレンド系テクニカル指標は、主に「方向性」に着目したものです。そして、「勢い」に着目したのが、ここで紹介するストキャスティクスを代表格としたオシレーター系テクニカル指標。ちなみに、前項で解説したMACDのダイバージェンスは逆張りに使えることから、オシレーター系の役割も果たす優れたものです。

▶▶買われすぎと売られすぎをトレードシグナルとして使う

オシレーター系のテクニカル指標は「買われすぎ」「売られすぎ」を判断基準に、その逆のポジションを取ることから、逆張りに適しているといわれます。中でもストキャスティクスは、MACDと同様、個人投資家に人気の指標です。「%K」と「%D」という2本の線が0（ゼロ）～100%のゾーンの中を行き来するというシンプルな仕組みで、相場の勢いが分かりやすいからです。ストキャスティクスは、**反応の速い「ファスト・スト**



キャスティクス」と反応の遅い「スローストキャスティクス」に分かれますが、FXではスローストキャスティクスを使うのが一般的です。

使い方を解説しましょう。まず、「%K」と「%D」の線が70～80%を上回ると買われすぎ、逆に30～20%を下回ると売られすぎと判断します。したがって、買われすぎのゾーンに入ったら新規売り、もしくは決済売りとし、売られすぎのゾーンに入ったら新規買い、もしくは決済買いとして、相場に対して逆のポジションを取るか、ポジションを解消するわけです。

精度を高めたいときは、たとえば、70～80%以上に達した後に、「%K」が「%D」を上から下に突き抜けたら新規売り、もしくは決済売りとします。一方、30～20%を下回ってから、「%K」が「%D」を下から上に突き抜けたら新規買い、もしくは決済買いとします。

言葉では難しそうに感じるかもしれませんが、上のチャートで示したように、グラフを見れば一目瞭然。スロー、ファストにかかわらず、ストキャスティクスは一定の値幅で動いたときこそ効果を発揮します。

第7章

FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

020

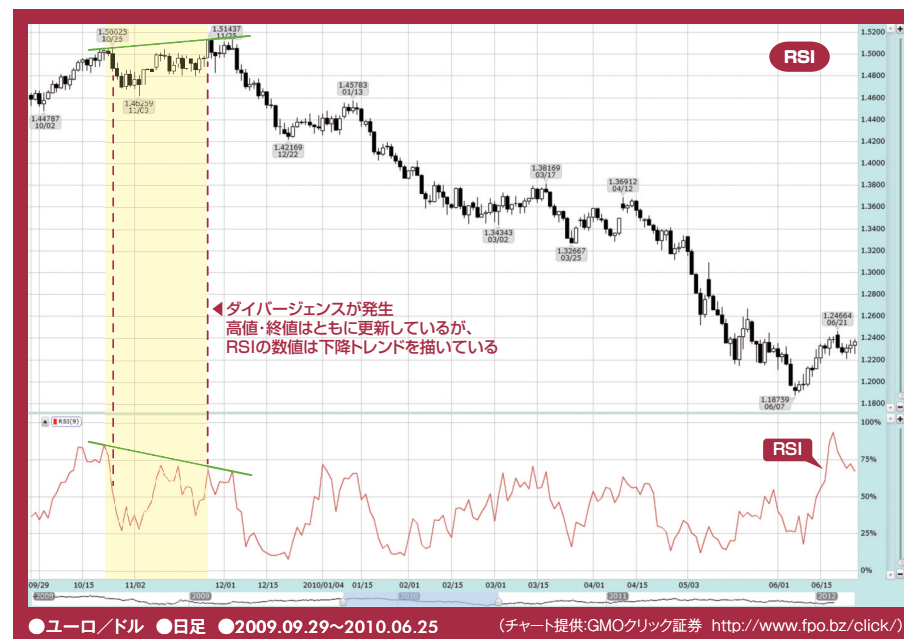
使いこなしが難しいRSIは
ダイバージェンスに注目する

シンプルなテクニカル指標は、分かりやすく見やすい反面、経験の多少によって使い方が大きく変わることがあります。つまり、シンプルな分、自由度が増すわけです。その代表格といえるRSIで最も使いやすい方法を紹介しますが、あなただけのオリジナルの使い方も探求してください。

最後に「RSI」というオシレーター系指標を紹介しましょう。RSIもストキャスティクスと同じように、買われすぎや売られすぎに着目します。仕組みは、一定期間で上昇と下落でどちらに勢いがあるかを、ある計算式で求めた数値を使います。数式アレルギーの方は、これだけでも身の毛がよだつかもかもしれませんね。

簡単に言えば、上昇するときと下落するときどちらが大きいかということです。グラフの見方は、ストキャスティクスと同様に**0（ゼロ）～100のゾーンの中で70～80を上回ると買われすぎ、逆に30～20を下回ると売られすぎと判断**します。ただし、RSIは線が1本しかないため、使いこなすには経験が必要ですし、トレンドがはっきりと出ている相場展開では、使い物にならないところが難点です。

また、短い期間のローソク足、たとえば、5分足や3分足では、短時間に一方通行の動きになると、RSIの線が上限の100まで振り切ったり、下限の0に張り付いたままだったりすることがある点には注意が必要です。



難点ばかりに見えるRSIをなぜ取り上げたのかというと、MACDで解説したダイバージェンスを見るのにはうってつけだからです。

▶▶ 波形のトレンドと実際の相場を比較する

RSIのダイバージェンスもグラフの波形に着目します。何しろ、線は1本だけですから、頻繁にクロスすることに紛らわされることなく、実際の相場とグラフの波形を比較するには適しています。

たとえば、RSIが最初は80まで到達していたのに、次の上昇では70までしか届かないとき、ここにトレンドラインを引きます。すると、トレンドラインは下向きなのに、ローソク足は相変わらず上方向へと動いているケースがあります。つまり、**実際の相場とRSIは逆行（ダイバージェンス）していること**になります。このときは、**相場が上昇しているにもかかわらず勢いが衰えていると判断**できます。下落相場への転換を見計らって新規売りを仕掛ければ、値幅取りも夢ではありません。

第7章 FXに欠かせない「チャート分析」を極めよう

021

チャート分析を使って トレードの成果を高めるには

「一芸に秀でる者は多芸に通ず」という言葉があります。これは、トレードやチャート分析のスキルを身に付けるときにも当てはまります。ちょっと使ってダメだったら今度はこっち。これでは、いつまで経っても使いこなすことはできません。これと決めたなら、とことん付き合ってください。

ここまで、チャート分析について解説してきました。まだまだ数多くのテクニカル指標やチャート分析の手法があります。入門したての方にとっては、早く実践で使ってみたいという期待感と同時に、今まで知らなかった知識を詰め込みすぎて「お腹いっぱい！」と感じているかもしれませんね。この章の最後に、チャート分析を使ってトレードの成果を高めるための心構えという姿勢について解説しておきたいと思います。ある意味で、これが最も重要かもしれません。

▶▶つまみ食いは厳禁。少なくとも良いから深く身に付ける

数あるテクニカル指標には、それを開発した人たちの思いが込められています。移動平均線では相場の急変動に対して反応が遅いため、それを解消したいとストキャスティクスやRSIを開発したのでしょう。

そのため、それぞれのテクニカル指標には長所と短所が必ず混在しています。ということは、**いくつものテクニカル指標を無造作に組み合わせ**

「一芸に秀でるものは多芸に通ず」というように、数少ない手法でも深く身に付けることがとても大切

将来は…
「勝ち組＝トレードを継続」の可能性

物事には必ず「一長一短」がある！
「ちょっとやってダメだから別の手法を試す」では、スキルアップは望めない

「あれもこれも」といいとご取りをしようとしても真逆のシグナルが出てしまえばお手上げ

将来は…
「負け組＝トレードを断念」の可能性

自分自身は、あらゆるテクニカル分析の手法を駆使して、相場を操っている気分になっているが……実のところ「あてずっぽう」でトレードしているに過ぎない

あなたはどちらのタイプ？

深く身に付けることの大切さ

- ◎決めた手法を本当に信頼する
- ◎短所を理解しているため、負けを認められる
- ◎本当の意味で「勘」が働く
- ◎勝ちパターンが見極められる

しまうと、真逆のトレードシグナルを発してしまうケースがあります。せっかく、チャート分析の手法を身に付けても、最終的な判断は投資家の「勘」だけに頼ってしまうのでは意味がありません。そのため、しっかりと軸を決める、つまり優先順位を決め、それ以外は補足的に使うといった「チャート分析の思想」が求められます。

もう1つ重要なことは、いくつものテクニカル指標やチャート分析の手法を組み合わせるといことは、それぞれに対して信頼を置いていない証拠であり、投資家自身の自信のなさの表れでもあります。

何事も一長一短ですから、良いところ取りをしようとするれば、その副作用は計りしれません。そのため、ここでも軸を決めて、**数少ない手法でもそれを深く身に付けることを目指すべき**なのです。

投資家の心理は相場に相対すると不安定になり、自分の判断が正しいことを証明しようとしします。これは「自分に都合の良い判断をする」ためだけの行動に過ぎません。大切なのは、「**選択と集中**」、そして「**信頼**」です。

・コラム——ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール



経済のグローバル化と 外国為替相場の密接な関係

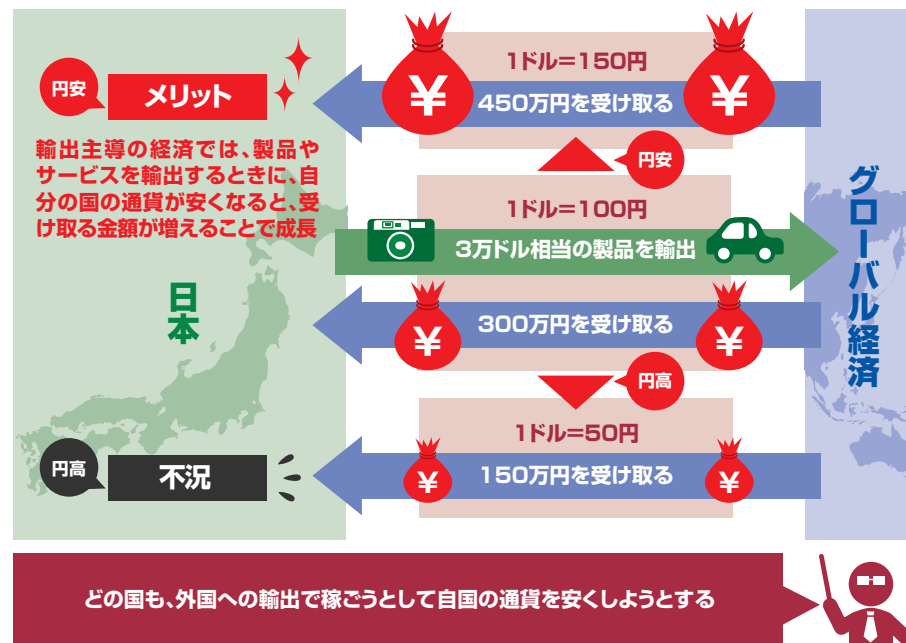
世界の経済はボーダーレスとなり、グローバル化が加速度的に進んでいます。そして、外国為替市場の存在は、ますます重要になっています。輸出で外貨を稼いで経済成長を図っても、資源エネルギーや農産物を自給自足できない国は、為替レートが安くなっても高くなっても問題です。

どこかの国の通貨が売られれば、相手方の通貨が買われるのが外国為替相場。2つの国の状況を比較して、どちらがより強いのか弱いのかを見極めなければなりません。その判断材料として経済と金利の状況があります。

経済のグローバル化が進展すれば、先進国も新興国も輸出をして外国にモノやサービスを売ろうとします。しかし、国内の消費が盛んな国は多くのモノを輸入しますから、それ以上に輸出をして外貨を稼ごうとします。

第4章のコラムで、国を家族に見立てた例を紹介しました。ある家族が貯金を殖やそうとすれば、外からお金を稼いでこなければなりません。逆に、すでに多くの貯金を持っていても、高価な家や自動車、家電製品、宝飾品などを買い漁り、毎日贅沢な外食をしていれば、そのうちお金は底をつきます。つまり、国が大きくなる＝経済が成長するためには、外国にモノやサービスを買ってもらう＝輸出を増やす必要があるわけです。

しかし、**自分の国の通貨の為替レートが上がれば、同じモノやサービスを輸出しても、手取りは減る**ことになります。



たとえば、1ドルが100円の時300万円の自動車をアメリカに売れば、3万ドル＝300万円を受け取ります。ところが、1ドルが50円になれば、手取りは150万円にしかありません。逆に1ドルが150円になれば、450万円を受け取ることができますから、50円の円安になった分、150万円は丸儲け。つまり、自分の国の為替レートが安くなれば、企業の利益と国民の収入は増え、経済は好調になります。これが通貨安のメリットです。

これだけなら円安は大歓迎ですが、果たしてそうでしょうか。**エネルギー資源の乏しい日本は急激な円安になると、原材料高になり、何を作るにもコスト高の要因**になりますし、電気代やガソリン代が上がり、出費も増えてしまいます。さらに、資源や小麦などの農産物の価格が上昇すれば、二重の打撃です。輸出で外貨を稼いでも、国内のコストが上がれば、国全体では相殺されてしまい、円安のメリットはなくなります。

為替レートと資源価格、国内物価、そして輸出入の関係は、常に目を光らせておく必要があります。

・コラム——ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール



通貨安は メリットばかりではない

経済が成熟した先進国は自国内での設備投資や消費だけでは成長が望めず、輸出依存の体質になるため、自国通貨安が欠かせません。反面、新興国が近代化するときには大量消費される資源・エネルギーや食糧の価格が上昇し、通貨安になると輸入物価がさらに上昇する恐れがあります。

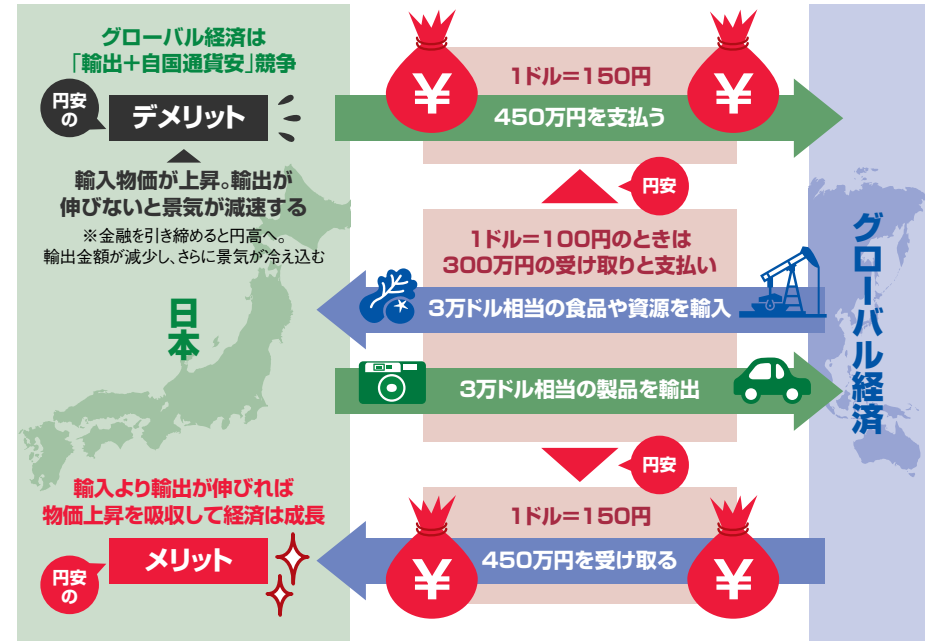
先進国が景気回復の手段として、政策金利を低く抑え、さらに量的緩和も実施することで、自国通貨が安くなるように仕向けているわけですが、これはメリットばかりではありません。

外国との貿易は、輸出か輸入のどちらか一方ということはありません。輸入が多い国の通貨が安くなると、その反動は大きなものになることがあります。

たとえば、多くの国が輸入に頼っている資源です。通貨が安くなれば、外国からモノを買うときにはコストが上がることになります。前項では300万円の自動車を例にして解説しましたが、それと正反対です。つまり、通貨安で資源の輸入価格が上昇し、経済全般のコストも上がります。

▶▶ 景気の足を引っ張る恐れもある自国通貨安

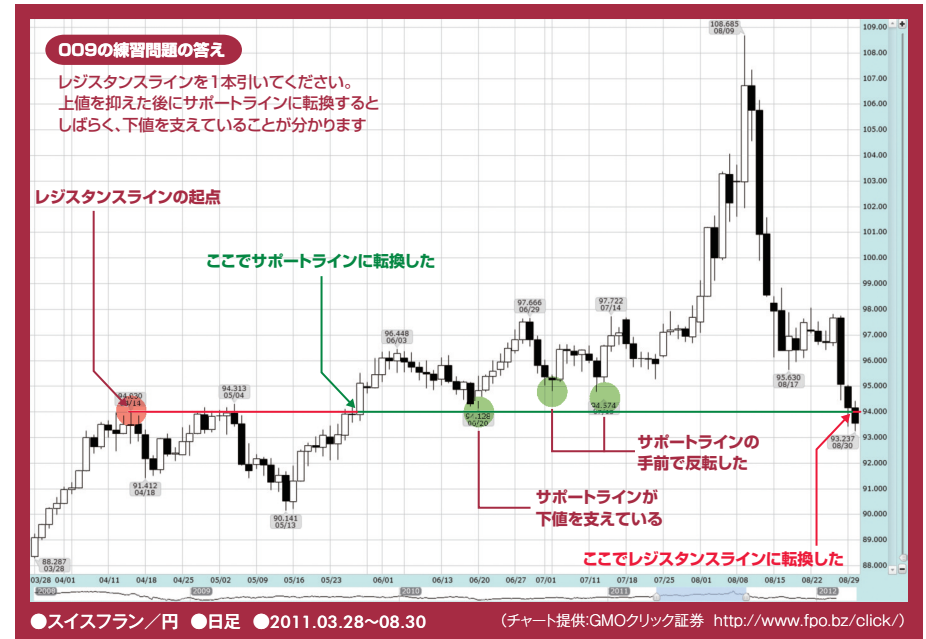
コストが上がり、これまで通りの利益を確保するためには、値上げをする必要があります。物価が上昇するよりも収入が増えれば、消費が落ち込



むことはありませんが、それが逆転すると、景気は減速します。インフレが起きれば景気は過熱し、金融をいっそう引き締めなくてはならなくなり、政府や中央銀行の経済に対する舵取りは難しくなります。このように、通貨安にはメリットとデメリットがあります。

リーマン・ショック以降は、先進各国の景気を移す鏡として失業率や雇用者数の統計が注目されてきました。ところが最近、特に日本では**輸出と輸入の差がどれだけあるかをみる貿易収支が再び注目**されはじめています。しかし、これは目新しいものではなく、日本がバブル経済に躍っていた時期に何かと取り上げられた経済指標です。**その時々の世界の経済状況によって、注目されるテーマが異なる**ということは覚えておいてください。

話を戻すと、自分の国のモノばかり売っている = 輸出が輸入を大幅に上回っていると、相手国からもっと買ってくれと非難されます。しかも、景気が良いなら通貨は高くなるはずなのに、それを意図的に抑えていることも非難の的になります。難しそうな経済の話も、結構、俗っぽいものです。



第8章

「通貨ペアの特徴」を
理解して取引の精度を
高めよう

- 001 通貨ペアの特徴を知ろう[1]—ドルストレートとクロス円 ... 112
- 002 通貨ペアの特徴を知ろう[2]—ドル/円 113
- 003 通貨ペアの特徴を知ろう[3]—ユーロ/ドル 114
- 004 通貨ペアの特徴を知ろう[4]—ポンド/円 115
- 005 通貨ペアの特徴を知ろう[5]—豪ドル/円 116
- 006 リスク回避とリスク選好の奇っ怪な関係 117
- 007 値動きやチャートの相性から主戦通貨ペアを絞り込もう ... 118

コラム ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール

- 世界的な金融緩和と新興国の急成長の密接な関係 ----- 119
- 新興国の金融引き締めは先進国にとってマイナス ----- 120

第8章

「通貨ペアの特徴」を理解して取引の精度を高めよう

001

通貨ペアの特徴を知ろう【1】 ——ドルストレートとクロス円

第1章では通貨ペアについて大雑把に解説しましたが、ここではもう少し掘り下げてみましょう。中学の社会科、高校の地理の授業ではありませんが、国ごとの特徴や二国間の経済の関係などについて理解しておく、相場予測に一役買います。第8章では、この点にスポットを当てていきます。

日本人がトレードするときには、やはり円が絡む通貨ペアを中心に置くことが圧倒的に多いのではないのでしょうか。中には、FXを始めるまで、通貨ペアは皆、同じ仕組みで取引されていると考えていた方も多はずです。ところが、実際にFXの勉強を始めると、「クロス円」という聞き慣れない言葉を耳にします。円が絡む通貨ペアのうち、クロス円でないのは「ドル/円」だけです。

ここまでは、初めての方でも理解していただきたいのですが、これ以降は、ちょっと複雑怪奇な話になります。したがって、「ここまででもかなり一杯一杯だから……」という方は、トレードに慣れて、いろいろなことが整理できた段階で、もう一度、この第8章に戻っててください。

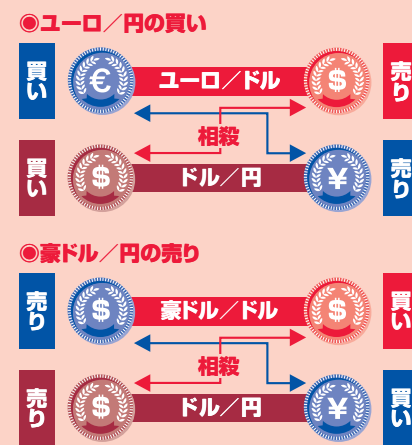
▶▶クロス円はドルストレートの「合成通貨ペア」

ドルストレートとは、ドルが絡む通貨ペアのことで、ドル/円のほか、ユーロ/ドルやポンド/ドル、豪ドル/ドル、ドル/スイスフラン、ド

▶主なドルストレート



▶クロス円の仕組み



クロス円は、ドル/円と他のドルストレートとの合成通貨ペアだから
両方の相場の影響を受ける



ル/カナダドルといった具合です。

そして、これらのドルストレートを組み合わせることで、クロス円ができあがります。つまり、クロス円はドルストレートの合成通貨ペアというわけです。たとえば、ユーロ/円は「ドル/円」と「ユーロ/ドル」を合成することでできあがります。仕組みは上の図のように、ユーロ/円を買うときには、舞台裏で「ドル/円を買って、ユーロ/ドルも買う」という取引が行われています。

そして、ユーロ/ドルもドル/円も売られると、ユーロ/円はさらに大きく下落します。クロス円の相場は、2つの通貨ペアの影響を強く受けるだけでなく、ユーロ/円を取引したい輸出入をする実需筋や個人投資家の影響も受けるからです。これが、クロス円特有の「上昇はゆるゆる、下落は急」の正体でもあります。また、あとで「リスク回避の円買い」という不思議な言葉を目にすることになりますが、これも「合成通貨ペア」の仕組みを知っていればこそ、理解できるというものです。

第8章

「通貨ペアの特徴」を理解して取引の精度を高めよう

002

通貨ペアの特徴を知ろう(2)
——ドル／円

日本人投資家の多くは、ドル／円からトレードを始めます。初心者の頃は大きな値動きが怖いだけでなく、一番馴染みの深い通貨ペアだからです。しかし、本当に利益を手にして大きなお金を動かすとき、価格変動リスクを最小限に抑えるために、やっぱりドル／円をトレードします。

ほとんどの方が最初に取引するのは、多くの場合、ドル／円でしょう。日本人が外国為替取引をするときに、最も馴染み深く、値動きが比較的小となしい通貨ペアだからです。世界の基軸通貨であるドルと日本の通貨である円ですから、日本にいる以上、ドル／円に関連する情報が最も多く手に入ることも、その理由の1つといえるでしょう。

また、初心者の方が意識しているかしていないかは別にして、ドル／円は、ユーロ／ドルに次ぎ、世界で2番目の取引量ということも通貨ペア選びで重要な動機付けになります。

▶▶安全なトレードの根拠となる「高い流動性」

取引量が非常に多いということは、単に金額だけでなく、取引している参加者（市場参加者）も非常に多いことを意味します。取引量も市場参加者も多ければ、それだけ「取引の連続性が高い」、つまり「流動性が高い」ということになります。

▶ドル／円

通貨ペアの主な特徴

ユーロ／ドルに次いで流動性が高く、安定的な値動きが期待できる。有事には、ドルが買われることもある

入門したての投資家が最初に手がける通貨ペアだが、大きな資金を動かす投資家も好む

政府・日銀が為替介入をするときの指標となる通貨ペア。値幅狙いならクロス円がお薦め

ユーロ／ドルとは対称的な動きをすることが多い。ただし、世界的にリスクを取れる環境になれば、日本の低金利を背景にキャリートレードの復活も

個別通貨の特徴



世界最大のGDPと通貨流通量を誇るが、恒常的な財政赤字が問題。リーマン・ショック以降、雇用と不動産市況の回復が遅く、デフレ化の懸念も

基軸通貨

量的緩和によるドルのばらまきはドル売り要因に。量的緩和が続けば、理解不能の円高に直面。金相場とは逆相関の関係



少子・高齢化による社会保障費の増大で、世界一の債務を抱える。国債の利回り上昇は死活問題。財政赤字の垂れ流しは、将来の猛烈な円売りにつながる恐れ

世界最大の財政赤字国

超円高が定着すれば、日本の輸出産業は海外へ逃避。輸出企業の資金回帰が減少して、円高圧力が緩和する可能性。日本の貿易収支には今後いっそう注意

流動性が高ければ高いほど、買いたいときや売りたいときに取引できる＝約定できることが最大のメリットです。しかも、成行で注文しても大きな価格のズレが起きないことも挙げられます。流動性が低ければ低いほど、価格の連続性が乏しくなります。

たとえば、80.00円のときに成行注文のボタンを押せば、その値段で約定することが非常に重要です。成行注文を出したのに、10銭も20銭も違うレートで約定してしまえば、安心して取引することはできません。

その反面、流動性が高いということは、為替レートが大きく動かないため、「面白味に欠ける」という投資家もいます。トレードに醍醐味を求めるのか、それとも安全性と約定の安定性を求めるのかは投資家次第です。しかし、初心者のときは、流動性の高い通貨ペアで慣れてから、徐々に流動性の大きい通貨ペアで取引することをお薦めします。したがって、最初はこの「ドル／円」か、次項で解説する「ユーロ／ドル」から始めるのが最適です。長く続けるためにも、この点をしっかり守ってくださいね。

第8章

「通貨ペアの特徴」を理解して取引の精度を高めよう

003

通貨ペアの特徴を知ろう【3】
——ユーロ／ドル

世界最大の取引量を誇るユーロ／ドルは、スムーズな値動きが特徴です。しかし、いまや欧州の信用不安が拡大し、一方の米ドルも基軸通貨の信任が揺らぐほど紙幣を増刷しています。そのため、欧米の財政問題が解決しない限り、大きなうねりを描き続けるかもしれません。

世界三大通貨といえば、ドル、ユーロ、円。そのうち、ユーロ／ドルは世界最大の取引量を誇る通貨ペアです。取引量が多いドル／円といえども、ユーロ／ドルの足下にも及びません。それだけに、他の通貨ペアに比べて値動きが圧倒的に滑らかです。

リーマン・ショック以降、主要先進国の景気は思うように回復せず、各国の政府や中央銀行は、その対応に苦しんでいます。しかも、ユーロ圏ではギリシャ危機に端を発した債務問題が深刻化し、ポルトガルやスペイン、イタリアにまで波及。その結果、世界最大の取引量を誇るユーロ／ドルといえども、荒っぽい値動きをすることが多くなってきました。

▶▶最近では初心者でもユーロ／ドルからトレードを始める人も

流動性が高い上に、一定の値動きが期待できるとなれば、トレードする通貨ペアとしての魅力は高まります。そのため、比較的大きな資金を動かす投資家だけでなく、最近では初心者でもユーロ／ドルから始める方が増え

▶ユーロ／ドル

通貨ペアの主な特徴

世界最大の流通量を誇る通貨ペア。値動きの安定性は一番のはずも、欧州信用不安の深刻化で安定性に陰りも

FXはユーロ／ドルに始まりユーロ／ドルに終わるといわれるほどで、特にテクニカル分析主導のトレードには好相性

ユーロ圏と米国はともに、輸出の増加を期待して通貨安政策を推進。信用不安はユーロ安政策の一環という専門家も

ユーロ／円をトレードするときには必ずチェックしなければならない通貨ペア

個別通貨の特徴



欧州信用不安によるドル高は、米国経済の回復を遅らせる可能性。過剰流動性相場では、ユーロ／ドル上昇が基本のため、闇雲にドル買いをするのは自重

基軸通貨

意外にも、ドル／円ほど米国の雇用統計の影響を受けない。米国はユーロ圏からの輸入が非常に少ないことも影響か



中国経済との関係が密接なため、中国の金融政策によってユーロが売られたり買われたりすることも記憶しておこう

慢性的な信用不安

スイス国立銀行(中央銀行)はスイスフランが1.2ユーロを割り込めば無制限に介入することを決定。スイスフラン売りが発動されれば、ユーロ／ドルが急騰する可能性は充分

ているようです。ちなみに、相場の変動が大きくなることを「ボラティリティが上がる(高くなる)」といいます。

チャートを見ると、ボラティリティが高い相場は「儲かりそう」と思えますが、実際にその中でトレードすると、想定外の値動きによりストップロスオーダーにかかったり、めまぐるしく動く相場を後追いで、気付かないうちに逆張りになって損失が膨らんでしまうケースがあります。

ユーロ／ドルは群を抜いた流動性だけに、欧州の信用不安が収束に向かえば、大きなボラティリティも収まるでしょう。そういう意味では、平時でも有事でも手がけられる万能な通貨ペアです。

また、ドルストレートであるだけに値動きに「ねじれ」がありません。同じユーロでも、ユーロ／円はユーロ／ドルとドル／円の合成通貨ペアですから、どちらかの影響を強く受けるとレンジ相場に陥ってしまう恐れがあります。この点を踏まえると、**チャート分析を軸にトレードする投資家は、ユーロ／ドルなどの主要なドルストレートを主戦場とすべき**でしょう。

第8章

「通貨ペアの特徴」を理解して取引の精度を高めよう

004

通貨ペアの特徴を知ろう(4)
——ポンド／円

政府・日銀が為替介入を実施すると、最も値を飛ばす対円通貨ペアがポンド／円。価格水準がクロス円の中で最も高いだけに、値幅取りを狙うなら、この通貨ペアにおいて他にありません。ということは、下がるときも値幅の面では最も大きく動きます。何事も一長一短です。

100年に一度の経済危機といわれたリーマン・ショックの引き金となったサブプライムローン問題が顕在化するまで、世界の外国為替市場は中国やインド、ブラジルの急成長を背景に、ユーロやポンド、豪ドルがドルや円に対して猛烈に買われました。先進主要国の経済が好調で政策金利が何度も引き上げられ、日本との金利差はかつてないほど拡大したからです。主要なクロス円は上昇トレンドが明確になり、買えば上がる、同時に大きなスワップも手に入るとして、金利差の大きかったポンド／円や豪ドル／円は個人投資家の間で人気になりました。

▶▶高ボラティリティは諸刃の剣

ポンド／円は、クロス円の中で最も為替レートが高く、通常でも変動幅が大きいのが特徴です。そのため個人投資家は、ポンド／円を主力通貨ペアとして好んで取引していました。

投資家は、**通貨ペアを選ぶときの条件として「値幅」に関心を寄せます。**

▶ポンド／円

通貨ペアの主な特徴

主要クロス円の中で、最も高い価格水準を維持。大きな変動幅を期待するなら、ポンド／円において他にない

変動幅が大きいということは、安定性に欠ける面もあり、難易度は高め。どちらかといえば、経験豊富なトレーダー向き

欧州通貨でありながら、ユーロ／円とは異なる動きをすることも。ユーロ／ポンドの動きにも影響を受ける

政府・日銀の為替介入があるときは最も値を飛ばす通貨ペア。介入前にうまく仕込めれば、濡れ手に粟

個別通貨の特徴



元・基軸通貨。外国為替の取引量はロンドン時間が世界最大だが、核になる産業が乏しく、金融街シティを除けば、経済的には特徴がなくなりつつある

元・基軸通貨

リーマン・ショック前までは高金利通貨として注目された。欧州連合(EU)の一角を占めるが、ユーロ圏ではない

米国と同様、イングランド銀行が量的緩和をしている間は売られやすい。緩和量を上積みすれば、下落の可能性も

日本のデイトレーダーの間では「殺人通貨ペア」の異名で恐れられたことも

※「円の特徴」は、ドル／円を参照してください



どれくらいの割合で儲かったかではなく、どれだけの値幅を稼いだかが重要というわけです。たとえば、ドル／円が80.00円、ポンド／円が120.00円するとき、どちらも1%の利益を獲得したとすると、ドル／円は0.8円、ポンド／円は1.2円となり、ポンド／円に「お得感」があります。

しかも、ドル／円に比べて取引量が少ない(流動性が低い)ため、相場のアップダウンは大きくなります。相場は上がり続けるか、下がり続けるか、もしくは比較的大きな値幅で上下動を繰り返すことがないと儲けることはできません。ポンド／円は、大きな上下動を交えながらトレンドが出る性格を持っていることも、FX投資家の心をつかんだのでしょう。

しかし、トレンドが出ても、大きな変動を伴う展開は諸刃の剣。かなりの相場巧者でも儲けるのに一苦労するくらいです。一時、腕利きのデイトレーダーたちから「殺人通貨ペア」といわれたことも頷けます。**高ボラティリティの通貨ペアは大きな利益をもたらしてくれる反面、ストップロスオーダーをしっかり管理しないと、その反対もあるというわけです。**

第8章

「通貨ペアの特徴」を理解して取引の精度を高めよう

005

通貨ペアの特徴を知ろう【5】
——豪ドル／円

南半球にあるオーストラリアは、先進国とはいえ、決して経済規模の大きな国ではありません。ところが、農産物や天然資源に恵まれ、中国を中心にした新興国との貿易が盛んなだけに経済は好調。そして、日本の投資家が最も好んでトレードする代表的な通貨ペアが豪ドル／円です。

日本の個人投資家に最も人気のあるのが豪ドル／円。大阪証券取引所が運営する大証FXでは、2011年に豪ドル／円の取引高がドル／円のそれを上回りました。これには、いくつかの理由が考えられます。

日豪の金利差と、それに伴ってチャート形状が比較的上昇トレンドを描きやすい点だったのでしょう。為替レートを決定づける根拠の1つは金利差。個人投資家がFXを始めるときには必ず、金利差を徹底的に印象づけられます。オーストラリアの政策金利は日欧米各国と比べて、ほぼ継続的に高い水準にあり、分かりやすいということでしょう。

▶▶リーマン・ショック後に、いち早く立ち直った豪州経済

2008年のリーマン・ショックは、投資をしていなかった人にとっても衝撃的な出来事でした。世界的な金融混乱はオーストラリアにも波及し、豪ドル／円はリーマン・ショック前の高値から半値に近い水準まで売り込まれました。しかし、中国との貿易の割合が高く、原油は産出していなくて

▶豪ドル／円

通貨ペアの主な特徴

日本の個人投資家が最も好む通貨ペア。一時は、ボーナスが出る時期に上昇するという神話さえ生まれたこともある

変動幅はポンド／円に次いで大きく、値幅狙いや、デイトレードをする投資家に好相性

政策金利は先進国の中で高めの水準を維持しているため、下落しても修復力が高いケースが多い

過剰流動性による資源高が起されれば、いの一歩に買われる通貨ペア。ドル／円の影響も受けやすいため、テクニカル主導なら豪ドル／ドルがおすすめ

個別通貨の特徴



鉱物資源が豊富。特にウランや金の産出量は世界屈指。資源需要が高まると経済が活性化しやすい。米国に財政不安が起されれば、金価格が上昇するため、豪ドルに注目したい。産油国と勘違いする投資家も多いが、原油はそれほど出ない

資源国通貨

中国との関係が密接なため、中国の経済が失速するとダメージは大きい。対日貿易も盛んで、日本は輸出相手国で3本の指に入る

証拠金を有効利用したいときは
NZドル／円の選択も一考。ただし
まったく同じ動きにならないことには注意

※「円の特徴」は、ドル／円を参照してください



も、鉱物資源や穀物に恵まれるオーストラリアは、中国経済の巻き返しもあって、先進主要国の中ではいち早く景気回復の軌道に乗りました。

その結果、先進各国に先駆けて政策金利を複数回引き上げ、オーストラリアと日米欧各国の金利差は拡大していきました。

リーマン・ショック後は、ギリシャを中心にした欧州で財政懸念が深刻化。それを市場が嫌う状態になると豪ドルも急落することがありました。しかし、外国為替相場を決定づける金利差がある以上、相場の回復も早く、急落しても徐々に右肩上がりのチャートを形成しました。**右肩上がりのチャートは個人投資家にとって分かりやすいものです。「上がる＝買い」という習慣が染みついているからなのかもしれません。**

また、巨額の財政赤字と世界最大規模の借金を抱える日本の円が買われるドル／円相場より、景気が悪く超低金利の国の通貨が売られ、景気が良くて金利の高い通貨が買われるという構図は分かりやすいと思います。なお、NZドル／円も似たような動きをすると考えて良いでしょう。

第8章

「通貨ペアの特徴」を理解して取引の精度を高めよう

006

リスク回避とリスク選好の 奇っ怪な関係

不景気で借金大国の日本の円がなぜ買われるのか？ FXをしていなければ理解できなかったかもしれませんね。外国為替は通貨ペアで取引されますから、一方の通貨を持ちたくなければ、もう一方が消去法的に買われます。この背景にあるのが、リスクを取れるか取れないか。難しいですね！

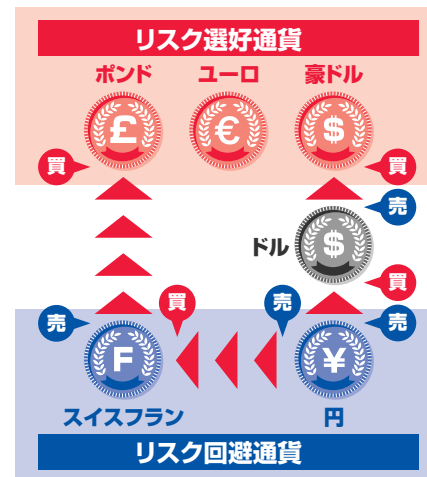
世界の金融市場が悪化して、市場参加者がリスクを回避したいとき、円とスイスフランが買われることがあります。これを「**リスク回避の円買い**（スイスフラン買い）」といい、このような状況を「**リスクオフ＝リスク回避**」、**リスクが取れる状況を「リスクオン＝リスク選好**」といいます。

市場環境がリスクオフになって、スイスフランや円が買われるということは、リスクオンのときは、対円、対スイスフランの通貨ペアの相手が買われることとなります。つまり、リスクオンで買われるのは、ユーロやポンド、豪ドルというわけです。

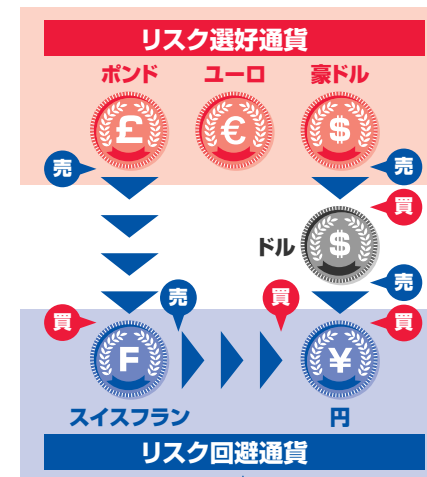
▶▶通貨ペアとリスクのオン・オフの関係を覚えよう

この仕組みをもう少し詳しく説明しましょう。たとえば、ユーロ／ドルとユーロ／スイスフラン、ドル／スイスフランがあったとしましょう。リスクオンの状態では、どの通貨ペアも上昇します。ところが、リスクオフになったときは当然、すべてが下落します。グローバルマネーが逃げる先

▶リスク選好(オン)の流れ



▶リスク回避(オフ)の流れ



世界的な金融危機や信用不安が起きると、リスク選好通貨を持ちたくないから、結果的に円が買われてしまうことが多い

を模索するような市場環境では、それが顕著です。

ここで不思議なのは、リスクオフのときにユーロ／ドルではドルが買われるということでしょう。ドルは世界の基軸通貨で、ドルを発行する米国の国債は最も安全な投資先（リスク回避先）とされているため、ユーロを売ってドルを買った資金は米国債に向かいます。未来永劫、このメカニズムというわけではありませんが、少なくとも米国債の格付けが高水準を維持しているかぎりは続くでしょう。事実、戦後初めて、米国債の格付けが引き下げられたあとも、米国債の価格は上昇し、金利は低下しました。

これにドル／円を加えてみましょう。世界最大の取引量を誇るユーロ／ドルではドルが買われて、その一部が米国債に向かうとしても、ドルを持ちすぎることとなります。これを解消するためにドルを売って円を買うという動きが活発化します。そのため、リスク回避先の通貨である円やスイスフランは極度の通貨高に悩まされることとなります。防衛策としてスイス国立銀行は、対ユーロのレートに下限を設定して歯止めをかけました。

第8章

「通貨ペアの特徴」を理解して取引の精度を高めよう

007

値動きやチャートの相性から
主戦通貨ペアを絞り込もう

人には得手不得手が必ずあります。文章を書くのが得意な人もいれば、話をするのが得意だという人もいます。FXも同じです。変動が大きい通貨ペアが得意な人もいれば、小刻みに動く通貨ペアなら儲けられるという人もいます。相性の良い通貨ペアを早く見つけることも、勝利への近道です。

通貨ペアには「癖」があります。これはチャートを見て感じることもあれば、他の通貨ペアと比較して感じることもあります。また、すでに説明したように、流動性から来る変動幅やトレンドなども、そうです。

一方、投資家と通貨ペアの間にも相性があります。トレードに慣れてきたら、いろいろな通貨ペアを試すのは勉強のうちですが、経験を積んでいく過程で、主戦となる通貨ペアを絞り込んでいくことも重要です。

「癖」と「相性」がある以上、あれやこれやとつまみ食いをするより、一定の通貨ペアに固定したほうが、先々、圧倒的に有利だからです。

▶▶通貨ペアごとに戦績を確認する

ボラティリティが高い通貨ペアが性に合っている投資家がいれば、変動が小さくても小刻みに利益を積み重ねるのが得意な投資家もいます。また、出入りの激しい＝大勝ちしたり大負けしたりするのを繰り返すのが好きな投資家もいます。どれが良くて、どれが悪いというわけではありません。

通貨ペア別
成績表

最初は感覚で選んでいたけど
相性の良い通貨ペアにしたら成績がアップ!!!



様々なポイントから、好相性の通貨ペアを見つけよう



- 変動幅の大小
- 戦績の良い通貨ペア
- ドルストレートvsクロス円
- リスク選好通貨vsリスク回避通貨
- ファンダメンタルズ主導vsテクニカル主導
- 価格水準の高低
- 買い主導vs売り主導

「癖」や「相性」を見極め、通貨ペアを絞り込んで固定することが、
安定的な成績を上げるのに役立つ



相場はある種、結果オーライの世界ですから……。

しかし、数多くのトレード経験を積み重ねていくと、通貨ペアとの相性が見えてくるようになってきます。そういうとき、できるだけ感覚ではなく、数値として確認することが重要です。

ユーロ／ドルやユーロ／円では圧倒的な戦績を誇っているのに、豪ドル／円はからっきしの苦手という投資家がありました。何が理由かは、本人にも分からないそうですが、実際に過去の戦績を見せてもらうと、豪ドル／円の勝率は格段に低く、まともに利益を手にしていません。そのため、いつからか豪ドル／円に手を出すのをやめたそうです。単に勝ち負けの数だけでなく、利益と損失のバランス、もちろん合計損益もしっかり確認して、相性を確認することを忘れないようにしてください。

このように書くと、「通貨ペアは1つ？」と疑問を持たれます。頻繁にトレードするのは、3通貨ペアくらいを目安にすると良いでしょう。「通貨ペアの相性」を早く見極めることは、とても大切なことです。

・コラム——ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール



世界的な金融緩和と 新興国の急成長の密接な関係

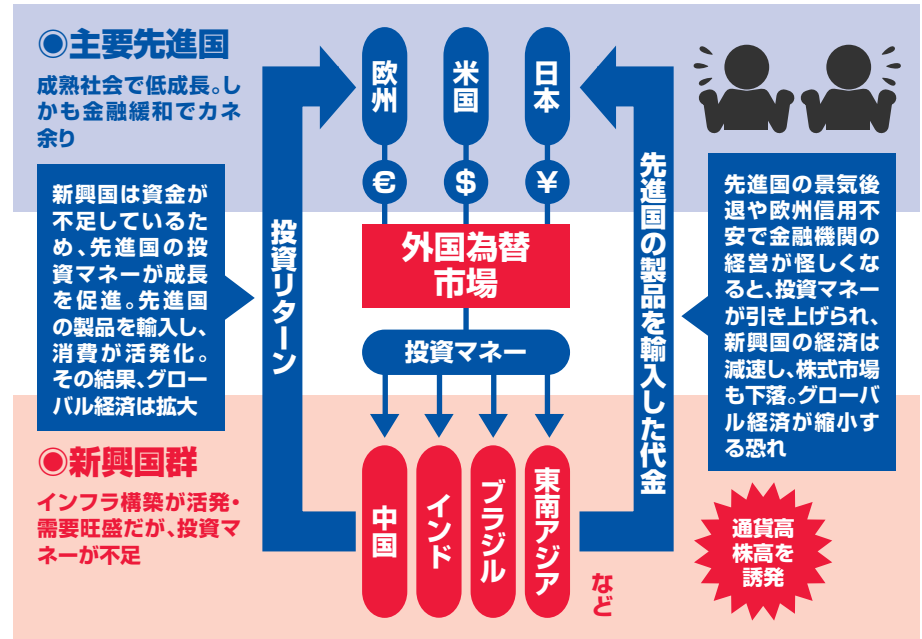
主要先進国は景気がなかなか上向かない中、新興国の経済は好調です。発展途上の国の経済が成長段階に移るとき、欠かせないのが外国からの投資。その原動力になっているのが先進国の金融緩和によるカネ余りです。しかし、過剰な投資はいずれバブル経済に発展し、成長の寿命は短くなります。

先進国の経済は成熟して高い成長が見込めなくなっています。しかし、ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカなどの新興国の経済は好調。この5大新興国の英語の頭文字をとって「BRICS」といわれています。

中国やインド、ブラジルは、人口が多い反面、社会基盤の近代化が遅れ、以前は発展途上国や後進国といわれていました。当然、経済も振るいません。しかし、経済に国境がなくなりグローバル化が進むと、先進国の競争は激化。人件費の低い発展途上国に工場などの生産拠点を移すことでコスト削減を図り、より多くの利益を手にしようとしてきました。そうなれば、発展途上国の経済は潤い、国民の収入は増え、消費が活発化。この好循環が、高い経済成長をもたらしました。

▶▶ 発展途上国がいまや世界経済をけん引する存在に

主要な新興国は膨大な人口を抱えています。コスト削減を狙って進出した先進国の企業にとって成長する途上国は、いつしか、お金を使ってくれ



る「大切なお客さん」に。中国は13億人以上、インドは11億人以上の国民がいますから、特にアジア圏の新興国は企業にとって魅力的です。日米欧の世界三大経済圏をもってしても、この人口には遠く及ばないからです。

発展途上の国が成長するときは、道路や鉄道、空港が整備され、質素な生活をしてきた国民は家電製品や携帯電話を買い求め、家を持つようになります。そうなる原油だけでなく、鉄やレアメタルやレアアースを大量に消費します。日本の1960年代は新幹線や高速道路が整備され、多くの人が家を買って、高度成長期を実現。2000年代に入ると、パソコンや携帯電話を誰もが持つようになりました。中国やインドなどのアジアでは20億人規模で、日本での2つの成長期が同時に訪れているというわけです。

ただし、昔に比べて、経済成長のスピードは加速しているため、頭打ちになるのも早いかもしれません。上昇する傾向にある新興国の金利が下落に転じるとき、ソフトランディングできるのか、バブルが破裂するのか、世界経済の行く末は、新興国の政府と中央銀行に委ねられています。

・コラム—— ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール



新興国の金融引き締めは先進国にとってマイナス

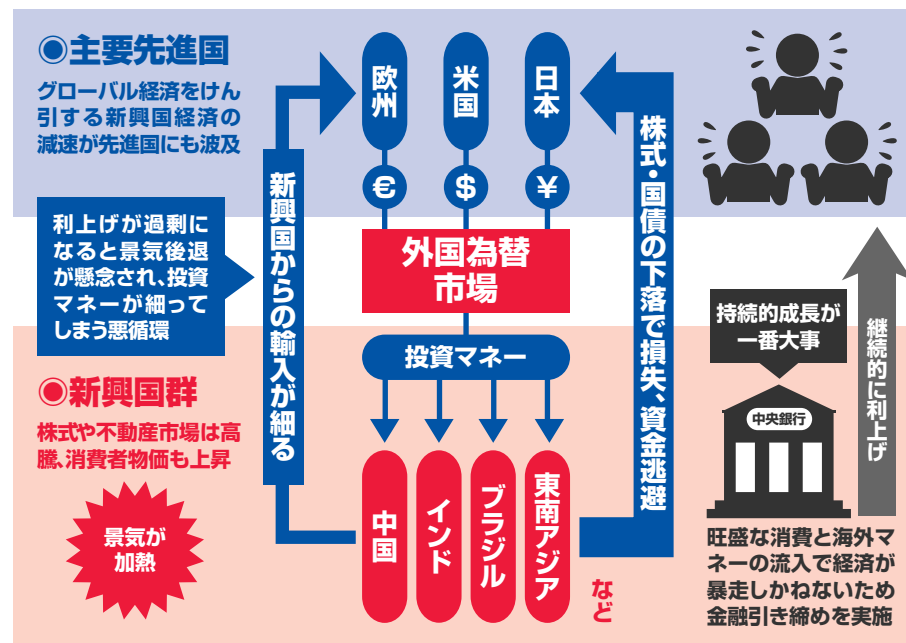
急成長を続ける新興国にとって、大きな課題は成長の寿命をいかに長くするかです。そのため、政府・中央銀行は金利を上手に調節して経済が暴走しないようにします。しかしこれは、一時的に消費意欲が下がるため、先進国の経済にも大きな影響を及ぼします。

道路や鉄道などのインフラ整備と、消費や投資を中心とした高度経済成長が同時に起きている新興国の景気には過熱感が現れています。好景気を長続きさせたい政府や中央銀行は、景気の過熱を防ぐために金利を引き上げるなどして金融を引き締め、経済をコントロールしようとします。

金融引き締めには政策金利の引き上げのほか、中央銀行が保有している国債を銀行に買ってもらい、お金を吸い上げることがあります。また、一般の銀行は、中央銀行にお金を預けることを義務付けられています。その額は中央銀行が決めますが、より多くのお金を中央銀行に預ければ、一般の銀行はお金を貸すことにブレーキを踏まざるを得ません。これによって、投資や投機を抑えるわけです。ここで再び外国為替の話に戻しましょう。

▶▶ 景気が過熱する新興国は金融引き締めに躍起

世界各国との貿易が最も多い中国が金融を引き締めると、外国為替相場に激震が走る ことがあります。つまり、ドルやユーロ、ポンドや豪ドルと



いったほとんどの主要通貨は売られてしまいます。

なぜなら、**新興国の経済活動が減速すれば、回復しそうな先進国の景気は足踏みし、金利の正常化＝政策金利の引き上げが遠のく**からです。先進国の経済が良くなるのも悪くなるのも、中国やインドなどの新興国の景気次第というわけです。

外国為替取引は2つの国の通貨が対象。片方の通貨が下がれば、相手の通貨が上がります。たとえば、中国の金融引き締めでドルや豪ドルが売られると、その相手となる円は必然的に買われます。中国の金融引き締めによる経済の減速は貿易面で日本に大きな影響を及ぼしますが、相対的に円が買われてしまうため、為替レートへの影響も大きいのです。

また、地理的な要因もあります。経済成長が著しい新興国は中国やインドだけではなく、世界の人口の半分近くを数えるアジア圏を1つの経済圏と見ているとの指摘もあります。日本にしていると何だか不思議な感じがしますが、これが外国為替市場の「常識」になりつつあります。

第9章

「マネー& メンタルマネジメント」 を理解しよう

- 001 2つのスキルを身に付けたらお金と心の管理を徹底する … 122
- 002 マネーマネジメントの本質はルールを守り続けること …… 123
- 003 相場で儲けるためには「負けない勝負」を心がける …… 124
- 004 心と身体が充実していないとトレードに集中できない …… 125
- 005 最低限でも、税金の知識を身に付けよう …… 126

第9章

「マネー&メンタルマネジメント」を理解しよう

001

2つスキルを身に付けたら
お金と心の管理を徹底する

投資の達人ほど、お金の管理には超が付くほど神経を使います。また、どんな相場巧者でも、体調がすぐれないときや、気になることがあるときには判断を誤ることがあります。相場の世界に入ると結果ばかりを追いかけてがちですが、その前にお金と心身の管理にも目を向ける必要があります。

FXでも、株式でも、相場で利益をあげるためには、ファンダメンタルズ分析やテクニカル分析を欠かすことはできません。しかし、一定のスキルを身に付けたとき、勝敗を決するのは「**資金管理 (マネーマネジメント)**」と「**心のケア (メンタルマネジメント)**」です。

マネーマネジメントでは、レバレッジやストップロスオーダー、ポジションの増減などについて考えなければなりません。一方、メンタルマネジメントは、日常の健康や心の状態とトレードの関係、大勝ちや大負けしたり、連勝や連敗したりしたときのルールを決めておく必要があります。

▶▶ 慎みたい過剰なレバレッジとストップロスの先延ばし

相場は上か下か、確率は2分の1です。にもかかわらず、いろいろな角度から勉強・分析し、お金や心の管理もしないといけなは、**人は相場に相対すると「欲」と「恐怖」と「拒絶」に支配される**からです。

制限一杯までレバレッジをかけるということは、**早くたくさん儲けたい**

MENTAL

メンタル
マネジメント

心と身体や生活の管理

すべては
投資家自身の
心の問題

軽視は
禁物!

MONEY

マネー
マネジメント

お金とトレードの管理

「正しい判断」の妨げ

- 欲 早くたくさん儲けたい
- 恐怖 損失を確定したくない
- 拒絶 自分の判断を否定できない

「無理のないトレード」の妨げ

- レバレッジ 過剰なレバレッジ
- ストップロス 損失限定の先送り
- 損益の把握 儲かっているときだけ成績表(グラフ)をつける

ファンダメンタルズ&テクニカル分析を極めても
メンタル&マネーマネジメントができなければ、長く続けることはできない

という「**欲**」の現れです。そのため、「もうちょっと利益を伸ばしたい」という気持ちに打ち勝つことができず、ポジションを長く持っしてしまいます。高いレバレッジでトレードするなら保有期間を短くしないと、リスクが高まるばかりです。やはり、レバレッジはほどほど、できれば5倍以内に収め、その中でメリハリをつけたいものです。

ストップロスオーダーは損失を限定する保険とはいえ、損失を被ることに変わりはありません。そのため、あらかじめストップロスオーダーを出さずにいる投資家が非常に多いのが実情です。これは、「**お金が減ってしまうことが確定する**」という「**恐怖**」と、**自分のエントリー判断が誤りだったことを認めたくない**という「**拒絶**」から来るものです。

損失の確定を先延ばしにすれば、損失は逆に拡大するのが相場の常です。そして、耐えきれなくなって決済したところが目先のトレンド転換のポイントだったりします。「**早めのストップロスで仕切り直す**」ことが、**お金と心を正しく管理すること**につながります。

第9章

「マネー&メンタルマネジメント」を理解しよう

002

マネーマネジメントの本質は
ルールを守り続けること

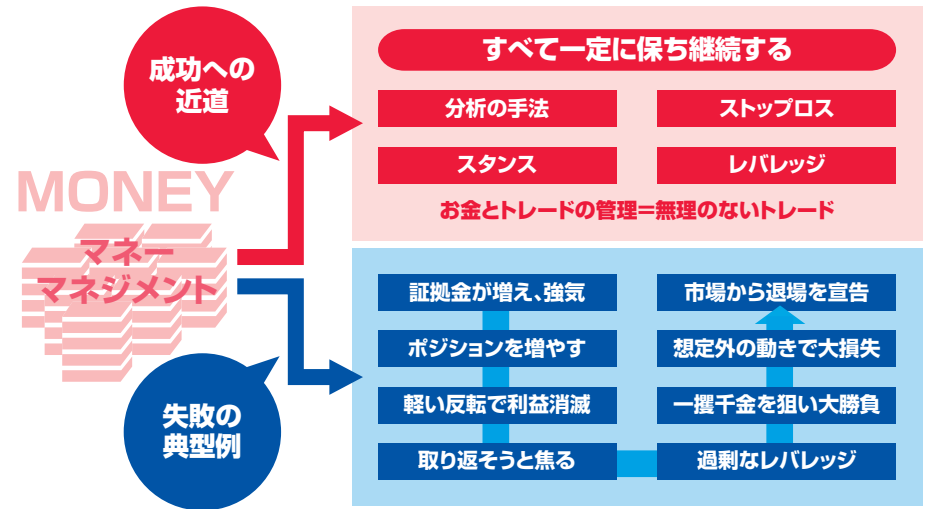
個人投資家がFX投資をするとき、どうしても損益だけに気持ちが行きがちで、「投資の世界は結果がすべて」と考えている人が多いようです。確かに、利益を手にするために投資をするわけですが、投資でお金を殖やすためには「長く続けられる」ことが大事。資金の管理も重要なスキルです。

マネーマネジメントで忘れてはならないのが、ポジション数の増減についてです。この課題に対する明確な答えはありません。ただし、**成功している投資家は、必ずといって良いほどポジションの増減に対するルールを決め、それを守り続けています。**

▶▶ 決めたルールを守り続けることが成功への近道

ある投資家は、FXを始めたときから数千万円の利益を手にするまで、ポジションは常に一定にしていたそうです。証拠金が増えれば、レバレッジが低めでも、大きなポジションを取ることができます。しかし、それをしなかったのは、リズムを乱したくなかったから。この場合のリズムとはかなり精神的なものだそうです。狙う値幅が同じでも、ポジションが増えた分、損失を被ったときの金額が大きくなり、「冷静さを保てない」と自分自身を分析していたからです。

別のケースは、ポジションを増やす代わりに、狙う値幅はポジションを



大きな利益をあげられたのは、トレンドに乗れているから。しかし、証拠金が増えて「もっと儲けたい」とポジションを増やしたときが、往々にして相場が反転するときだったりする。大きな利益をあげたときこそ、「細心の注意」を払おう

増やした分だけ減らすという投資家です。この人は億単位の利益を出した専業トレーダー。たとえば、5つのポジションで30pipsを狙っていたとします。ポジションを2倍にするときには、狙う利益は半分の15pipsというわけです。これは、利益と損失はポジションの増減に関わらず一定にするというのが目的だそうです。

▶▶ ポジションが増えて、狙う値幅が同じだとリスクは高くなる

最も負けやすいのは、証拠金が増えるにつれてポジションもどんどん増やし、狙う値幅は変えないケースです。たとえば、最初はポジション1つに対して1円の利益、50銭の損失で決済するとします。5勝5敗で2.5円の利益です。次はポジションを2つにして同じルールでトレードします。先に5連敗すると5円の損失となり、最初の利益をすべてはき出すだけでなく、2.5円の損失になってしまいます。勝率が五分五分でも、勝ち負けが交互になる保証はありません。この点は注意する必要があります。

第9章

「マネー&メンタルマネジメント」を理解しよう

003

相場で儲けるためには
「負けない勝負」を心がける

「投資とは、恐怖の代償」といわれています。入門したての頃は損をしたくないという気持ち（恐怖）に負け、ポジションを早く閉じがち。ところが、トレードに慣れてくると、「もっと儲けたい」という欲が強くなります。「欲」をいかにコントロールできるかが勝負の分かれ目です。

相場巧者ほど、相場で勝ち抜くには「負けない勝負に徹する」と口にします。初めてこれを耳にする方にとっては「儲けるためにトレードするの、負けない勝負ってどういうこと？」と思われるかもしれません。

負けない勝負とは、いかに負け＝損失を最小限にとどめ、最大限の勝ち＝利益を求めるかということです。

ある専門トレーダーは、ポジションを取った1分後には、思った方向と逆に動いたために決済してしまいます。自分の予定していた損失額よりもずっと小さいにもかかわらずです。その理由を聞くと、「いやな予感がしたから」という曖昧な答えしか返ってきません。

しばらく、トレードしているところを見せてもらうと、わずか数時間で数十回の仕掛けと決済を繰り返しました。ほんの数pipsでも気に入らない動きをしたら決済することで、損失を最小限に抑えていました。そして、数をこなしているうちに、予想したとおりに動いたときには数十～数百pipsの利益を確保して、勝率は低くても大幅な利益を実現していました。

「負けない勝負に徹する」ことの
大切さ

「虫の知らせ」を軽視しない

負けなければ引き分けか勝ちしかない。
いやな予感がしたらポジションを閉じる

「継続すること」を常に考える

大きな負けを被らなければ、継続するこ
とができる。チャンスは必ずある

OCO注文を出す習慣を付ける

「もっと儲けたい」「そのうち戻る」という
気持ちを選避することができる

成功と失敗の分かれ目

「勝とうとしすぎる」ことの
危うさ

早くたくさん儲けようとする

過剰なリスク、過剰なレバレッジが常とな
り、致命的な損失の原因となる

大きな勝負に出ようとする

大勝負に出ると思った時点で、「冷静な判
断力」を失っている

小さな儲けを軽視する

証拠金が少ないと、儲けは小さいのは当
たり前。この気持ちが出てきたら注意

勝とうとする気持ちが強すぎると、無用なリスクを取ることになる。投資の世界は山あり谷あり。「継続することで、多くのチャンスを手に入れる」と肝に銘じよう



このトレーダーのルールは、「考えないこと」だそうです。上か下かの確率ですから、ダメなら損切り、そして次のトレードに賭けることを肝に銘じています。確かに、ちょっと無茶な仕掛けをしていましたが、実にリズムカルで気持ちが良いくらいでした。特殊なケースかもしれませんが、彼は億単位の資金を手にして、日々、トレードに専念しています。

▶▶ 小さな利益も時間が経てば大きなお金に

相場を張るといって、一攫千金のような武勇伝を想像されるかもしれませんが、それは誤りです。「相場は続けることが大事」。これが、相場で大きなお金を手にした人たちの一致した見解です。

「これっぽちの儲けでは……」と、大儲けを企む投資家はかなりの確率で退場を宣告されてしまいます。一方、小さくても身の丈にあった利益を地道に積み上げられる投資家が勝者になるのが相場の世界です。トレードを長く続けられることが一番大事。負けない勝負を心がけましょう。

第9章

「マネー&メンタルマネジメント」を理解しよう

004

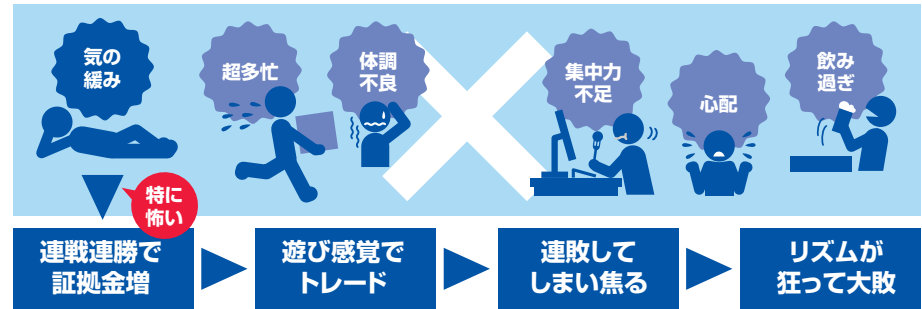
心と身体が充実していないと
トレードに集中できない

チャートを読むにしても、経済指標の動向をチェックするにしても、たとえ何も見ないで経験に頼るトレードをするにしても、集中力を欠かすことはできません。しかし、これは心身ともに充実していればこそ。これを軽んじると、リズムが狂い、大きな損失を被ることだってあるんです。

重要経済指標発表のタイミングや市場の事前予想の確認も万全。トレンドの見極めもバッチリ。仕掛けや手仕舞いの計画もしっかりと立てました。ところが、そんなときに限って、体調が優れなかったり、忙しくて落ちていて相場に向き合えなかったりすることがあります。こういうときは、はやる気持ちを抑えて、トレードを控えましょう。大切なお金を元手に相場を張る＝利益を狙うためには、気力と集中力が必要だからです。

前項で、負けないトレードを心がけることの大切さを解説しましたが、「心と身体」が充実していないと、FXで好成績を残すことはできません。「風邪を引いている」「寝不足」「二日酔い」「超多忙」「心配事がある」などなど……。こうした状態のときにはトレードに集中できないため、買いと売りを間違えたり、指値の入力ミスをしたりします。

あり得ないような話に聞こえるかもしれませんが、これはベテラントレーダーでも起こす過ちです。また、入門したての頃は、1回1回の注文でも手に汗を握る状態のはずですが、だんだん慣れてくると気の緩みもあっ



て、「心と身体の充実度」を軽視しがちです。

▶▶ 遊びのトレードが油断を助長する

気の緩みといえば、大きな値幅で利益を獲得したり、連戦連勝を続けていたりするときです。こういうときは得てして、遊びのトレードをしてしがち。「かなり勝っているから、軽い“勝負”を」という気の緩みが油断を助長し、最終的には調子を落としてしまう原因になります。

遊びのトレードで負けると、大負けしたのではないのに、精神的に追い込まれてしまいます。相場も勝負事ですから、気持ちの入らない勝負をするのであれば、いっそ、儲かったお金をパッと使ってしまうのも手です。

あと、ちょっとした巡り合わせも重要です。トレードの計画を立てているときにやたらケータイに電話がかかってきたり、話しかけられたり。自分は充実していても、邪魔が入るときは「天の声」とわきまえて、その日はトレードを封印しましょう。チャンスはいくらでもあるのですから！

第9章

「マネー&メンタルマネジメント」を理解しよう

005

最低限でも、
税金の知識を身に付けよう

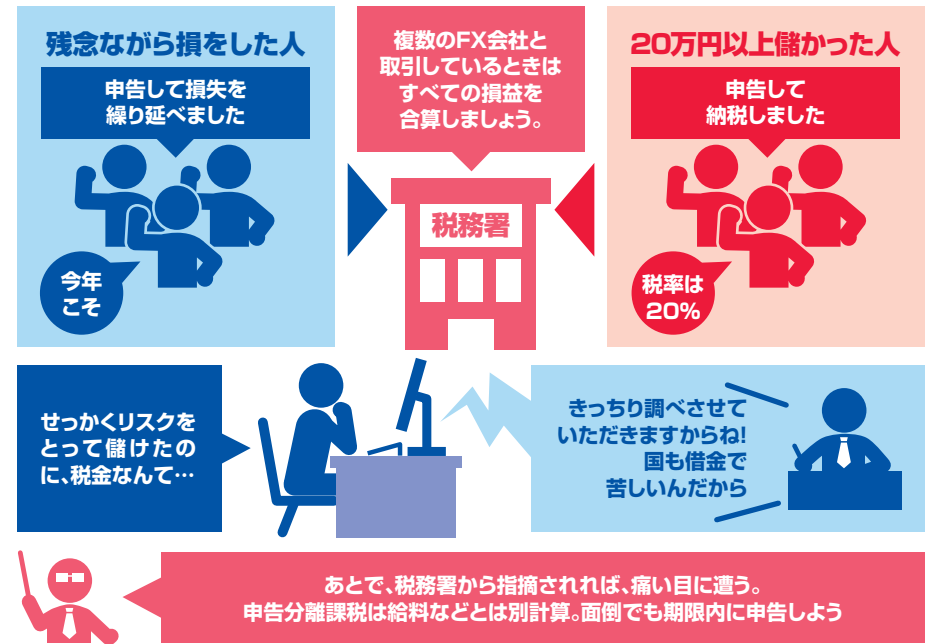
一定の金額以上のお金を稼げば、ついて回るのが税金です。仮に多くの利益をあげることができても、相応の税金を納めていなければ、後で痛い目に遭います。新聞やテレビのニュースで「脱税××」と取り上げられないように、自ら申告して納税する。投資家に課された最低限のルールです。

プロローグで、億単位の利益を手にした投資家が脱税で摘発された話を紹介しました。投資を始めるときには、「数億ものお金を手にしたなら税金くらい……」と思われる方が多いものです。

ところが、億単位とまでいかないまでも、百万単位の利益を手にしただけでも、税金を納める気にならず、申告しないまま、知らんふりを決め込む投資家があります。「あれだけ時間をかけて努力し、リスクをとってきたのに、利益の一部が税金に消えるなんて耐えられない」「自分だけは大丈夫」と軽んじるわけです。そうした気持ちは、もちろん分かります。

以前は、給料などとFXの利益を合算する総合課税でしたし、損失が出ても何の面倒も見てもらえませんでした。また、ご自身の所得によっては、想像以上に課税されることもありました。

しかし、今はFXの利益に対して20%の申告分離課税方式となり、同時に先物取引との損益通算もできるようになりました。そのおかげで儲かったときの負担感は軽減されています。申告分離課税とは、1年間の利益を



計算し、税務署に自ら申告することで納税する制度です。確定申告をする必要のある方は、そのときに一緒に申告すれば済みます。一般的な給料のように源泉徴収されるわけではありませんから、20万円以上の利益が出たときには手続きをしてください。

▶▶ 損失が出ても申告すれば有利に

また、先物取引などを含めて3年間の損益通算も認められるようになりました。たとえば、1年目に50万円の損失、2年目も50万円の損失、3年目は150万円の利益となったとき、3年間で見れば50万円の利益となり、この分に課税されるだけです。そのため、損失が出たときでも、面倒がらずに申告をして損益通算できるようにしておけば、後々有利になるかもしれません。ちなみに、今のケースで1年目の利益が50万円、2年目が50万円の損失なら、2年目からが損益通算の対象になります。くれぐれも間違わないようにしてください。

◆あとながき

▶▶投資は“不労所得”？ とんでもない!!!

マスコミに登場するコメンテーターや評論家は、判で押したように「投資という不労所得を当てにするのはよろしくない」「汗水を垂らしてお金を稼ぐことが大事」と口にし、投資でお金を稼ぐことを非難します。今の日本が高度経済成長期にあるなら、その意見は正しいかもしれませんが。

しかし、経済のデフレ化で景気は低迷し、少子・高齢化が進展して経済が縮小する状況下で、投資により大きな利益を手につづけている人々は、昼夜を問わず努力を積み重ね、それこそ、汗水を垂らして、スキルアップに努めています。今の時代、投資は決して「不労所得、ではないのです。

また、「投資でお金を稼ぐには「才能、が必要だ」と勘違いしている人が多いのも事実です。しかし、決してそうではありません。投資で成功しつづけている人たちは皆、「投資の世界は絶対評価の世界で、会社や上司に縛られることなく、他人の評価も気にする必要はありません。本当の自由があることを知りました。だから、自分や家族のために努力を惜しまないのです」といいます。そして、もう1つ必ず口にすることがあります。

「最初は儲ける極意や秘密があると思っていましたから、そんな情報ばかり探していました。でも、投資で安定的に利益を手にするようになるようになったとき、結局、基本に忠実に投資することが重要だと……。そして、これこそがFXを長く続けられる秘訣だと、ようやく分かりました」

▶▶正しい入り口から入れば、結果は自然についてくる

「基本に忠実な投資」とは、どういうことでしょうか？ それは「正しい知識を身に付けること」と「売買のタイミングを計るスキルを身に付けること」です。この2つは密接に関係しています。

個人投資家が、投資をするために必要な経済や金融などの知識を身に付けるのは、「売買のタイミングを計る」のが目的です。決して、経済や金

融の専門家になろうとしているわけではありません。

この目的がはっきりしてさえいれば、投資の勉強に余計な時間をかけたり、お金を稼ぐのに遠回りをしたりする必要はなく、最短距離でトレードの勝率をあげられるようになり、どんどん面白くなってきます。そして、多くの利益を手にするようになるはずですよ。

「バタフライ・エフェクト」という言葉を、ご存じでしょうか。アメリカの気象学者、エドワード・ローレンツが唱えた「ある場所で蝶が羽ばたきをすると、かなり離れた場所で将来の天候に影響する」という学説です。「最初は無視できるような現象も、時間が経つにつれて、結果が大きく異なる」というたとえによく使われます。

この考え方を投資に当てはめると、「正しい入り口」から入らなければ、将来、あなたが手にするお金は雲泥の差になってしまいます。FXは、やり方次第で、少ない資金を驚くほど大きく殖やすことのできる取引だからです。最短距離で資金を最大に殖やすためには「最初の一步を“正しく”踏み出す」ことが、何よりも重要です。

そういう意味で、あなたがこのレポートを手にしたことは、まさに“幸運”といえるでしょう。そして、この“幸運”を現実の利益に結びつけるためには、目的意識をしっかりと持ち、問題を1つひとつ解決するように心がけ、FX投資の実戦経験を積むように努めてください。

そうすれば、それほど遠くない将来、多くの利益を手にし、「FXを始めて良かった」と実感できる日が訪れることでしょう。このレポートを読まれたすべての人が、大きな成果を手にするのを祈ってやみません。

私たちFPOは、メールマガジンなどで日々、外国為替市場の最新状況やマーケットの動向を見抜くポイントなど、FX投資家が役立つ情報を配信しています。今後は、そちらも参考にしてください。メールマガジンは、弊社ホームページ (<http://www.fpo.bz>) よりご登録いただけます。

筆者を代表して



There is No Royal Road to FX Trading

ディスクレーマー

本書に掲載する内容については万全を期しておりますが、内容の完全性、信憑性を保証するものではなく、これらの情報によって生じた損害について発行者、製作者、データ提供者、チャート提供者、その他関係者は一切の責任を負わず、損害賠償には応じません。最終的な投資判断はご自身でお願いします。また、本書の本文などの無断転載は固くお断りします。ご了承の上、本書をご利用ください。

◆近畿財務局長（金商）第300号 投資助言葉

◆所属団体：一般社団法人日本投資顧問業協会（会員番号022-00222）

デザイン——田中正人(MORNING GARDEN INC)
編集協力——アルケミックス

結果にこだわるトレーダーのための FX(外国為替証拠金取引)投資マスターガイド

発行日——2012年12月1日

発 行——株式会社FPO

〒550-0013

大阪府大阪市西区新町2-4-2

なにわ筋SIAビル7F

<https://www.fpo.bz/>

TEL : 06-6534-2006 FAX : 06-6534-2007